第二條　要塞地帶ノ幅員ハ防禦營造物ノ各突出部ヲ連結スル線ヲ基線トシ此ノ線ヨリ外方一定ノ距離以内ニ於テ之ヲ定ム

第三條　要塞地帶ハ陸地ト海面トヲ問ハス之ヲ三區ニ分チ各區ノ幅員ハ左ノ區別ニ從ヒ陸軍大臣之ヲ定メ並之ヲ告示ス其ノ之ヲ變更スル場合亦同シ但シ陸軍防禦營造物ノ地帶及第七條第二項ノ區域カ海軍防禦營造物ノ地帶及第七條第三項ノ區域ト相關聯スルカ或ハ軍港又ハ海軍用地ニ係ル場合並陸軍用地カ海軍防禦營造物ノ地帶及第七條第二項ノ區域ト相關聯スル場合ニ於テハ陸軍大臣海軍大臣協議ノ上之ヲ定メ連署シテ告示ヲ爲スコトヲ要ス

第一區　基線ヨリ測リ二百五十間以内及基線ト防禦營造物間ノ區域

第二區　基線ヨリ測リ七百五十間以内

第三區　基線ヨリ測リ二千二百五十間以内

第六條　此ノ法律ハ防禦營造物ノ設ナシト雖之ヲ設クルコトニ決定シタル箇所ニ於テ其ノ豫定防禦營造物ノ各突出部ヲ連結スル線ヲ基線トシ第二條第三條及第七條第二項ニ定メタル區域ニ付テ亦之ヲ適用

メ但シ基線以内ノ區域ハ第一區ニ準ス

第七條　何人ト雖要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ要塞地帶内水陸ノ形狀ヲ測量撮影模寫錄取スルコトヲ得ス

前項ノ規定ハ要塞地帶外ト雖第三區ノ境界線ヨリ外方三千五百間以内ノ區域ニ於テ之ヲ適用ス

第二十一條　陸海軍以外ノ官廳ニ於テ第七條第九條第十一條乃至第十五條ニ掲クル事項ヲ爲サントスルトキハ要塞司令官ノ承認第十六條ニ掲クル事項ヲ爲サントスルトキハ陸軍大臣ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス

●陸軍省令第十四號　三十三年六月

要塞地帶法施行規則　（抄錄）

第二條　左ニ掲クル事項ハ許可ヲ受クルノ限ニ在ラス

二　土地ノ丈量但シ地目地類ノ變換、土地分合、境界査定、家屋倉庫ノ新設變更並本項第三號乃至第十號ニ掲クル作業ニ要スルモノニ限ル

○海軍省令第十六號　三十三年六月

要塞地帶法施行規則

第二條　左ニ掲クル事項ハ要塞地帶法ニ依リ許可ヲ受クルヲ要セス

二　土地ノ丈量但シ地目地類ノ變換、土地分合、境界査定、家屋倉庫ノ新設變更並本項第三號乃至第十號ニ掲クル作業ニ要スルモノニ限ル

●勅令第百七十六號　三十一年七月

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ要塞近傍ニ於ケル水陸測量等ノ取締ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　要塞ニ於ケル各防禦營造物ノ周圍ヨリ外方五千七百五十間以內ノ水陸ノ形狀ヲ測量、模寫、撮影、筆記セムトスル者ハ豫メ當該要塞司令官ノ許可ヲ受クヘシ

前項ノ區域內ヲ明治二十二年法律第十九號土地收用法第五條若ハ第七條ニ依リ測量又ハ檢査セントスル者ハ明治二十三年法律第八十七號鑛業條例第四十七條ニ依リ測量セムトスル者ハ豫メ當該要塞司令官ニ屆出スヘシ

▲二十五

前二項ノ場合ニ於テ測量、模寫、撮影、筆記ヲ爲スノ方法區域ハ當該要塞司令官ノ指示ニ從フヘシ

第二條　官廳ニ於テ前條第一項ノ區域內ノ水陸ノ形狀ヲ測量、模寫、撮影、筆記セムトスルトキハ豫メ當該要塞司令官ノ承認ヲ受クヘシ

官廳ニ於テ前條第一項ノ區域內ヲ明治二十二年法律第十九號土地收用法第五條若ハ第七條ニ依リ測量又ハ檢査セムトスルトキハ豫メ當該要塞司令官ニ通知スヘシ

前二項ノ場合ニ於テ測量、模寫、撮影、筆記ヲ爲スノ方法區域ハ當該要塞司令官ト協議シテ之ヲ定ムヘシ

第三條　前二條ノ規定ハ要塞ノ設ナシト雖之ヲ設クルコトニ決定シタル箇所ニ於テ其豫定各防禦營造物ノ周圍ヨリ外方五千七百五十間以內ノ水陸ノ形狀ヲ測量、模寫、撮影、筆記スル場合ニモ之ヲ適用ス

●勅令第二百七十六號　二十三年十一月

官有地取扱規則　(抄錄)

第七條　官有地ヲ開墾セムコトヲ請フモノアルトキハ無料ニテ之ヲ貸付スヘシ但開墾成功ノ後事業者ニ於テ該地ヲ拂下ケムトスルトキハ

豫メ契約ニ依テ其代價ヲ定メ置クヘシ

第八條 官有地ト民有地ノ交換ハ兩地ノ坪數及價格相均シキモノニアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第十二條 官ニ屬スル公有水面ヲ埋立テ民有ト爲サムコトヲ請フモノアルトキハ公衆ノ妨害トナラサル部分ニ限リ之ヲ許スコトヲ得

●勅令第百三十五號　二十三年七月

官有地特別處分規則

第一條 內務大臣ハ左ノ場合ニ限リ官有地ヲ競爭ニ付セス隨意ノ契約ヲ以テ貸渡又ハ賣渡スコトヲ得

一 直接公用ニ供スル爲又ハ公共ノ利益トナル事業ノ爲府縣郡市町村及公共組合又ハ其ノ他ノ起業者ニ官有地ヲ貸渡又ハ賣渡ストキ

二 不用ニ屬スル官有地ニシテ其ノ評定價格四百圓以內坪數六百坪未滿ノモノヲ賣渡又ハ其ノ貸渡料一個年四十圓以內ノモノヲ貸渡ストキ但望人二名以上ナルトキハ此限ニ在ラス(三十九年八月勅令第二百二十二號ヲ以テ改正)

三 鑛山ニ於ケル鑛物運搬道路、冷温泉場ニ於ケル汲泉場又ハ導泉敷地ノ如キ官許ヲ興ヘタル主タル事業ニ直接附隨シ必要缺クヘカラスト認メタル官有地ヲ其ノ事業者ニ貸渡又ハ賣渡ストキ

四 會計法施行以前土地ノ形質ヲ變更シ又ハ建物ヲ建設スル爲貸渡シタル官有地ヲ其借地人ニ賣渡シ又ハ引續キ貸渡ストキ

第二條 直接公用ニ供スル官有地ヲ特ニ府縣郡市町村又ハ公共組合ノ直接公用ニ供スルトキハ借地料ヲ徵收セサルモノトス

第三條 府縣郡市町村又ハ公共組合ニシテ直接公用ニ供スル官有地ノ修理保存費ヲ負擔スルモノハ其直接公用ヲ廢スルトキ官有財産管理上必要ノモノヲ除ク外之ヲ其費用負擔者ニ無代下付ス府縣郡市町村又ハ公共組合ニ於テ其土地ヲ賣拂ハムトスルトキハ隣接地主ハ先買ノ權ヲ有スルモノトス

第四條 北海道官有未開ノ土地竝官有森林原野ニハ本令ヲ適用セス

●▲二十六

●法律第八十五號

國有林野法

三十二年三月

第一條　此ノ法律ニ於テ國有林野ト稱スルハ國ノ所有ニ屬スル森林原野ヲ云フ

第二條　國有林野ニシテ國土保安又ハ國有林野ノ經營上國有トシテ保安ノ必要アルモノハ賣拂讓與又ハ交換スルコトヲ得ス但シ公用又ハ公益事業ノ爲必要アルトキ及第十五條ノ場合ハ此ノ限ニアラス

第三條　前條ノ國有林野ト雖モ他ノ官有地ニ編入スルノ必要アルトキハ之カ組換ヲ爲スコトヲ得組換ヲ爲シタル土地ニシテ其使用ヲ廢シタル場合ニ於テ林野ニ復スヘキ必要アルモノハ更ニ國有林野ニ編入ス

社寺上地ニシテ其ノ境内ニ必要ナル風致林野ハ區域ヲ畫シテ社寺現境內ニ編入スルコトヲ得

第八條　國有林野ハ左ノ場合ニ限リ隨意契約ヲ以テ賣拂フコトヲ得

一　公用又ハ公益事業ノ爲必要アルトキ

二　市町村又ハ公立小學校ノ基本財產ニ充ツルトキ

三　社寺上地ノ森林ヲ其社寺ニ賣拂フトキ

四　命令ノ定ムル所ニ依リ特別ノ縁故アル林野ヲ其ノ縁故アル者ニ賣拂フトキ

五　民有地道路河川等ニ介在スル十町歩以內ノ林野ヲ賣拂フトキ

六　道路溜池堤塘溝渠等ノ敷地トシテ貸付シアル林野ヲ其ノ借地人ニ賣拂フトキ

七　此ノ法律施行以前ニ開墾牧畜又ハ植樹ノ爲貸付シタル林野又ハ第九條ノ開墾地ノ其ノ事業ヲ成功シタル者ニ賣拂フトキ

第九條　國有林野ハ開墾ノ成功ヲ條件トシ豫メ其ノ價格及成功期限ヲ定メ隨意契約ヲ以テ賣拂ノ豫約ヲ爲スコトヲ得

第十五條　國有林野ハ左ノ場合ニ限リ讓與スルコトヲ得

一　段別一町歩以下ニシテ公立ノ學校又ハ病院ノ用地ニ供スルトキ

二　府縣郡市町村及其ノ他ノ公共團體ニ於テ道路、河川、港灣、水道、堤塘、溝渠、溜池、火葬場、墓地、公園等公共ノ用ニ供スルトキ

第十六條　用途ヲ指定シテ讓與シタル國有林野ヲ指定ノ期間內ニ其ノ用途ニ使用セサルトキ又ハ一旦其ノ用途ニ使用シタル後當該官廳ニ於テ指定シタル期間其ノ使用ヲ繼續セサルトキハ之ヲ返還セシムル

コトヲ得
前項ニ依リ林野ヲ返還セシメタル場合ニ於テハ其ノ林野ノ上ニ設定シタル第三者ノ權利ハ消滅ス

●法律第九十九號　三十二年四月

國有土地森林原野下戻法

第一條　地租改正又ハ社寺上地處分ニ依リ官有ニ編入セラレ現ニ國有ニ屬スル土地森林原野若ハ立木竹ハ其ノ處分ノ當時之ニ付所有又ハ分收ノ事實アリタル者ハ此ノ法律ニ依リ明治三十三年六月三十日迄ニ主務大臣ニ下戻ノ申請ヲ爲スコトヲ得
前項ノ期限ヲ經過シタルモノ又ハ裁判所ノ判決ヲ受ケタルモノハ下戻ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス
府縣設置以後上地處分ヲ受ケタル土地及地租改正處分既濟地方ニ於ケル未定地脫落地ニ付テハ此ノ法律ノ規定ヲ準用ス
第二條　下戻ノ申請ヲ爲ス者ハ第一條ノ事實ヲ證スル爲少クトモ左ノ書面ノ一ヲ添付スルコトヲ要ス
一　公簿若ハ公書ニ依リ所有又ハ分收ノ事實ヲ證スルモノ

二　高受又ハ正租ヲ納メタル證アルモノ
三　拂下下付賣買讓與質入書入寄附等ニ依ル所有又ハ分收ノ事實ヲ證スヘキモノ
四　木竹又ハ其ノ賣却代金ヲ分收シタル證アルモノ
五　私費ヲ以テ木竹ヲ植付ケタル證アルモノ
六　私費ヲ以テ田畑宅地ニ開墾シタル證アルモノ
第三條　前條ノ證據書類ニシテ所有又ハ分收ノ事實ヲ證スルニ足ルト認ムルトキハ主務大臣ハ其ノ下戻ヲ爲スヘシ
第四條　下戻ヲ受ケタル者ハ其ノ下戻ニ因リテ所有又ハ分收ノ權利ヲ取得ス
前項ニ依リ所有又ハ分收ノ權利ヲ取得シタル者ハ其ノ土地森林原野若クハ立木竹ニ關シ第三者ニ對スル國ノ權利、義務ヲ承繼ス
第五條　第二條ニ依リ下戻ヲ受ケタルモノト雖公用又ハ社寺境內ニ供セラルルモノハ其公用又ハ社寺境內ヲ廢シタル後ニアラサレハ權利ヲ行使スルヲ得ス
第六條　下戻申請ニ對シ不許可ノ處分ヲ受ケタル者其ノ處分ニ不服ア

ルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七條　此ノ法律施行以前ニ差出シタル下戻ニ關スル申請書又ハ願書ハ此ノ法律ニ依リタルモノト看做ス

●法律第二十九號　三十三年三月

土地收用法　（抄錄）

第一章　總則

第一條　公共ノ利益ト爲ルヘキ事業ノ爲之ニ要スル土地ヲ收用又ハ使用スルノ必要アルトキハ其ノ土地ハ本法ノ規定ニ依リ之ヲ收用又ハ使用スルコトヲ得

本法ニ於テ使用ト稱スルハ權利ノ制限ヲ包含ス

第二條　土地ヲ收用又ハ使用スルコトヲ得ル事業ハ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノナルコトヲ要ス

一　國防其ノ他軍事ニ關スル事業

二　官廳又ハ公署建設ニ關スル事業

三　教育、學藝又ハ慈善ニ關スル事業

四　鉄道、軌道、道路、橋梁、河川、堤防、砂防、運河、用惡水路、溜池、船渠、港灣、埠頭、水道、下水電氣機、瓦斯燈又ハ火葬場ニ關スル事業

五　衛生、測候、航路標識、防風、防火、水害豫防其ノ他公用ノ目的ヲ以テ國府縣郡市町村其ノ他公共團體ニ於テ施設スル事業

第四章　收用ノ手續

第十九條　内閣ノ認定ノ公告ノ後起業者ノ申請ニ依リ地方長官ハ收用又ハ使用スヘキ土地ノ細目ヲ公告シ又ハ之ヲ土地所有者及關係人ニ通知スヘシ

軍機ニ關スル事業ニ付テハ主務大臣ハ地方長官ニ收用又ハ使用スヘキ土地ノ細目ヲ通知シ地方長官ハ之ヲ土地所有者及關係人ニ通知スヘシ

第二十二條　第十九條ノ地方長官ノ公告又ハ通知ノ後起業者ハ其ノ土地ニ關スル權利ヲ取得スル爲土地所有者及關係人ニ協議ヲ爲スヘシ

前項ノ協議調ハサルトキ又ハ協議ヲ爲スコト能ハサルトキハ起業者ハ收用審査會ノ裁決ヲ求ムルコトヲ得

第六章　損失ノ補償

第四十八條　收用スヘキ土地物件ニ付テハ相當ノ價格ニ依リ其損失ヲ補償スヘシ
使用スヘキ土地ニ付テハ其土地及近傍類地ノ料金ニ依リ其損失ヲ補償スヘシ

第五十條　土地ノ一部ヲ收用又ハ使用スルニ因リテ殘地ヲ從來用井タル目的ニ供スルコト能ハサルトキハ土地所有者ハ其ノ全部ノ收用ヲ請求スルコトヲ得

第七章　收用ノ效果

第六十條　起業者ハ收用又ハ使用ノ時期迄ニ補償金ヲ拂渡スヘシ
左ニ掲ケタル場合ニ於テハ補償金ヲ供託スルコトヲ得

一　補償金ヲ受クヘキ者カ其ノ受領ヲ拒ミタルトキ又ハ之ヲ受領スルコト能ハサルトキ

二　起業者カ過失ナクシテ補償金ヲ受クヘキ者ヲ確知スルコト能ハサルトキ

三　起業者カ收用審査會ノ裁決中補償金額ノ決定ニ對シテ不服アルトキ但補償金ヲ受クヘキ者ノ請求アルトキハ起業者ハ自己ノ見積金額ヲ拂渡スヘシ

四　起業者カ補償金拂渡ノ差押又ハ假差押ヲ受ケタルトキ

第六十一條　土地所有者及關係人ハ收用又ハ使用ノ時期迄ニ土地物件ヲ引渡シ又ハ物件ヲ移轉スヘシ但左ニ掲ケタル場合ニ於テハ起業者ノ請求ニ依リ市町村長ハ土地所有者及關係人ニ代ルモノトス

一　土地所有者及關係人カ土地物件ヲ引渡シ又ハ物件ヲ移轉スルコト能ハサルトキ

二　起業者ノ過失ナクシテ土地所有者及關係人ヲ確知スルコト能ハサルトキ

第六十三條　土地物件ヲ收用スルトキハ收用ノ時期ニ於テ所有權ハ起業者之ヲ取得シ其ノ他ノ權利ハ消滅ス
土地ヲ使用スルトキハ其ノ權利ハ使用ノ時機ニ於テ起業者之ヲ取得シ其ノ他ノ權利ハ使用ノ期間其ノ行使ヲ停止セラル但シ使用ヲ妨ケサルモノハ此ノ限ニ在ラス

第六十六條　收用ノ時期ヨリ二十箇年內ニ事業ヲ廢シ其ノ他ノ事故ニ因リテ收用シタル土地ノ全部又ハ一部カ不用ニ歸シタルトキハ舊所

有者又ハ其ノ相續人ハ補償價格ヲ以テ之ヲ買受ルコトヲ得但シ第五十條ノ規定ニ依リテ收用シタル殘地ハ其ノ接續部分ノ不用ニ歸シタル時ニ非サレハ之ヲ買受ルコトヲ得ス

前項ノ場合ニ於テ買受ハ第三者ニ對シテモ其效力ヲ有ス

第一項ノ期間内ニ於テ收用シタル土地ヲ他ノ軍機ニ關スル事業又ハ内閣ノ認定シタル事業ニ供スルトキハ不用ニ歸シタルモノト看做サス

第六十七條　前條ノ不用ノ土地アルトキハ起業者ハ舊所有者又ハ其ノ相續人ニ通知スヘシ但シ起業者ノ過失ナクシテ之ヲ確知スルコト能ハサルトキハ少クトモ三回ノ公告ヲ爲スヘシ

前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ二箇月内又ハ第三回ノ公告終了ノ日ヨリ六箇月内ニ舊所有者又ハ其ノ相續人カ買受ノ通知ヲ爲ササルトキハ其ノ權利ヲ失フ

●法律第七十一號　二十三年八月

軌道條例

第一條　一般運輸交通ノ便ニ供スル馬車鉄道及其ノ他之ニ準スヘキ軌道ハ起業者ニ於テ内務大臣ノ特許ヲ受ケ之ヲ公共道路上ニ布設スルコトヲ得

第二條　馬車鉄道及其ノ他之ニ準スヘキ軌道布設ノ爲起業者ノ負擔ヲ以テ在來ノ道路ヲ取擴メ又ハ更正シ若ハ新ニ軌道敷ヲ設クルノ必要アルトキハ之ニ要スル土地ハ起業者ニ於テ土地收用法ノ規定ニ依リ内閣ノ認定ヲ經テ之ヲ收用スルコトヲ得

第三條　在來ノ道路ヲ取擴メ又ハ更正シタル部分及新設シタル軌道敷ハ倶ニ道路敷ニ編入ス

●法律第七十一號　二十九年四月

河川法（抄錄）

第三條　河川竝其ノ敷地若ハ流水ハ私權ノ目的トナルコトヲ得ス

●法律第六十四號　三十三年三月（三十三年十月一日ヨリ施行ノ旨同年勅令第三三〇號ニテ公布）

私設鉄道法（抄錄）

第一條　本法ハ軌道條例其ノ他特別ノ法令ニ規定スルモノヲ除クノ外一般運送ノ用ニ供スル私設鉄道ニ之ヲ適用ス

私設鉄道株式會社ノ運送營業ノ爲ニ支線ヲ敷設スルトキハ現ニ一般

運送ノ用ニ供セサル場合ト雖本法ヲ適用ス

第四十條　軌間ハ特許ヲ得タルモノヲ除クノ外三呎六吋トス

第四十一條　左ニ揭クルモノヲ以テ鉄道用地トス

一　線路用地

二　停車場、信號所及車庫、貨物庫等ノ建設ニ要スル土地

三　鉄道構內ニ職務上常住ヲ要スル鉄道員ノ舍宅及運輸保線ニ従事スル鉄道員ノ駐在所等ノ建設ニ要スル土地

四　鉄道ニ要スル車輛、器具ヲ修理製作スル工場及其ノ資料器具ヲ貯藏スル倉庫ノ建設ニ要スル線路ニ沿ヒタル土地

線路用地幅員ハ築堤、切取、架橋等工事ノ必要ニ應シ工事方法書ニ依リ之ヲ定ム

●法律第二十九號　二十三年四月

民事訴訟法

第六百四十三條　申立ニハ執行力アル正本ノ外左ノ證書ヲ添付スヘシ

第一　登記簿ニ債務者ノ所有トシテ登記シタル不動産ニ付テハ登記判事ノ認證書

第二　登記簿ニ登記アラサル不動産ニ付テハ債務者ノ所有タルコトヲ證スヘキ證書

第三　地所ニ付テハ國郡市町村、字、番地、地目、反別若クハ坪數、土地臺帳ニ登錄シタル地價及其地所ニ付キ納ムヘキ一ケ年ノ租稅其ノ他ノ公課ヲ證スヘキ證書

第四　建物ニ付テハ國郡市町村、字、番地、搆造ノ種類、建坪及ヒ其建物ニ付キ納ムヘキ一ケ年ノ公課ヲ證スヘキ證書

第五　地所、建物ニ付キ賃貸借アル場合ニ於テ其期限並ニ借賃ヲ證スヘキ證書

第二號、第三號及ヒ第四號ノ要件ニ付テハ債權者公簿ヲ主管スル官廳ニ其證明書ヲ求ムルコトヲ得

第六百五十四條　裁判所ハ競賣開始ノ決定ヲ爲シタルトキハ租稅其他ノ公課ヲ主管スル官廳ニ通知シ其ノ不動産ニ對スル債權ノ有無及ヒ限度ヲ申出ツ可キコトヲ期間ヲ定メテ催告スヘシ

第七百四十八條　假差押ノ執行ニ付テハ強制執行ニ關スル規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ差異ノ生スルトキハ此限ニ在ラス

▲三十二

第七百六條　強制管理ニ付テハ第六百四十二條、第六百四十三條、第六百四十四條第一項第三項及第六百五十一條乃至第六百五十四條ノ規定ヲ準用ス
不動産カ債權者ノ債權ニ付キ不動産上ノ義務ヲ負フタル場合ニ於テハ第六百四十三條第一號第二號ニ依リ提出スヘキ證書ハ不動産ヲ債務者カ占有スルコトヲ疏明スル證書ヲ以テ足ル

●法律第四十三號　四十年四月二十二日

森林法（抄錄）

第一章　總則

第一條　森林ハ其ノ所有者ニ依リ之ヲ分チテ御料林、國有林、公有林社寺有林及私有林トス

前項ノ種別ニ依リ難キ森林ニ關シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ本法ヲ適用ス

第三條　本法ニ於テ開墾ト稱スルハ地租條例ニ規定スルモノ、外燒畑、切替畑其ノ他土地ノ形質ヲ變更スル行爲ヲ謂フ

第七條　公園、社寺境內及命令ヲ以テ定ムル土地ニ付テハ本法ヲ適用セス但シ命令ニ別段ノ規定アルトキハ此ノ限ニ在ラス

第八條　本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ依リ書類ヲ送付スヘキ場合ニ於テ送付ヲ爲スコト能ハサルトキハ官報又ハ行政廳慣行ノ公布式ヲ以テ之ヲ公示シ其ノ公示ノ日ヨリ三十日ヲ經過シタルトキハ其ノ末日ニ於テ送付アリタルモノト看做ス

第十條　公有林、社寺有林又ハ私有林ニシテ荒廢ノ虞アルトキハ地方長官ニ於テ施行ノ方法ヲ指定スルコトヲ得

前項指定ノ方法ニ違反シ伐木ヲ爲シタル者ニハ地方長官其ノ伐採ヲ停止シ伐木跡地ニ造林ヲ命スルコトヲ得

第二十五條第二項ノ規定ハ前二項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二章　營林ノ監督

第十二條　本法施行以前ヨリ荒廢ニ歸シタル森林ニ付新ニ造林シタルトキハ其ノ納稅義務者ノ申請ニ依リ其ノ造林シタル部分ニ限リ三十年以內地租ヲ免スルコトヲ得

前項ノ規定ハ原野、山岳又ハ荒蕪地ニ新ニ造林シタル場合ニ之ヲ準用ス

府縣市町村其ノ他ノ公共團體ハ前二項ニ依リ地租ヲ免セラレタル土地ニ對シ租稅其ノ他ノ公課ヲ課スルコトヲ得ス

第十三條　公有林、社寺有林又ハ私有林ニ付地方長官ハ土地ノ狀況ニ依リ箇所及期間ヲ指定シ落葉、落枝、柴草、土石、樹根、草根、切芝ノ採取若ハ採掘ニ關スル制限又ハ禁止ヲ爲スコトヲ得

第三章　保安林

第十四條　主務大臣ハ左ニ揭クル場合ニ於テ森林ヲ保安林ニ編入スルコトヲ得

一　土砂ノ壞崩、流出ノ防備ノ爲必要ナルトキ
二　飛砂ノ防備ノ爲必要ナルトキ
三　水害、風害、潮害ノ防備ノ爲必要ナルトキ

四　頽雪又ハ墜石ニ因ル危險ノ防止ノ爲必要ナルトキ
五　水源涵養ノ爲必要ナルトキ
六　魚附ノ爲必要ナルトキ
七　航行ノ目標ノ爲必要ナルトキ
八　公衆ノ衛生ノ爲必要ナルトキ
九　社寺、名所又ハ舊跡ノ風致ノ爲必要ナルトキ

第十八條　保安林ノ編入解除ヲ爲サムトスルトキ又ハ地方長官其ノ申請ヲ受理シタルトキハ地方長官ニ於テ其ノ旨ヲ森林所有者、土地所有者其ノ他土地ニ付登記シタル權利ヲ有スル者ニ通知シ且慣行ノ公布式ヲ以テ之ヲ告示シ森林所在ノ市町村役場ニ之ヲ掲示スヘシ

地方長官ハ前項告示ノ日ヨリ三十日ヲ經過シタル後保安林ノ編入解除ヲ地方森林會ノ議ニ付スヘシ

第二十條　第十九條ノ告示ニシテ保安林編入ニ關スルモノナルトキハ其ノ告示ノ日ヨリ第二十三條ノ告示ノ日迄其ノ森林ニ於テ木竹ノ伐採、開墾又ハ土石、切芝、樹根、草根、埋木ノ採取若ハ採掘ヲ爲スコトヲ得ス但シ地方長官ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二十三條　主務大臣ニ於テ保安林ノ編入解除ニ關スル處分ヲ爲シタルトキハ官報ヲ以テ之ヲ告示シ地方長官ヲシテ其ノ森林所有者ニ其ノ旨ヲ通知シ且所在ノ市町村役場ニ掲示セシムヘシ

地方長官ニ於テ第三十七條ノ二ノ規定ニ依リ保安林ノ編入解除ニ關スル處分ヲ爲シタルトキハ前項ノ手續ヲ爲スヘシ（四十四年六月法律第七十五號追加）

第二十五條　地方長官ニ於テ保安林ノ編入ニ關シ必要アリト認ムルトキハ其ノ森林ニ於ケル木竹ノ伐採ヲ停止スルコトヲ得但シ其ノ停止期間ハ一箇年ヲ超ユルコトヲ得ス

前項ニ依リ木竹ノ伐採ヲ停止セラレタル森林ト雖モ保育ノ爲必要ナルトキ又ハ已ムコトヲ得サル事由アルトキハ地方長官ノ許可ヲ得テ之ヲ伐採スルコトヲ得

第二十六條　保安林ニ於テハ地方長官ノ許可ヲ得ルニアラサレハ木竹ノ伐採、傷害、開墾又ハ土石、切芝、樹根、草根、埋木ノ採取若ハ採掘ヲ爲シ又ハ家畜ヲ放牧スルコトヲ得ス

第三十二條　主務大臣國土保安上必要アリト認ムルトキハ保安林以外ノ森林ニ付區域又ハ箇所ヲ定メテ開墾ヲ制限又ハ禁止スルコトヲ得

第三十六條　主務大臣ニ於テ必要アリト認ムルトキハ原野、山岳其ノ他ノ土地ニシテ第十四條第一號乃至第五號ノ場合ニ該當スルモノニ付本章ノ規定ヲ準用スルコトヲ得

第七章　罰則

第九十六條　第二十條ニ違反シ又ハ第二十五條第一項ノ停止ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九十七條　第二十六條ニ違反シ又ハ第三十二條ノ制限若ハ禁止ニ違反シタル者ハ貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

第百四條　第三十六條ニ依ル土地ハ本章ノ適用上之ヲ森林ト看做ス

第八章　附則

第百七條　本法施行前森林タリシモノニシテ本法施行以前ヨリ荒廢ニ屬シタルモノハ地方長官ニ於テ造林ヲ命スルコトヲ得

前項ニ依リ造林ノ命令ヲ受ケタル者カ造林ヲ怠リタル場合ニ付テハ第十一條ノ規定ヲ準用ス

第百八條　舊法第三十條ニ依リ保安林ト爲シタルモノニシテ本法施行ノ際現ニ保安林タルモノハ之ヲ保安林トス

●▲三十五

(參照)舊法第三十條　從來ノ禁伐林、風致林又ハ伐木停止林ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ保安林トシ其ノ森林ニ對スル從來ノ制限ハ仍其ノ效力ヲ有ス

第百十條　舊法又ハ舊法ニ基キテ發シタル命令ノ規定ニ依リテ爲シタル處分、議決、申請、請求、手續其ノ他ノ行爲ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ依リテ之ヲ爲シタルモノト看做ス但シ本法ニ基キテ發スル命令ニ別段ノ規定アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

●農商務省令第二十一號　四十年十二月二十六日

森林法施行規則（抄錄）

第六條　森林法第十三條ノ規定ニ依ル制限又ハ禁止ハ慣行ノ公布式ヲ以テ之ヲ告示スヘシ

第九條　保安林ノ編入解除ニ關スル處分ノ告示アリタルトキハ地方長官ハ遲滯ナク森林法第二十三條ノ通知及揭示ヲ爲スヘシ

第十條　保安林ニ關シ左ノ各號ノ一ニ該當スル事項發生シタルトキハ其ノ所有者ハ其ノ都度之ヲ地方長官ニ屆出ツヘシ森林法第十八條ノ規定ニ依ル告示アリタル森林ニ關シテモ亦同シ

一　森林所有者ノ變更　二　地番ノ分合

三　地形又ハ林相ノ異動但シ輕微ナルモノヲ除ク

前項第一號ノ屆出ハ新ニ所有者トナリシ者ニ於テ之ヲ爲シ屆書ニ其ノ變更ヲ證スル書面ヲ添附スヘシ

第十九條　森林法第三十二條ノ規定ニ依ル開墾ノ制限又ハ禁止ハ官報ヲ以テ之ヲ告示スヘシ

第四十七條　第十條ノ規定ハ森林法第百七條ノ規定ニ依リ造林ヲ命シタルモノニ之ヲ準用ス

●農商務省訓令第三十號　四十年十二月二十六日

森林法施行手續（抄錄）

第三條　地方長官ハ保安林ノ編入解除及森林法第三十二條ノ處分ニ關スル調査ヲ行フヘシ

前項ノ調査ハ利害關係顯著ナルモノヨリ逐次之ニ着手スヘシ但シ保安林ノ編入解除ニ付申請アリタルトキ又ハ官廳ノ通知アリタルトキハ速ニ其ノ箇所ノ調査ヲ行フヘシ

第十六條　地方長官ハ保安林ニ付開墾許可ノ申請アリタル場合ニ於テハ其ノ開墾ノ爲森林タルヲ失ハサルモノヽ外之ヲ許可スルヲ得ス

●大藏省令第一號　四十一年一月十六日

明治四十年法律第四十三號森林法第十二條ニ依リ造林地ノ地租免除ヲ得ムトスル者ハ所轄税務署長ニ申請スヘシ

●大藏省訓令第一號　四十一年一月十六日　税務監督局　税務署

明治四十年法律第四十三號森林法第十二條ニ依リ造林地ノ地租免除ヲ申請シタル者アルトキハ地方廳ト協議シ相當免租年期ヲ定メ之カ許可ヲ與フヘシ但シ許可シタルトキハ免租年期及段別ヲ地方廳ニ通知スヘシ

●勅令第六號　四十四年二月九日（抄錄）

第一條　森林法ハ沖繩縣ニ之ヲ施行ス

附則

本令ハ明治四十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十年勅令第三百五十號ハ之ヲ廢止ス

●法律二十九號　三十年三月二十七日

砂防法（砂錄）（三十年四月一日ヨリ施行）

第一章　總則

第一條　此ノ法律ニ於テ砂防設備ト稱スルハ主務大臣ノ指定シタル土地ニ於テ治水上砂防ノ爲施設スルモノヲ謂ヒ砂防工事ト稱スルハ砂防設備ノ爲ニ施行スル作業ヲ謂フ

第二條　砂防設備ヲ要スル土地又ハ此ノ法律ニ依リ治水上砂防ノ爲一定ノ行爲ヲ禁止若ハ制限スヘキ土地ハ主務大臣之ヲ指定ス

第三條　此ノ法律ニ規定シタル事項ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ主務大臣ノ指定シタル土地ノ範圍外ニ於テ治水上砂防ノ爲施設スルモノニ準用スルコトヲ得

第二章　土地ノ制限及砂防設備

第四條　第二條ニ依リ主務大臣ノ指定シタル土地ニ於テハ地方行政廳ハ治水上砂防ノ爲メ一定ノ行爲ヲ禁止若ハ制限スルコトヲ得

前項ノ禁止若ハ制限ニシテ他府縣ノ利益ヲ保全スル爲必要ナルカ又ハ其ノ利害關係一府縣ニ止マラサルトキハ主務大臣ハ前項ノ職權ヲ

施行スルコトヲ得

第十一條　第二條ニ依リ主務大臣ノ指定シタル土地ニ對シテハ勅令ノ定ムル所ニ從ヒ地租其ノ他ノ公課ヲ減免スルコトヲ得

第三章　砂防ニ關スル費用ノ負擔土地所有者ノ權利義務竝收入等

第二十四條　第二條ニ依リ主務大臣ノ指定シタル土地ノ所有者若ハ關係人ハ行政廳若ハ其ノ命令ヲ受ケタル私人ニ於テ其ノ土地ニ砂防工事ヲ施行シ又ハ砂防設備ノ維持ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十七條　砂防設備ヨリ生スル收入ハ府縣ニ歸ス但地方行政廳ハ其ノ收入ヲ第二條ニ依リ主務大臣ノ指定シタル土地若ハ其ノ土地ニ在ル森林ノ所有者又ハ其ノ砂防設備ノ施設者ニ下付スルコトヲ得

第二十八條　砂防設備ニシテ其ノ公用ヲ廢シタルトキハ地方行政廳ハ之ヲ其ノ砂防設備ノ現在スル土地若ハ森林ノ所有者ニ下付スルコトヲ得

第四章　警察、監督及強制手續（自第二十九條至第四十一條）

第五章　訴願及訴訟（自第四十二條至第四十六條）

●▲三十七

▲砂防法附屬法

砂防法施行規程（三十年十月二十三日勅令第三八二號）（本文畧之）

●勅令第三百七十四號 三十二年八月十五日

砂防法第十一條ノ地租其他ノ公課減免ニ關スル件

第一條 砂防法ニ依リ一定ノ行爲ヲ禁止又ハ制限シタル土地ニ對シテハ其ノ所有者又ハ納稅義務者ノ申請ニ依リ地租ヲ免除又ハ輕減スルコトヲ得（四十四年十一月二十二日勅令第二百八十八號ニテ改正）

第二條 前條ニ依リ地租ヲ免除シタル土地ニ對シテハ地租以外ノ公課ヲ免除シ其ノ地租ヲ輕減シタル土地ニ對シテハ同一ノ割合ヲ以テ地租以外ノ公課ヲ輕減ス

第三條 本令ニ依ル地租其ノ他ノ公課ノ免除又ハ輕減ハ申請ノ日以後ニ開始スヘキ納期分ヨリ免除ニ付テハ一定ノ行爲ノ禁止又ハ制限ノ解除ニ因リ地價ヲ設定シタル日輕減ニ付テハ一定ノ行爲ノ禁止又ハ制限ノ日以前ニ開始シタル納期分迄トス（四十三年三月八日勅令第十八號及四十四年十二月二十二日勅令第二百八十八號ニテ改正）

第四條 本令ニ依リ地租ノ免除又ハ輕減ヲ受ケムトスル者ハ一定ノ行爲ノ禁止又ハ制限セラレタル日ヨリ三十日以内ニ稅務署長ニ申請スヘシ（三十九年十一月勅令第二百五十三號ニテ改正）

第五條 本令施行前一定ノ行爲ヲ禁止又ハ制限シタル土地ニ付テハ第三條ノ期間ハ此ノ勅令施行ノ月、第四條ノ期間ハ本令施行ノ日ヨリ起算ス

●三十九

●大藏省訓令第六十二號　三十二年九月四日　税務管理局

明治三十二年勅令第三百七十四號第四條ニ依リ地租ノ免除又ハ輕減ヲ申請シタルモノアルトキハ地方廳ト協議シ禁止又ハ制限セラレタル行爲ノ程度ニ依リ地租ノ免除又ハ輕減ヲ決定シ輕減スヘキモノハ其割合ヲ定メ之カ許可ノ手續ヲ爲スヘシ

●法律第九號　二十三年二月十二日

水道條例　（抄錄）

第一條　水道トハ市町村ノ住民ノ需要ニ應シ給水ノ目的ヲ以テ布設スル水道ヲ云ヒ水道用地トハ水源地、貯水池、濾水場、喞水場及水道線路ニ要スル地ヲ云フ

第五條　水道用地ハ國税地方税ヲ免ス

●法律第五十七號　四十一年四月十四日

北海道國有未開地處分法

第一條　北海道國有未開地ノ處分ハ本法ニ依リ北海道廳長官之ヲ行フ

第二條　土地ノ賣拂ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ一定ノ期間内ニ其ノ土地ニ關スル事業ヲ成功スヘキ者又ハ素地ノ儘使用セムトスル者ニ對シ之ヲ行フ

第三條　自ラ耕作ヲ爲サムトスル者ノ爲土地ノ區域ヲ限リ特定地ヲ設置ス

特定地ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ無償ニテ貸付シ成功ノ後之ニ付與ス

第四條　公用又ハ公共ノ利益ト爲ルヘキ事業ニ供セムトスル土地ハ之ヲ付與シ又ハ有償若ハ無償ニテ貸付スルコトヲ得

第五條　素地ノ儘使用セムトスル土地ハ有償又ハ無償ニテ貸付スルコトヲ得

第六條　賣拂ヒ又ハ貸付スヘキ地積ノ制限竝賣拂及貸付ノ方法ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條　民有地トノ交換ハ價額稍相均シキモノニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第八條　賣拂ヲ爲ス土地ニ關スル事業ノ成功期間ハ十年ヲ超ユルコトヲ得ス

第九條　土地ノ貸付ハ左ノ期間ヲ超ユルコトヲ得ス

一　無償貸付　十年

二　有償貸付　十五年

第十條　前二條ノ期間ハ植樹又ハ泥炭地ノ使用ニ限リ特ニ二十年迄之ヲ延長スルコトヲ得

第十一條　天災其ノ他避クヘカラサル事故ニ因リ豫定ノ期間内ニ事業ヲ成功スルコト能ハサル者ニ對シテハ其ノ期間ヲ延長スルコトヲ得

前項ノ延長期間ハ通シテ豫定期間ノ半ヲ超ユルコトヲ得ス

第十二條　土地ノ貸付ヲ受ケタル者ノ權利ハ之ヲ讓渡スコトヲ得ス但シ行政廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ規定ニ違反シタル者ニ對シテハ其ノ貸付處分ヲ取消スコトヲ得

第十三條　賣拂又ハ貸付ヲ受ケタル者ノ權利ヲ取得シタルモノハ本法ニ依ル前者ノ權利義務ヲ承繼ス

第十四條　土地ノ賣拂又ハ第三條第二項ニ依ル貸付ヲ受ケタル者法令ノ規定又ハ豫定ノ事業方法ニ違反シタルトキハ未成功地ノ全部ニ付

賣拂又ハ貸付ノ處分ヲ取消スヘシ此ノ場合ニ於テ拓殖上又ハ土地整理上支障アリト認ムルトキハ其ノ成功地ノ一部又ハ全部ニ付亦同シ

前項ノ場合ニ於テ賣拂ヒタル土地ニ付テハ賣拂代金ハ之ヲ還付セス

第十五條　左ノ場合ニ於テハ天災其ノ他避クヘカラサル事故ニ因ルモノヲ除クノ外貸付又ハ付與ノ處分ヲ取消スヘシ但シ借地料ハ之ヲ還付セス

一　第四條又ハ第五條ニ依リ無償ニテ貸付シタル土地ニシテ一年以内ニ事業ニ着手セス又ハ豫定ノ目的ニ使用セサルトキ

二　第四條又ハ第五條ニ依リ付與又ハ有償ニテ貸付シタル土地ニシテ二年以内ニ事業ニ着手セス又ハ豫定ノ目的ニ使用セサルトキ

第十六條　貸付地ニシテ公用又ハ公共ノ利益ト爲ルヘキ事業ニ供スル爲必要アルモノハ之ヲ返還セシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ其ノ土地ニ存在スル工作物其ノ他ノ物件アルトキハ所有者ノ請求ニ因リ評定ノ上移轉料ヲ辨償シ又ハ評定價額ヲ以テ之ヲ買收シ且土地ニ對シテ費シタル直接ノ費用ハ之ヲ辨償ス但シ第三條第二項ニ依リ貸付シタル土地ノ評定價額其ノ土地ニ對シテ費シ

タル直接ノ費用ヨリ多キトキハ其ノ價額ニ依リテ辨償ス

前項ノ處分ニ要スル費用ハ返還地ノ使用ヲ爲スヘキ者ニ於テ之ヲ負擔スヘシ

第十七條　自己ノ便宜ニ依リ貸付地ヲ返還シ又ハ賣拂、貸付若ハ付與ノ處分ノ取消ヲ受ケタル場合ニ於テ其ノ土地ニ存在スル工作物其ノ他ノ物件アルトキハ所有者ニ於テ行政廳ノ指定スル期間内ニ之ヲ除去スヘシ其ノ除去セラレサルモノハ國ノ所有ニ歸ス

第十八條　天災其ノ他避クヘカラサル事故ニ因ルニ非スシテ貸付地ヲ返還シ又ハ第十四條第一項ノ處分若ハ付與ノ處分ノ取消ヲ受ケタル場合ニ於テ伐採シタル樹木アルトキハ其ノ相當代價ヲ辨償セシム

第十九條　民有ト爲リタル土地ニ對スル地租ハ事業成功期間滿了ノ翌年ヨリ起算シ十年ノ後ニ非サレハ之ヲ賦課セス但シ業地ノ儘使用スル土地又ハ交換若ハ第四條ニ依リ付與シタル土地ニ對シテハ民有ト爲リタル翌年ヨリ起算ス

第二十條　土地ノ賣拂又ハ付與ヲ受ケタル者六月以内ニ其ノ原因ニ依リ登記ヲ請フトキ又ハ土地臺帳ニ登錄スルトキハ其ノ登錄税ヲ免除

ス

前項ノ登記ノ申請ヲ爲ス者ハ其ノ申請書ニ本法ニ依リ處分セラレタル土地タルコトヲ記載スルコトヲ要ス

第二十一條　拓殖上又ハ土地整理上必要アル場合ニ於テハ既ニ開墾セラレタル部分ヲ含ム土地ト本法ニ依リ處分スルコトヲ得

第二十二條　賣拂、貸付又ハ付與ノ處分ノ取消アリタルトキハ其ノ土地ニ付登記シタル所有權以外ノ權利ハ消滅ス

第二十三條　賣拂ヒ又ハ付與シタル土地ノ返還ヲ命シタルトキハ行政廳ハ其ノ旨ヲ管轄登記所ニ通知スヘシ

前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ登記官吏ハ通知ノ事項ヲ登記用紙中甲區事項欄ニ記載シ不動産ノ表示、表示番號及登記番號ヲ朱抹シ其ノ登記用紙ヲ閉鎖スルコトヲ要ス

第二十四條　第十四條第一項又ハ第十五條ノ處分ヲ受ケタル者其ノ處分ニ不服アルトキハ訴願又ハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條ノ期間ハ舊法ニ依リ付與又ハ貸與シタル土地ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

舊法第三條第一項ニ依リ貸付シタル土地ニ對シテハ本法ノ特定地ニ關スル規定ヲ適用ス

舊法ニ依リ賣拂ヒ交換若ハ付與シタル土地ノ免租期間ハ仍從前ノ例ニ依ル

●勅令第百五十號　四十一年六月十日

北海道國有未開地處分法施行規則

本文略之（自第一條至第九條）

●大藏省訓令第四十九號　　　二十二年七月　　　府縣（沖繩縣ヲ除ク）

本年（三月）當省訓令第十一號第一項ノ土地臺帳ハ別紙樣式ニ倣ヒ漸次新調シ明治十七年當省第八十九號達別册第十九號樣式ニ據リ收穫地價一段歩當表ヲ調製添付シ置クヘシ　　（樣式畧ス）

（參照）大藏省訓令第十一號第一項抄錄勅令第三十九號土地臺帳ハ從前ノ地劵臺帳ヲ整理修補シ之ニ充ツヘシ

●大藏省第八十九號達　　　　十七年十二月

地租ニ關スル諸帳簿樣式別册ノ通相定ム

戸長役塲ノ分

第十九號　土地臺帳　　（樣式略之）

第二十號　土地所有者名寄帳　（二十七年二月大藏省訓令第十一號ニテ全部改正セラル第十八欵徴收法ノ部ニ出ツ）

第十九號

土地臺帳

他ノ地目ハ之ニ倣ヒ地番數順ニ調製スヘシ

第一欄姓名ノ肩書ニ示セル國郡町村ノ記載例ハ自村ノ者ニハ之ヲ要セス

字何第何番何等

一畑段別段歩

内五歩　畦畔

外十歩　何々

此地價金参拾圓

此地租金七拾五錢

何國何郡何村

何ノ某

公認事由		
地劵書換年月日	事由	國郡區名町村名所有者氏名
明治何年何月何日	賣買	何國何郡何村 甲 某
同	讓與	同 乙 某

●四十

（樣式中△印ハ朱書「イ」ヨリ「ロ」ハ朱、「ロ」ヨリ「ロ」ハ墨複線ヲ意味ス）

地目等級	段別	地價	地租	內反別名稱	外反別名稱	沿革事由
田 三等	イ壹段參歩	五拾圓	壹圓貳拾五錢	五歩 何々	拾歩 畦畔 ロ	明治年月日許可其目變換 地價修正
荒地	イ五畝歩	貳拾五円	六拾貳錢五厘		五歩 畦畔 ロ	明治年月日許可何年ヨリ何年迄免租年期
田 三等	イ五畝歩	貳拾五円	六拾貳錢五厘	五歩 何々	五歩 畦畔 ロ	現在地
田 低價	イ五畝歩	[illegible]	[illegible]		五歩 畦畔 ロ	明治年月日許可荒地起返 何年迄低價年期
田 三等	イ壹段歩	五拾圓	壹円貳拾五錢	五歩 何々	拾歩 畦畔 ロ	明治年月日低價年期明 原地價貳拾五圓地租六拾貳錢五厘ニ據シ二併 現在地ト合シロ・ニ據載ス
△田 三等	△ハ七畝歩	△參拾五円	△八拾七錢五厘	△五歩 何々	△ハ六歩 何々 ニ	明治年月日分裂賣買ニ付本番ニ乙號ヲ付シ次葉ニ記載ス
田 二等	壹畝歩	拾五圓	參拾七錢五厘		貳歩 畦畔	現在地

沿革

第二十號（土地所有者名寄帳ハ二十七年二月大藏省訓令第十一號ニヨリ改正セラル）

●大藏省訓令第二十號　四十一年四月一日　府縣（沖繩縣ヲ除ク）

地方長官ニ於テ森林法又ハ河川法若ハ砂防法ノ規定ニ依リ土地所有者ノ申請ニ對シ一定ノ行爲ヲ許可シタル場合ニ於テ地租條例ノ開墾又ハ地目變換若ハ地類變換ニ該當スルモノアルトキハ其ノ都度郡、市、町村、字、地番、地目、段別及許可年月日事由等ヲ所轄稅務署長ニ通知スヘシ

四十四

●農商務省訓令第四號　四十一年三月六日　府縣（沖繩縣ヲ除ク）

森林法第十二條ノ造林地免租ニ關シテハ左記各項ニ據リ取扱フヘシ

一　府縣知事ハ明治四十一年一月大藏省訓令第一號ニ據リ造林地免租ノ協議ヲ受ケタルトキハ左ノ標準ニ依リ尙ホ造林ノ難易、植栽樹種、地味ノ良否、交通ノ便否等ヲ斟酌シテ免租年期ヲ協定スヘシ

一　喬林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十五箇年以上三十箇年以內

二　中林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以上二十箇年以內

三　矮林ヲ仕立ツル目的ヲ以テ植樹シタルモノハ十箇年以內

四　前各號ノ外利用ヲ目的トセサル植樹ニアリテハ三十箇年以內

二　府縣知事ハ造林地免租許可地ノ林種面積等左記様式ニ依リ毎年末ノ合計ヲ翌年三月末日限リ本省ニ報告スヘシ但シ報告スヘキ事項ナキトキハ單ニ其ノ旨ヲ報告スヘシ

様式　造林免租許可報告　（本書畧之）

●法律第三號　四十三年三月二十四日

宅地地價修正法

第一條　本法ニ於テ宅地ト稱スルハ郡村宅地及市街宅地ヲ謂フ

第二條　本法施行ノ際ニ於ケル宅地ノ地價ハ本法ニ依リ之ヲ修正ス

第三條　宅地ノ修正地價ハ本法ニ依リ定メタル賃貸價格ノ十倍トス但シ賃貸價格ノ十倍カ市街宅地ニ在リテハ現在地價ノ十八倍郡村宅地ニ在リテハ現在地價ノ七倍二割ヲ超ユルトキハ市街宅地ニ在リテハ現在地價ノ十八倍郡村宅地ニ在リテハ現在地價ノ七倍二割ヲ以テ其ノ地價トス

前項ニ依ル修正地價總額カ現在地租總額ヲ百分ノ二箇半ヲ以テ除シタルモノヲ超ユルトキハ現在地租ヲ百分ノ二箇半ヲ以テ除シタルモノヲ以テ修正地價總額トシ前項ニ依ル修正地價ニ按分シテ毎筆ノ地價ヲ定ム

本法ニ於テ賃貸價格ト稱スルハ貸主カ公課、修繕費其ノ他土地ノ維持ニ必要ナル經費ヲ負擔スル條件ヲ以テ之ヲ賃貸スル場合ニ於テ貸主ノ收得スヘキ金額ヲ謂フ

第四條 宅地ノ賃貸價格ハ宅地賃貸價格調査委員會ノ調査ニ依リ政府之ヲ決定ス

政府ハ調査委員會ノ決議ヲ不當ト認ムルトキハ之ヲ再調査ニ付ス

左ノ場合ニ於テハ政府ニ於テ宅地ノ賃貸價格ヲ決定ス

一 調査委員會成立セサルトキ

二 調査委員會ノ調査ニ付シタル日ヨリ六十日以內ニ調査結了セサルトキ

三 調査委員會ノ再議ニ付スルモ其ノ決定仍不當ト認ムルトキ

四 調査委員會ノ再議ニ付シタル日ヨリ二十日以內ニ調査結了セサルトキ

第五條 税務署長ハ所轄內各町村ニ於ケル宅地ノ賃貸價格ヲ調査シ宅地賃貸價格調査委員會ニ提出スヘシ

第六條 各税務署所轄內ニ宅地賃貸價格調査委員會ヲ置ク但シ税務署所轄內ニ市制ヲ施行スル地方ヲ包含スルトキハ市制ヲ施行スル地方ト其ノ他ノ地方トニ區別シテ之ヲ置ク

調査委員ノ定數ハ十人トス但シ地方ノ狀況ニ依リ命令ヲ以テ之ヲ增減スルコトヲ得

第七條 調査委員ハ調査委員選擧人之ヲ選擧ス調査委員ニ選ハレタル者ハ正當ノ事故ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

調査委員ハ其ノ職務ノ結了ニ因リ解任ス

第八條 調査委員選擧人ノ定數ハ其ノ選擧區域內ニ於テ宅地ノ地租ヲ納ムル義務アル者五十人ニ付一人トス但シ義務者千人以上ナルトキハ二十人ニ止メ義務者五十人未滿ナルトキハ一人トス

第九條 調査委員ノ選擧區域ハ調査委員會ヲ置クヘキ區域ニ依リ調査委員選擧人ノ選擧區域ハ市町村ノ區域ニ依ル

第十條 選擧執行ノ日ニ於テ現ニ地租名寄帳ニ宅地地租納税者トシテ登錄セラレタル者ハ當選選擧區域內ニ於テ調査委員選擧人ヲ選擧シ又ハ調査委員若ハ調査委員選擧人ニ選擧セラルルコトヲ得但シ左ニ記載スル者ハ此ノ限ニ在ラス

一 無能力者

二 身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者及家資分散若ハ破產ノ宣告ヲ受ケ其ノ確定シタルトキヨリ復權ノ決定確定スルニ

至ル迄ノ者

三　國税滯納處分ヲ受ケタル後一年ヲ經サル者

四　六年以上ノ懲役若ハ禁錮ニ處セラレタル者又ハ舊刑法ノ重罪ノ刑ニ處セラレ復權ヲ得サル者

五　六年未滿ノ懲役若ハ禁錮ニ處セラレタル者又ハ舊刑法ノ禁錮ニ處セラレタル者ニシテ其ノ刑ノ執行ヲ終ル迄ノ者又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至ル迄ノ者

第十一條　調査委員選擧人及調査委員ノ選擧竝調査委員會ノ會議ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十二條　政府ハ其ノ決定シタル賃貸價格ニ依リ修正地價ヲ定メ之ヲ市町村長ニ通知スヘシ

市町村長前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ市役所又ハ町村役場ニ於テ二十日間其ノ市町村內ニ於テ宅地ノ地租ヲ納ムル義務アル者又ハ其ノ納税管理人ノ縱覽ニ供スヘシ

第十三條　宅地ノ地租ヲ納ムル義務アル者又ハ其ノ納税管理人修正地價ニ不服アルトキハ縱覽期間滿了ノ日ヨリ三十日以內ニ政府ニ異議

ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第十四條　前條ノ申立アリタルトキハ政府ハ修正地價ヲ決定シ之ヲ異議申立者ニ通知スヘシ

第十五條　前條ノ決定ニ對シ不服アルトキハ訴願又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第十六條　本法中市トアルハ東京市、京都市、大阪市、北海道及沖繩縣ニ在リテハ區トス

戸長ノ職務ヲ行フ區域ハ本法ニ於テハ之ヲ町村ト看做ス

附　則

第十七條　本法ニ依リ地價ヲ修正シタル宅地ニ付テハ明治四十四年分地租ヨリ修正地價ニ依リ地租ヲ徵收ス

第十八條　本法施行後明治四十三年十二月三十一日迄ノ間ニ於テ地租條例ニ依リ地價ヲ設定シ又ハ修正シタル宅地ニ付テハ更ニ本法ニ依リ地價ヲ修正シタル類地ノ比準ニ依リ地價ヲ修正シ明治四十四年分地租ヨリ其ノ修正地價ニ依リ地租ヲ徵收ス

第十九條　荒地免租年期又ハ低價年期ヲ有スル宅地ニ付テハ本法ニ依

一四三

リ地價ノ修正ヲ爲サス年期明ニ至リ類地ノ比準ニ依リ其ノ地價ヲ修正ス

荒地免租年期ヲ有スル宅地ニシテ低價年期ヲ許可セラレタルトキハ其ノ年期明ニ至リ前項ノ規定ヲ適用ス

第二十條　本法施行前耕地整理法又ハ明治三十年法律第三十九號ニ依リ耕地ノ整理又ハ土地ノ改良ニ着手シ事業成功ニ至ラサル地區内ニ在ル宅地ニ付テハ本法ニ依リ地價ノ修正ヲ爲サス事業成功ニ至リ本法ニ依リ地價ヲ修正シタル類地ノ比準ニ依リ其ノ地價ヲ修正ス

第二十一條　開墾着手後九年ヲ經過セサル宅地又ハ鍬下年期若ハ地價据置年期ヲ有スル宅地ニ付テハ本法ニ依リ地價ノ修正ヲ爲サス開墾着手後十年目又ハ年期明ニ至リタルトキ類地ノ比準ニ依リ其ノ地價ヲ修正ス

第二十二條　前三條ノ場合ニ於テ地租ヲ徴收スヘキ宅地ニ付テハ其ノ修正地價ニ依リ地租ヲ徴收スルニ至ル迄左ノ各號ニ依リ地租ヲ徴收ス

一　北海道ノ宅地ニ在テハ現地價ニ對スル百分ノ三箇四ノ地租額ヲ百分ノ二箇半ヲ以テ除シタルモノヲ以テ地價トシ之ニ對スル地租ヲ徴收ス

二　府縣ノ宅地ニ在リテハ現地價ニ對スル百分ノ四箇七ノ地租額ヲ二箇半ヲ以テ除シタルモノヲ以テ地價トシ之ニ對スル地租ヲ徴收ス

前項ノ規定ハ明治四十四年分地租ヨリ之ヲ適用ス

●勅令第二百三號　四十三年四月十一日

宅地地價修正法施行規則

第一條　宅地賃貸價格調査委員選擧人ノ選擧事務ハ市町村長之ヲ執行シ宅地賃貸價格調査委員ノ選擧事務ハ税務署長之ヲ執行ス

第二條　税務署長ハ調査委員選擧人ノ選擧期日ヲ定メ少クトモ選擧期日二十日前之ヲ市町村長ニ通知スヘシ

市町村長前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ少クトモ選擧期日十五日前其ノ旨公示スヘシ

第三條　調査委員選擧人ノ選擧ハ記名投票ヲ以テ之ヲ行フ

投票ハ一人一票ニ限ル
選擧人ハ自ラ投票所ニ至リ被選擧人一人ノ氏名ヲ記載シテ投票スヘシ

第四條　調査委員選擧人ノ選擧ヲ執行スルトキハ其ノ選擧資格ヲ有スル者二人ヲ選任シ投票及開票ニ立會ハシムヘシ

第五條　調査委員選擧人ノ選擧ハ投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス投票ノ數同シキトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

第六條　調査委員選擧人ノ選擧ヲ終了シタルトキハ市町村長ハ直ニ當選人ノ氏名ヲ公示シ且之ヲ税務署長及當選人ニ通知スヘシ

第七條　税務署長ハ調査委員ノ選擧期日ヲ定メ少クトモ十五日前其ノ旨ヲ公示シ且之ヲ調査委員選擧人ニ通知シ調査委員ノ選擧ヲ行ハシムヘシ
調査委員選擧ノ投票ニ記載スヘキ被選擧人ノ數ハ調査委員ノ定數ノ五分ノ一トス但シ一人未滿ノ端數ヲ生シタルトキハ之ヲ一人トシテ計算ス

一投票ニ記載シタル被選擧人ノ人員前項ニ定メタル數ニ不足スルトキト雖其ノ投票ハ之ヲ有効トス
第三條乃至第五條ノ規定ハ調査委員ノ選擧ニ之ヲ準用ス

第八條　調査委員ノ選擧ヲ終了シタルトキハ税務署長ハ直ニ當選人ノ氏名ヲ公示シ且之ヲ當選人ニ通知スヘシ

第九條　調査委員選擧人又ハ調査委員ノ選擧ニ於テ當選人定數ニ達セサルトキハ其ノ不足ノ員數ニ對シ更ニ選擧ヲ行ハシムヘシ

第十條　調査委員選擧人又ハ調査委員ニ闕員ヲ生シタルトキハ次點者ヲ以テ之ヲ補フ其ノ得點ノ數同シキトキハ第五條ノ規定ヲ準用ス

第十一條　調査委員會ハ税務署長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク

第十二條　調査委員會ハ開會ノ始ニ於テ調査委員中ヨリ會長ヲ選擧スヘシ
會長出席セサルトキハ出席シタル調査委員中ノ年長者其ノ職務ヲ行フ

第十三條　調査委員會ハ定數ノ過半數ニ當ル委員出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

議事ハ出席員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

第十四條　調査委員ハ自己ノ所有地若ハ納稅義務アル土地又ハ納稅管理ノ土地ニ關スル決議ニ與ルコトヲ得ス

第十五條　稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査委員會ニ出席シ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第十六條　調査委員會ノ決議ハ會長之ヲ稅務署長ニ通知スヘシ

第十七條　稅務署長ハ宅地地價修正法第四條ノ規定ニ依リ宅地ノ賃貸價格ヲ決定シ同法第十二條第一項ノ規定ニ依リ修正地價ヲ市町村長ニ通知スヘシ

第十八條　市町村長前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ其ノ翌日ヨリ之ヲ縱覽ニ供シ且其ノ旨公示スヘシ

第十九條　宅地地價修正法第十三條ノ規定ニ依リ異議ノ申立ヲ爲サムトスル者ハ其ノ理由ヲ詳記シ稅務署長ヲ經由シテ稅務監督局長ニ申出ツヘシ

前項ノ申出アリタルトキハ稅務監督局長ハ修正地價ヲ定メ之ヲ異議

申立者ニ通知スヘシ

第二十條　調査委員ニハ手當及旅費ヲ支給ス

前項ノ手當及旅費ニ關スル規定ハ大藏大臣之ヲ定ム

第二十一條　本令中市トアルハ東京市、京都市、大阪市、北海道及沖繩縣ニ在リテハ區トス

戸長ノ職務ヲ行フ區域ハ本令ニ於テハ之ヲ町村ト看做ス

附　則

本令ハ宅地地價修正法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●大藏省訓令第六號

四十四年三月六日

北海道廳 府 縣

宅地地價修正法ニ依ル修正地價ノ確定額ニ付税務署ヨリ通知アリタルトキハ左記ノ區分ニ從ヒ市（北海道及沖繩縣ニ在リテハ區）町村ニ於ケル地租名寄帳記載事項ノ更正手續ヲ爲サシムヘシ

一 元地價ハ朱線ヲ以テ抹消シ修正地價ヲ其ノ右傍ニ記載スルモノトス但元郡村宅地ノ地目ヲ有シタルモノニ在リテハ區別ヲモ本文ノ例ニ準シテ坪數ニ更正スルモノトス

二 同一人ニシテ同一市町村ニ於テ元市街宅地租及郡村宅地租ノ納税義務ヲ併有スルモノニ在リテハ第一項ノ處理ヲ爲シタル後元市街宅地若ハ元郡村宅地何レカ一方ノ用紙ニ更正額及之ニ關スル要件ヲ移記シ一方ノ用紙ノ記載事項ハ之ヲ抹消スルモノトス

三 前二項ニ依リ難キ事情アル市町村ニ於テハ所轄税務署長ト協議シ便宜適實ノ方法ニ依リ地租名寄帳ノ更正處理ヲ爲スモ妨ケナシ

四 宅地地價修正法第十八條ニ依ル修正地價及第三十二條ニ依ル更

正地價ニ付テハ前各項ニ準シ更正ヲ爲スヲ要ス

五　前各項ニ依リ段別及地價ノ更正ヲ爲シタルトキハ其ノ集計額ヲ所轄税務署ニ報告シ土地臺帳ノ現在額ト對照校査ヲ求ムヘシ

○第二款　所得税

●法律第十七號　三十二年二月十日

（沿　革）〔○三十四年四月法律第十七號 △三十八年三月法律第三十四號 ●大正二年四月七日法律第十三號〕ヲ以テ改正

所得税法

第一條　帝國内此ノ法律施行地ニ住所ヲ有シ又ハ一ケ年以上居所ヲ有スル者ハ此ノ法律ニ依リ所得税ヲ納ムル義務アルモノトス

○第二條　前條ニ該當セサル者此ノ法律施行地ニ資産又ハ營業ヲ有シ若ハ公債社債ノ利子支拂ヲ受クルトキハ其ノ所得ニ付テノミ所得税ヲ納ムル義務アルモノトス

●第三條　所得税ハ左ノ税率ニ依リ之ヲ賦課ス

第一種　法人ノ所得

甲　合名會社、合資會社　所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各税率ヲ適用ス

五千圓以下ノ金額　千分ノ四十

五千圓ヲ超ユル金額　千分ノ五十
一萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ六十
一萬五千圓ヲ超ユル金額　千分ノ七十
二萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ八十
三萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ九十
五萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ百
七萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ百十
十萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ百二十
二十萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ百三十

乙

株式會社、株式合資會社、其ノ他ノ法人　千分ノ六十二、五

第二種　此ノ法律施行地ニ於テ支拂ヲ爲ス公債社債ノ利子
千分ノ二十

第三種　前二種ニ屬セサル所得　所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各税率ヲ適用ス

千圓以下ノ金額　千分ノ二十五
千圓ヲ超ユル金額　千分ノ三十五

二千圓ヲ超ユル金額　千分ノ四十五
三千圓ヲ超ユル金額　千分ノ五十五
五千圓ヲ超ユル金額　千分ノ七十
七千圓ヲ超ユル金額　千分ノ八十五
一萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ百
一萬五千圓ヲ超ユル金額　千分ノ百二十
二萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ百四十
三萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ百六十
五萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ百八十
七萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ二百
十萬圓ヲ超ユル金額　千分ノ二百二十

株式會社、株式合資會社ニシテ株主又ハ株主及社員ノ數二十人以下ヲ以テ組織シタルモノナルトキハ其ノ所得ニ對シテハ第一種甲ノ税率ヲ適用ス

前項ノ株主又ハ社員ノ數ハ事業年度末日ノ現在ニ依ル

前二項ノ場合ニ於テ會社カ無記名式ノ株券ヲ發行シタルトキハ其ノ

無記名式ノ株券ニ對スル株主ハ其ノ無記名式ト爲スコトヲ請求シタル株主ノ數ニ依ル
第一種甲ノ税率ヲ適用スヘキ場合ニ於テハ法人ノ事業年度ノ月數ヲ以テ十二月ヲ除シタル數ヲ其ノ事業年度ノ所得金額ニ乘シタルモノニ對シ適用シテ算出シタル金額ヲ十二分シ其ノ事業年度ノ月數ヲ乘シテ其ノ税額ヲ定ム
第三種ノ税率ヲ適用スヘキ場合ニ於テ戸主及其ノ同居家族ノ所得ハ之ヲ合算シ其ノ總額ニ對シ適用シテ算出シタル金額ヲ戸主及其ノ同居家族ノ所得ニ案分シテ各其ノ税額ヲ定ム戸主ト別居スル家族二人以上同居スルトキ亦同シ

●**第四條**　第一種ノ所得ハ保險會社ニ在リテハ各事業年度ノ利益金又ハ剩餘金ニ依リ其ノ他ノ法人ニ在リテハ各事業年度總益金ヨリ同年度總損金ヲ控除シタル金額ニ依ル但シ第二條ニ該當スル法人ノ所得ハ此ノ法律施行地ニ於ケル資産又ハ營業ヨリ生スルモノニ限ル
前項ノ場合ニ於テ總益金中此ノ法律ニ依リ所得税ヲ課セラレタル法人ヨリ受ケタル配當金又ハ此ノ法律施行地ニ於テ支拂ヲ受ケタル公

イ十八

債社債ノ利子アルトキハ之ヲ控除ス保險會社ノ利益金又ハ剩餘金ノ計算ニ付亦同シ

●**第四條ノ二**　第二種ノ所得ハ其ノ支拂ヲ受クヘキ金額ニ依ル

●**第四條ノ三**　第三種ノ所得ハ左記各號ノ定ムル所ニ依リ之ヲ算出ス

一　俸給、給料、手當、歳費、年金、恩給、退隱料、營業ニ非サル貸金預金ノ利子及第二種所得ニ屬セサル公債社債ノ利子ハ其ノ收入豫算年額

二　田又ハ畑ノ所得ハ前三年間毎年ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタルモノノ平均ニ依リ算出シタル收入豫算年額但シ前三年以來引續キ自作セス、小作セス又ハ小作ニ付セサル田又ハ畑ニ在リテハ近傍類地ノ所得ニ依リ算出シタル收入豫算年額

三　山林伐採ノ所得ハ前年ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額

四　外國又ハ此ノ法律ヲ施行セサル地ニ於ケル法人ヨリ受クル配當金ハ前年ノ收入金額

五　其ノ他ノ所得ハ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル收入豫

算年額

●第四條ノ四　第三種ノ所得中俸給、給料、手當、歲費ニ付テハ收入豫算年額ヨリ其ノ十分ノ一ヲ控除シタルモノヲ以テ所得トス

●第四條ノ五　第三種ノ所得ニ付前二條ノ規定ニ依リ算出シタル金額五百圓以下ナルトキハ百五十圓ヲ七百圓以下ナルトキハ百圓ヲ千圓以下ナルトキハ五十圓ヲ其ノ所得ヨリ控除ス

第三條第六項ノ場合ニ於テハ其ノ合算額ニ付前項ノ規定ヲ適用ス

●第四條ノ六　府縣郡市町村其ノ他ノ公共團體、神社、寺院、祠宇、佛堂及民法第三十四條ノ規定ニ依リ設立シタル法人ニハ所得税ヲ課セス

●第五條　第三種ノ所得ニシテ左ノ各號ニ該當スルモノニハ所得税ヲ課セス

一　軍人從軍中ノ俸給、手當

二　扶助料及傷痍疾病者ノ恩給、退隱料

三　旅費、學資金及法定扶養料

四　營利ノ事業ニ屬セサル一時ノ所得

五　外國又ハ此ノ法律ヲ施行セサル地ニ於ケル資産、營業又ハ職業

ニ依ル所得

六　此ノ法律ニ依リ所得税ヲ課セラレタル法人ヨリ受クル配當金及剰賦賞與金

七　乘馬ヲ有スル義務アル軍人カ政府ヨリ受クル馬糧、蹄當料及馬匹保續料

●第五條ノ二　勅令ヲ以テ指定シタル重要物産ノ製造業ヲ營ム者ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ開業ノ年及其ノ翌年ヨリ三年間其ノ業務ヨリ生スル所得ニ付所得税ヲ免除ス

●第六條　第三種ノ所得ハ四百圓ニ滿タサルトキハ所得税ヲ課セス但シ第三條第六項ノ合算額四百圓ニ滿ツルトキ又ハ第四條ノ五ノ規定ニ依ル金額ヲ控除シタル爲四百圓ニ滿タサルニ至リタルトキハ此ノ限ニ在ラス

●第七條　第一種ノ所得ニ付納税義務アル者ハ命令ヲ以テ定ムル期間内ニ各事業年度ニ於ケル財産目錄、貸借對照表、損益計算書及第四條ノ規定ニ依リ計算シタル所得ノ明細書ヲ添附シ政府ニ申告スヘシ但シ第二條ニ該當スル法人ハ此ノ法律施行地ニ於ケル資産又ハ營業ニ關スル損益ヲ計算シタル所得ノ明細書ヲ添附スヘシ

イ十九

第八條　第三種ノ所得ニ付納稅義務アル者ハ每年四月中ニ所得ノ種類及金額ヲ詳記シ政府ニ申告スヘシ

●第九條　第一種ノ所得金額ハ第七條ノ申告ニ依リ申告ナキトキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキハ政府ノ調査ニ依リ政府之ヲ決定シ第三種ノ所得金額ハ所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府之ヲ決定ス

調査委員會閉會後第三種ノ所得ヲ有スル者納稅義務アルコトヲ申出テ又ハ納稅義務者所得金額ノ增加アルコトヲ申出テタルトキハ政府其ノ所得金額ヲ決定ス

第十條　稅務署長ハ每年第三種ノ所得ニ付納稅義務者又ハ納稅義務アリト認ムル者ノ所得金額ヲ調査シ其ノ調査書ヲ製シテ之ヲ所得調査委員會ニ送付スヘシ

△●第十一條　各稅務署所轄內ニ所得調査委員會ヲ置ク但シ稅務署所轄內ニ在ル市又ハ北海道、沖繩縣ノ區ニ付テハ命令ヲ以テ特ニ調査委員會ヲ置クコトヲ得

調査委員ノ定數ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム但シ定數ノ增減ハ改選期ニ於テスルノ外之ヲ爲スコトヲ得ス

第十二條　調査委員ハ調査委員選擧人之ヲ選擧ス

△●第十三條　調査委員ノ選擧區域ハ調査委員會ヲ置クヘキ區域ニ依リ調査委員選擧人ノ選擧區域ハ市町村及北海道、沖繩縣ノ區ノ區域ニ依ル但シ東京市、京都市及大阪市ニ在リテハ區ノ區域ニ依ル

●第十四條　選擧區域內ニ住居シ前年第三種ノ所得稅ヲ納メタル者ニシテ第八條ノ申告ヲ爲シタルモノハ調査委員選擧人ヲ選擧シ又ハ調査委員、補闕員若ハ調査委員選擧人ニ選擧セラルルコトヲ得但シ左ニ記載シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

一　無能力者

二　身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨濟ヲ了ヘサル者及家資分散又ハ破產ノ宣告ヲ受ケ其ノ確定シタル時ヨリ復權ノ決定確定スルニ至ルマテノ者

三　國稅滯納處分ヲ受ケタル後一年ヲ經サル者

四　六年以上ノ懲役若ハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ舊刑法ノ重罪ノ刑ニ處セラレ復權ヲ得サル者

五　六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ニシテ其ノ刑ノ

執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至ルマテノ者
六　第四十六條ノ規定ニ依リ處罰セラレタル後五年ヲ經サル者
前項ノ場合ニ於テ被相續人ノ爲シタル納稅又ハ申告ハ其ノ相續人ノ納稅又ハ申告ト看做ス
△第十五條　調査委員選擧人ノ定數ハ其ノ選擧區域内ニ於ケル前年所得稅ヲ納メタル者ニシテ第八條ノ申告ヲ爲シタル者十人ニ付一人トス但シ申告者二百人以上ナルトキハ二十人ニ止メ申告者十人未滿ナルトキハ一人トス
第十六條　調査委員選擧人ノ選擧事務ハ市區町村長又ハ戸長之ヲ執行シ調査委員ノ選擧事務ハ稅務署長之ヲ執行ス
第十七條　稅務署長ハ調査委員選擧人ノ選擧期日ヲ定メ之ヲ市區町村長又ハ戸長ニ通知スヘシ
市區町村長又ハ戸長ハ前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ少クトモ選擧期日七日前其ノ旨ヲ公示スヘシ
●第十八條　選擧ハ記名投票ヲ以テ之ヲ行フ

投票ハ一人一票ニ限ル
選擧人ハ自ラ投票所ニ至リ被選擧人一人ノ氏名ヲ記載シテ投票スヘシ
第十九條　選擧ハ投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス投票ノ數同シキトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム
第二十條　調査委員選擧人ノ選擧終了シタルトキハ市區町村長又ハ戸長ハ當選人ノ氏名ヲ公示スヘシ
●第二十一條　稅務署長ハ選擧期日ヲ定メ少クトモ七日前ニ公示シ調査委員及之ト同數ノ補闕員ノ選擧ヲ行ハシムヘシ
前項ノ選擧ニ關シテハ第十八條及第十九條ノ規定ヲ準用ス但シ投票ニ記載スヘキ被選擧人ノ數ハ調査委員又ハ補闕員ノ定數ノ二分ノ一トシ一人未滿ノ端數ヲ生シタルトキハ一人トシテ計算ス
第二十二條　調査委員及補闕員ノ選擧終了シタルトキハ稅務署長ハ當選人ノ氏名ヲ公示スヘシ
第二十三條　調査委員及補闕員ニ選ハレタル者ハ正當ノ事故ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

●第二十四條　調査委員及補闕員ノ任期ハ選擧ノ日ノ属スル月ヨリ四年トス但シ其ノ選擧區域ニ變更ヲ生シタル場合ニ於テハ其ノ任期ハ終了スルモノトス

●第二十四條ノ二　調査委員及補闕員ノ改選ハ前任者ノ任期終了ノ月ノ翌月ニ於テ之ヲ行フ

●第二十四條ノ三　調査委員ニ闕員ヲ生シタルトキハ投票ノ最多數ヲ得タル補闕員ヨリ順次之ヲ補充シ投票ノ數同シキトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

●第二十四條ノ四　補闕員ヨリ調査委員ト爲リタル者ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

選擧區域ノ變更ニ依リ新ニ選擧セラレタル調査委員及補闕員ノ任期ハ選擧區域變更前ニ於ケル調査委員及補闕員ノ選擧ノ日ノ属スル月ヨリ四年ヲ以テ終了ス

●第二十四條ノ五　調査委員又ハ補闕員ニ選擧セラレタル者第十四條第一項但書各號ノ一ニ該當スルニ至リタルトキ又ハ第三種ノ所得ニ付納税義務ヲ有セサルニ至リタルトキハ其ノ職ヲ失フ

イ二十二

△第二十五條　調査委員會ノ開會日數ハ三十日以内トシ地方ノ情況ニ依リ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十六條　調査委員會ハ税務署長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク

第二十七條　調査委員會ハ毎年開會ノ始ニ於テ調査委員中ヨリ會長ヲ選擧スヘシ

第二十八條　調査委員會ハ定員ノ過半數ニ當ル委員出席スルニアラサレハ決議スルコトヲ得ス

議事ハ出席員ノ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

△第二十九條　調査委員ハ自己ノ所得金ニ關スル議事ニ與ルコトヲ得ス

第三十條　八月三十日マテニ調査委員會成立セサルトキハ政府其ノ所得金額ヲ決定ス

調査委員會開會ノ日ヨリ第二十五條ノ期間以内ニ又ハ八月三十日マテニ調査結了セサルトキハ所得金額調査未濟ノモノニ限リ政府其ノ所得金額ヲ決定ス

△第三十一條　政府ハ調査委員會ノ決議ヲ不當ト認ムルトキハ之ヲ再調査ニ付ス仍其ノ決議ヲ不當ト認ムルトキ又ハ再調査ニ付シタル日ヨリ七日以内ニ調査結了セサルトキハ政府ニ於テ所得金額ヲ決定ス

第三十二條　稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査委員會ニ出席シ意見ヲ陳述スルコトヲ得

●第三十三條　調査委員ニハ手當及旅費ヲ支給ス

●第三十三條ノ二　第三種ノ所得ニ屬スル俸給、給料、手當、歲費、年金、恩給又ハ退隱料ノ支拂ヲ爲ス者ハ其ノ支拂ヲ受クル者ノ氏名、住所及金額ヲ記載シタル調書ヲ政府ニ提出スヘシ

前項ノ規定ニ依リ調書ヲ提出シタル者ニ對シテハ命令ノ定ムル金額ヲ交付スルコトヲ得

●第三十四條　稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査上必要アルトキハ納稅義務者、納稅義務アリト認ムル者又ハ前條ノ規定ニ依リ調書ヲ提出スル義務アル者ニ質問スルコトヲ得

△第三十四條ノ二　稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査上必要アルトキハ納稅義務者又ハ納稅義務アリト認ムル者ニ金錢又ハ物品ヲ支拂フノ義務ヲ有スト認ムル者ニ對シ其ノ金額、數量、價額又ハ支拂期日ニ付質問スルコトヲ得

第三十五條　政府ハ第一種及第三種ノ所得金額ヲ決定シタルトキハ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第三十六條　納稅義務者政府ノ通知シタル所得金額ニ對シテ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以內ニ不服ノ事由ヲ具シ政府ニ申出テ審査ヲ求ムルコトヲ得

第三十七條　前條ノ請求アリタルトキハ審査委員會ヲ開キ其ノ決議ニ依リ政府之ヲ決定ス

審査委員會ハ收稅官吏三人調査委員四人ヲ以テ之ヲ組織ス

審査委員會ノ所屬區域ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

審査委員會ハ前條ノ申立ヲ爲シタル者ニ對シ其ノ所得ニ關スル事實ヲ質問スルコトヲ得

○第三十一條ノ規定ハ之ヲ審査委員會ノ決議ニ準用ス

第三十八條　納稅義務者ハ第三十六條ノ審査ヲ求メタル場合ト雖通知ヲ受ケタル所得金額ニ依リ稅金ヲ納ムヘシ

第三十九條　所得金額ノ決定ニ對シ不服アル者ハ訴願又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

○●第四十條　第三種ノ所得ニ付納稅義務アル者收入豫算年額四分ノ一以上ヲ減損シタルトキハ政府ニ申出所得金額ノ更訂ヲ求ムルコトヲ得

但シ翌年一月三十一日ヲ過クルトキハ所得金額ノ更訂ヲ求ムルコト

ヲ得ス
所得金額決定後贈與ヲ爲シタル爲所得金額ヲ減損シタル場合ニハ前項ヲ適用セス

●第四十一條　前條ノ請求アリタルトキハ政府ハ其ノ所得金額ヲ査覈シ收入豫算年額ニ對シ四分ノ一以上ノ減損アリタルトキハ所得金額ヲ更訂ス

●第四十二條　第一種ノ所得ニ付テハ各事業年度每ニ所得稅ヲ徵收ス
第二種ノ所得ニ付テハ其ノ金額支拂ノ際支拂者其ノ所得稅ヲ徵收シ其ノ都度之ヲ政府ニ納ムヘシ
第三種ノ所得ニ付テハ所得稅ノ年額ヲ四分シ左ノ四期ニ於テ之ヲ徵收ス但シ納稅者納稅管理人ヲ定メスシテ帝國外ニ住所若ハ居所ヲ移ストキハ其ノ際直ニ其ノ所得稅ヲ徵收スルコトヲ得

第一期　其ノ年九月一日ヨリ三十日限
第二期　其ノ年十一月一日ヨリ十五日限
第三期　翌年一月一日ヨリ十五日限
第四期　翌年三月一日ヨリ十五日限

イ二十四

第二項ノ規定ニ依リ徵收スヘキ所得稅ヲ徵收セサルトキ又ハ其ノ徵收シタル稅金ヲ納付セサルトキハ國稅徵收法ニ依リ之ヲ支拂者ヨリ徵收ス

○第四十三條ノ一　第四十條ノ請求アリタルトキハ政府ハ其ノ確定ニ至ルマテ稅金ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

○第四十三條ノ二　第三種ノ所得ニ付二箇以上ノ稅務署管內ニ於テ所得金額ノ決定アリタルトキハ政府ハ納稅者ノ住所地若住所ナキトキハ居所地以外ニ於ケル所得金額ノ決定ヲ取消スヘシ

△第四十四條　第三種ノ所得ニ係ル所得稅ハ本人住所ノ地ヲ以テ納稅地トシ住所ナキトキハ居所ノ地ヲ以テ納稅地トス但シ住所地以外ニ在ル納稅者ハ申告シテ居所地ニ於テ所得稅ヲ納ムルコトヲ得
此法律施行地ニ住所又ハ居所ナキ者ハ納稅地ヲ定メ政府ニ申告スヘシ申告ナキトキハ政府其ノ納稅地ヲ定ム

第四十五條　納稅義務者納稅地ニ現住セサルトキハ其ノ所得稅ニ關スル事項ヲ處理セシムル爲ニ納稅管理人ヲ定メ政府ニ申告スヘシ

●第四十六條　所得金額ヲ隱蔽シテ逋脫シタル者ハ其ノ逋稅金高三倍ノ罰金又ハ科料ニ處ス但シ自首スル者ハ其ノ稅金ヲ追徵シ其ノ罪ヲ問

ハス

第四十七條　所得ノ調査又ハ審査ニ干與スル者其ノ調査又ハ審査ニ關スル事項ヲ他ニ漏洩シタルトキハ參拾圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ニ依リ處罰セラレタル者ハ其ノ職ヲ失フモノトス

●第四十七條ノ二　此ノ法律ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヰス

附　則

第四十八條　此ノ法律ハ明治三十二年分所得税ヨリ之ヲ適用ス

第四十九條　明治二十年勅令第五號所得税法ハ明治三十一年分所得税限リ廢止ス

●第五十條　此ノ法律ハ小笠原島及伊豆七島ニ當分之ヲ施行セス

此ノ法律ハ大正七年分所得税ヨリ之ヲ沖繩縣ニ施行ス

附　則（三十四年四月法律第十七號）

此ノ法律ハ明治三十四年分所得税ヨリ之ヲ適用ス

附　則（三十八年二月二十八日裁可三月一日公布法律第三十四號）

本法ハ明治三十八年分所得税ヨリ之ヲ適用ス

附　則（大正二年四月七日裁可同月七日公布法律第十三號ノ分）

本法ハ大正二年五月一日ヨリ之ヲ施行ス

第三種ノ所得ニ付テハ大正二年分所得税ヨリ本法ヲ適用ス但大正二年分ニ限リ第八條ノ毎年四月中ハ大正二年五月三十一日迄、第三十條ノ八月三十日ハ九月三十日、第四十二條ノ九月一日ヨリ三十日限ハ十月一日ヨリ十五日限トス

本法施行ノ際現ニ所得調査委員及補闕員タル者ノ任期ハ大正二年五月末日ヲ以テ終了ス

●勅令第七十八號　三十二年三月二十九日

（沿革）（●三十五年十一月勅令第二百五十四號　○三十八年三月勅令第五十五號　△大正二年四月二十六日勅令第六十五號）ヲ以テ改正

所得税法施行規則

△第一條　所得税法第四條ノ三ニ依リ總收入金額ヨリ控除スヘキモノハ種苗、蠶種、肥料ノ購買費、家畜其ノ他ノ飼養料、仕入品ノ原價、原料品ノ代價、場所物件ノ修繕費、其ノ借入料、場所物件又ハ業務ニ係ル公課、雇人ノ給料其ノ他其ノ收入ヲ得ルニ必要ナル經費ニ限ル

但シ家事上ノ費用及之ト關聯スルモノハ之ヲ控除セス
山林ヲ讓渡シタル場合ニ於テハ其ノ立竹木ノ所得ハ之ヲ山林伐採ノ所得トス

第二條　第三條ノ所得金額ハ申告、調査又ハ決定當時ノ現況ニ依リ所得税法第五條ノ所得ヲ除キ之ヲ算出スヘシ

△第三條　第一種ノ所得ニ付納税義務アル法人ハ毎事業年度決算確定ノ日ヨリ七日内ニ所轄税務署ニ所得税法第七條ノ申告ヲ爲スヘシ
株式會社又ハ株式合資會社ハ其ノ事業年度末日ノ現在ニ依リ株主又ハ社員ノ數ヲ併セテ申告スヘシ但シ會社カ無記名式ノ株券ヲ發行シタルトキハ其ノ無記名式ト爲スコトヲ請求シタル株主ノ數ヲ附記スヘシ

∧第四條　第三種ノ所得ニ付納税義務アル者ハ所得ノ種類及金額ヲ所轄税務署ニ申告スヘシ但シ俸給、給料、手當、歳費ニ付テハ其ノ收入豫算年額ヲ併セテ申告スヘシ
所得税法第三條第六項ニ依リ同居者ノ所得ヲ合算スヘキ場合ニ於テハ其ノ所得ヲ區分シ同時ニ之ヲ申告スヘシ

○第四條ノ二　所得税法第十一條但書ニヨリ特ニ所得調査委員會ヲ設クヘキ市又ハ北海道、沖繩縣ノ區ハ大藏大臣之ヲ指定ス

第五條　所得調査委員ノ定數ハ五人トス但シ特別ノ事由アリト認ムルトキハ大藏大臣ハ之ヲ増減スルコトヲ得

第六條　税務署長ハ調査委員選擧人ノ選擧前選擧資格ヲ有スル者ノ住所氏名ヲ其ノ市區町村長又ハ戸長ニ通知スヘシ

第七條　調査委員選擧人ノ選擧ヲ執行スルトキハ市區町村長又ハ戸長ハ其ノ選擧資格ヲ有スル者二人ヲ選任シ開票ニ立會ハシムヘシ

○第七條ノ二　調査委員選擧人ノ選擧終了シタルトキハ市區町村長又ハ戸長ハ當選人ノ氏名ヲ税務署長ニ報告スヘシ

○第七條ノ三　税務署長所得税法第二十一條ニ依リ調査委員選擧ノ期日ヲ公示シタルトキハ仝時ニ之ヲ調査委員選擧人ニ通知スヘシ

第八條　調査委員ノ選擧ヲ執行スルトキハ税務署長ハ調査委員選擧人二人ヲ選任シ開票ニ立會ハシムヘシ

△第九條　調査委員選擧人、調査委員及補闕員ノ選擧ニ於テ投票ニ記載シタル人員其ノ選擧スヘキ定數ニ超エタルトキハ末尾ニ記載シタル

入名ヲ順次棄却スヘシ

●第十條　調査委員又ハ補闕員ヲ辭スルコトヲ得ル者ハ税務署長ニ於テ已ヲ得スト認ムル事故アル者ニ限ル

第十一條　調査委員會ノ會長出席セサルトキハ出席シタル調査委員中ノ年長者之ヲ代理スヘシ

○第十一條ノ二　調査委員會ノ開會日數ハ各調査委員會ノ區域内ニ於ケル前年所得税納税者ノ數ニ從ヒ左ノ如ク之ヲ定ム

五千人以上ナルトキ	三十日以内
三千人以上ナルトキ	二十五日以内
千人以上ナルトキ	二十日以内
五百人以上ナルトキ	十五日
五百人未滿ナルトキ	十日以内

第十二條　調査委員會ノ決議ハ會長ヨリ之ヲ税務署長ニ通知スヘシ

●第十三條　税務署長ハ所得税法第九條第三十條第三十一條ニ依リ所得金額ヲ決定シ之ヲ納税義務者ニ通知スヘシ

●第十四條　所得税法第三十六條ニ依リ審査ヲ求メムトスル者ハ事由ヲ具シ證憑書類ヲ添ヘ税務署長ヲ經由シ税務監督局長ニ申出ヘシ

●第十五條　各税務監督局所轄内ニ審査委員會ヲ置ク

●第十六條　收税官吏ヲ以テスヘキ審査委員ハ大藏大臣之ヲ命シ調査委員ヲ以テスヘキ審査委員ハ税務監督局所轄内ノ調査委員之ヲ選擧ス

●第十七條　審査委員ノ選擧事務ハ税務監督局長之ヲ執行ス

●第十八條　審査委員ノ選擧ヲ執行セムトスルトキハ税務監督局長選擧期日ヲ定メ所轄内調査委員ノ氏名ト共ニ之ヲ各調査委員ニ通知スヘシ

△第十九條　審査委員ノ選擧ハ記名投票ヲ以テ之ヲ行フ

投票ハ一人一票ニ限ル

選擧人ハ自ラ投票所ニ至リ被選擧人一人ノ氏名ヲ記載シテ投票スヘシ

投票ハ郵便ヲ以テ送付スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ投票時間ノ終了スル迄ニ到達セサリシ投票ハ無効トス

第二十條　税務監督局長ハ所轄内調査委員二人ヲ選任シ開票ニ立會ハシムヘシ

第二十一條　選擧ハ投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス投票ノ數同シキトキハ年長者ヲ取リ同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

●第二十二條ノ一　審査委員ノ選擧終了シタルトキハ税務監督局長ハ當選人ノ氏名ヲ公示スヘシ

●第二十二條ノ二　審査委員ハ税務監督局所轄內ニ於テ調査委員ノ改選アル毎ニ之ヲ改選ス

●第二十三條　審査委員ハ税務監督局長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク

第二十四條　審査委員會ハ改選後第一回開會ノ初ニ於テ審査委員中ヨリ會長ヲ選擧スヘシ

第二十五條　審査委員會ハ定員ノ過半數ニ當ル委員出席スルニアラサレハ決議スルコトヲ得ス

第二十六條　審査委員會ノ議事ハ出席員ノ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

第二十七條　審査委員會ノ會長出席セサルトキハ出席シタル審査委員中ノ年長者之ヲ代理スヘシ

第二十七條　審査委員ハ自己ノ所得金ニ關スル議事ニ與ルコトヲ得ス

●第二十八條　税務監督局長又ハ其ノ代理官ハ審査委員會ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得

●第二十九條　審査委員會ノ決議ハ會長ヨリ之ヲ税務監督局長ニ通知スヘシ

●第三十條　税務監督局長ハ所得税法第三十七條ニ依リ所得金額ヲ決定シ之ヲ納税義務者ニ通知スヘシ

第三十一條　所得税法第三十三條ノ二ニ依リ調書ヲ提出スル場合ニ於テ手當ニ付テハ前年分支拂金額ヲモ調書ニ記載スヘシ

△第三十一條ノ二　所得税法第三十三條ノ二ニ依リ調書ヲ提出スル義務アル者ハ毎年四月中ニ所轄税務署ニ之ヲ提出シ其ノ年一月一日以後調書提出ノ時迄ニ金額ニ異動アリタルモノニ付テハ異動前ノ金額、異動年月日及其ノ事由ヲ調書ニ附記スヘシ

前項ノ調書ヲ提出シタル後六月三十日迄ノ間ニ異動アリタルトキハ七月十日迄ニ其ノ異動調書ヲ提出スヘシ

△第三十一條ノ三　前條ノ調書ヲ提出シタル者ニ對シテ其ノ請求ニ因リ其ノ調書ニ記載シタル一件一人毎ニ金五厘ノ割合ヲ以テ計算シタル

金額ヲ交付ス
前項ノ金額ノ交付ヲ受ケムトスル者ハ明細書ヲ添付シ七月三十一日迄ニ所轄税務署ニ之ヲ請求スヘシ
△第三十二條　削除
△第三十三條　所得税法第三條第六項ノ場合ニ於テ同居者所得金額決定後別居スルモ所得税金額決定當時ノ税率ニ依リ其ノ年ノ所得税ヲ納ムヘシ
△第三十四條　公債社債ノ利子ヲ支拂フ者ハ支拂ノ際所得税金額ヲ控除スヘシ
△第三十五條　所得税ヲ課セサル法人ニシテ無記名ノ公債證券又ハ社債券ヲ取得シタルトキハ其ノ發行者又ハ讓渡人ノ證明ヲ得テ之ヲ利子支拂ノ取扱所ニ通知シ其所有ヲ證明スヘシ

四十二年大藏省令第十七號ヲ以テ書式ヲ定ム

第三十六條　府縣郡市區町村其ノ他公共ノ團體若ハ組合又ハ會社ニ於テ公債社債ノ利子ニ付キ所得税ヲ徴收シタルトキハ直チニ拂込書及計算書ヲ添ヘ之ヲ其所在地ノ金庫ニ拂込ムヘシ
國債利子支拂ノ取扱銀行ニ於テ國債ノ利子ニ付所得税ヲ徴收シタル

トキハ大藏大臣ノ命令ニ依リ之ヲ本店所在地ノ金庫ニ拂込ムヘシ
△第三十七條　所得税法第四十條ノ申出アリタルトキハ税務署長ハ左記各號ノ定ムル所ニ依リ所得金額ヲ改算更訂シ之ヲ納税義務者ニ通知スヘシ
一　收入豫算年額ニ減損ヲ生シタルトキハ其ノ減損額カ收入豫算年額ノ四分ノ一ニ達スル場合ニ限リ其ノ收入豫算年額ヨリ之ヲ控除ス但シ俸給、給料、手當又ハ歳費ノ收入豫算年額又ハ減損額ニ付テハ十分ノ九ヲ乘シタルモノニ依リ之ヲ計算ス
二　所得税法第四條ノ五ニ依リ控除スヘキ金額ハ前號ニ依リ計算シタル後之ヲ控除ス
○第三十八條　税金ノ一部ヲ納付シタル後所得金額ノ變更ニ依リ所得税金額ヲ減シタル場合ニ於テ既納ノ税金カ變更シタル所得税金額ニ超過スルトキハ其超過額ヲ還付シ不足スルトキハ其ノ不足額ヲ後納期ニ平分シテ徴收ス
第三十九條　第三種ノ所得ニ付キ納税義務アル者納税地ノ税務署管轄以外ニ於テ所得ヲ取得スルトキハ納税地ヲ其ノ地ノ税務署ニ申告ス

へシ

○第四十條　納税義務者住所以外ノ地ニ於テ所得税ヲ納メムトスルトキ又ハ所得税法施行地ニ住所又ハ居所ヲ有セサルトキハ納税地ヲ定メ其ノ地ノ税務署ニ申告スヘシ

第四十一條　納税義務者納税地ヲ變更スルトキハ其ノ旨新納税地ノ所轄税務署ニ申告スヘシ

第四十二條　納税義務者帝國外ニ住所若ハ居所ヲ移ストキハ其ノ旨税務署ニ申告スヘシ

第四十三條　納税義務者納税管理人ヲ定メタルトキハ其ノ氏名住所又ハ居所ヲ納税地ノ税務署ニ申告スヘシ

附　則（三十八年三月勅令第五十五號ヲ以テ改正追加ノ分）

本令ハ明治三十八年法律第三十四號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附　則（大正二年四月勅令第六十五號改正追加ノ分）

本令ハ大正二年法律第十三號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ大正二年ニ限リ第三十一條ノ二ノ毎年四月中ハ大正二年五月三十一日迄、六月三十日ハ七月三十一日、七月十日ハ八月十日、第三十一條ノ三ノ七月三十一日ハ八月三十一日トス

●大藏省令第五十三號　四十二年十一月三十日

所得税法第十一條但書ニ依リ特ニ所得調査委員會ヲ置クヘキ市及區左ノ通指定ス

四十五年一月省令[illegible]

東京税務監督局	
横須賀税務署所轄内	横須賀市
甲府同	甲府市
宇都宮同	宇都宮市
水戸同	水戸市
前橋同	前橋市
高崎同	高崎市
大阪税務監督局	
堺税務署所轄内	堺市
姫路同	姫路市
奈良同	奈良市
神戸同	神戸市
和歌山同	和歌山市
上京同	京都市上京區
下京同	仝下京區
大津同	大津市
福井同	福井市
金澤同	金澤市
富山同	富山市
高岡同	高岡市
札幌税務監督局	
函館税務署所轄内	函館區
小樽同	小樽區
札幌同	札幌區
仙臺税務監督局	
仙臺税務署所轄内	仙臺市
盛岡同	盛岡市
福島同	福島市
若松同	若松市
秋田同	秋田市
青森同	青森市
弘前同	弘前市

名古屋稅務監督局

名古屋稅務署所轄内	
山形同	山形市
米澤同	米澤市
名古屋稅務署所轄内	名古屋市
豐橋同	豐橋市
靜岡同	靜岡市
四日市同	四日市市
津同	津市
宇治山田同	宇治山田市
岐阜同	岐阜市
濱松同	濱松市
松本同	松本市
長野同	長野市
新潟同	新潟市
長岡同	長岡市
高田同	高田市

廣島稅務監督局

廣島稅務署所轄内	廣島市
吳同	吳市
尾道同	尾道市
下關同	下關市
岡山同	岡山市
鳥取同	鳥取市
松江同	松江市

丸龜稅務監督局

高松稅務署所轄内	高松市
丸龜同	丸龜市
德島同	德島市
高知同	高知市
松山同	松山市

熊本稅務監督局

熊本稅務署所轄内	熊本市

福岡同	福岡市
久留米同	久留米市
小倉同	小倉市 門司市
長崎同	長崎市
佐世保同	佐世保市
佐賀同	佐賀市
大分同	大分市
鹿兒島同	鹿兒島市

●大藏省令第五十四號 四十二年十一月三十日

所得稅法施行規則第五條但書ニ依リ所得調査委員ノ定數ヲ定ムルコト左ノ如シ

東京稅務監督局

神田橋稅務署所轄内		七人
永代橋同		七人
京橋同		七人
幸橋同		七人
四谷同		七人
水道橋同		七人
厩橋同		七人
兩國橋同		七人
横濱同		九人
神奈川同	市部	六人
	郡部	四人
横須賀同		三人
藤澤同		六人
小田原同		六人
千葉同		六人
銚子同		六人
甲府同	市部	四人
	郡部	四人
宇都宮同	市部	四人
	郡部	四人

栃木同		六人
矢板同		四人
水戸同	市部	四人
	郡部	六人
太田同		六人
松原同		四人
麻生同		六人
熊谷同		六人
龍ケ崎同		六人
土浦同		七人
前橋同	市部	四人
	郡部	七人
高崎同	市部	四人
	郡部	七人
中之條同		四人
太田原同		六人
大阪税務監督局		
東税務署所轄内		七人
西同		七人

南同		七人
北同		七人
玉造同		六人
茨木同		六人
堺同	市部	四人
	郡部	四人
住道同		六人
神戸同	市部	七人
	郡部	三人
明石同		六人
社同		六人
路姫同	市部	四人
	郡部	五人
龍野同		六人
洲本同		六人
奈良同	市部	三人
	郡部	五人
葛城同		六人

和歌山同	市部	四人
	郡部	四人
西宮同		六人
加古川同		六人
上京同	市部	七人
	郡部	三人
下京同	市部	八人
	郡部	三人
伏見同		七人
園部同		六人
峰山同		六人
大津同	市部	四人
	郡部	五人
長濱同		六人
福井同	市部	四人
	郡部	四人
武生同		六人

金澤同	市部	六人
	郡部	四人
七尾同		六人
富山同	市部	四人
	郡部	五人
高岡同	市部	四人
	郡部	五人
出町同		七人
仙臺税務監督局		
古川税務署所轄内		六人
石卷同		六人
大河原同		六人
盛岡同	市部	三人
	郡部	四人
盛同		四人
久慈同		四人
二戸同		四人

福島同	市部	三人
	郡部	六人
田島同		四人
若松同	市部	三人
	郡部	五人
仙臺同	市部	五人
	郡部	六人
郡山同		六人
秋田同	市部	四人
	郡部	五人
青森同	市部	四人
	郡部	三人
弘前同	市部	四人
	郡部	六人
田名部同		四人
山形同	市部	四人
	郡部	五人
鶴岡同		六人
米澤同	市部	四人
	郡部	五人

名古屋稅務監督局

名古屋稅務署所轄内	市部	九人
	郡部	五人
小牧同		六人
一宮同		六人
津島同		六人
半田同		六人
知立同		六人
岡崎同		六人
田口同		四人
豐橋同	市部	三人
	郡部	六人
沼津同		七人
靜岡同	市部	四人
	郡部	五人

藤枝同		六人
見付同		六人
濱松同	市部	三人
	郡部	五人
四日市同	市部	三人
	郡部	六人
津同	市部	三人
	郡部	七人
松坂同		六人
宇治山田同	市部	三人
	郡部	六人
上野同		六人
尾鷲同		四人
岐阜同	市部	四人
	郡部	七人
大垣同		七人
高山同		六人

關同		六人
岩村田同		六人
上田同		七人
松本同	市部	三人
	郡部	七人
中野同		六人
長野同	市部	四人
	郡部	六人
新發田同		六人
津川同		四人
長岡同	市部	三人
	郡部	六人
高田同	市部	三人
	郡部	五人

廣島稅務監督局

廣島稅務署所轄内	市部	七人
	郡部	五人

浜田同	市部	四人
	郡部	三人
尾道同	市部	三人
	郡部	六人
屋代同		四人
徳山同		六人
山口同		六人
下関同	市部	四人
	郡部	五人
厚狭同		六人
深川同		四人
岡山同	市部	五人
	郡部	三人
倉敷同		六人
津山同		六人
鳥取同	市部	三人
	郡部	五人

二部同		四人
松江同	市部	三人
	郡部	六人
大東同		四人
掛合同		四人
大森同		四人
津和野同		三人
丸亀税務監督局		
土庄税務署所轄内		四人
高松同	市部	四人
	郡部	五人
丸亀同	市部	三人
	郡部	五人
徳島同	市部	四人
	郡部	五人
高知同	市部	四人
	郡部	六人

松山同	市部	四人
	郡部	六人
久万同		四人
宇和島同		六人
熊本税務監督局		
熊本税務署所轄内	市部	五人
	郡部	六人
山鹿同		六人
御船同		六人
八代同		六人
福岡同	市部	五人
	郡部	七人
直方同		七人
久留米同	市部	四人
	郡部	六人
大牟田同		六人

小倉同	小倉市	四人
	門司市	五人
	郡部	五人
日出同		六人
森同		四人
中津同		六人
長崎同	市部	六人
	郡部	五人
武生水同		四人
島原同		四人
佐賀同	市部	四人
	郡部	六人
鳥栖同		六人
武雄同		六人
大分同	市部	四人
	郡部	五人
行橋同		六人
知覧同		六人

三十三年四月省令第二十一號三十五年十一月同第三十二號四十一年四月省令第十八號ニテ改正

●大藏省令第十七號　三十二年四月二十五日

所得稅法施行規則第三十六條第一項ニ依ル拂込書ハ第一號書式ニ計算書ハ第三號書式ニ準シテ調製スヘシ

金庫ニ於テ所得稅法施行規則第三十六條ニ依リ所得稅金ノ拂込ヲ受ケタルトキハ第二號書式ノ領收書ヲ拂込者ニ交付シ同號書式ノ通知書ヲ經テ歲入徵收官ニ送付スヘシ其計算書アルモノハ通知書ニ添付シテ之ヲ送付スヘシ

加治木同	六人
種子島同	四人
高千穗同	四人

第一號書式

用紙適宜輪廓縦四寸横三寸

所得税拂込書

大藏省主管		「何」年度
「何」税務署	所得税	租税

金庫取扱主任ノ印

円
Y10.000000

頭書ノ金額拂込候也

「何府縣郡市區町村」長

（公共團體其他之ニ準ス）

「氏　名」印

「何」金庫　印

明治「何」年「何」月「何」日

備考

一本書ノ年度ハ拂込ノ日ヲ以テ區別シ記入スヘシ

「」内並ニ印章ハ孰レモ朱

第二號書式

用紙適宜輪廓縦四寸横三寸二枚接續

所得税領收證書

所得税	「何」年度	第「何」號

「何府縣郡市區町村」長

（公共團體其他之ニ準ス）

「何　某」納

金庫取扱主任ノ印

円
Y10.000000

明治「何」年「何」月「何」日領收

「何」金庫　印

金庫割印

第四號書式

（明）治　年　月中
稅徵收高計算表

仕拂濟利子額		所得稅金額	仕拂未濟利子額	摘要
所得稅ヲ徵收セサル利子額	所得稅ヲ徵收セサル利子額			
円	円	円	円	

月　日

區町村其他公共團體若ハ組合長又ハ何會社

ロ七

●正誤　次葉ノ四號ハ三號ニ改ム

備考　一　金庫ハ本書式ノ左側ニ適宜原符ヲ附屬スルコトヲ得

通　知　書

第「何」號	「何」年度	大藏省主管
租　税	所得税	「何稅務署」

「何府縣郡市區町村」長
（公共團體其他之ニ準ス）
「何　某」納

Y10.000000円

明治「何」年「何」月「何」日
「何」金　庫　印
「何」稅務署長官氏名」殿

明
所得

利子	仕拂期	公債社債類
円		

年 日

市郡縣府何

●大藏省令第三十六號　三十三年二月十七日

第二種所得ニ付所得稅ノ過誤納アリタルトキ下戾請求者ハ公債社債ノ利子支拂者ヲ經由シテ其ノ利子支拂地ノ所轄稅務署長ニ下戾ヲ請求スルコトヲ要ス（三十五年十二月省令第三十三號ニテ改正）

●法律第三十四號　三十三年三月六日

產業組合法（抄錄）

第六條　產業組合ニハ所得稅及營業稅ヲ課セス

●法律第十九號　三十八年二月十五日

軍備補充ノ爲及臨時事件費支辨ノ爲明治三十七年以降政府ノ發行スル國債證券ノ利子及貯蓄債券法ニ依リ發行スル貯蓄債券ノ利子ハ所得稅ヲ免除ス但シ既納ノ稅金ハ之ヲ還付セス

●法律第七號　四十二年三月二十日

國債ノ利子ニハ所得稅ヲ課セス

附　則

本法ハ明治四十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●勅令第百八十六號　四十三年三月二十九日

所得稅法及非常特別稅法中法人ノ所得ニ關スル規定ハ明治四十三年分ヨリ之ヲ臺灣ニ施行ス但シ所得稅法第三十六條乃至第三十八條ノ規定ハ此ノ限ニ在ラス

●大藏省令第二十五號　大正二年七月五日

租税ニ關スル委員及織物鑑定人手當旅費支給方竝織物消費税法第九條第五項ニ依リ異議申立人ノ負擔スヘキ費用左ノ通相定ム

第一條　所得調査委員所得ノ調査ニ從事シタルトキハ一會期ニ付左ノ區別ニ依リ手當ヲ支給ス

所得納税者ノ數五千人以上ナルトキ	五十圓
所得納税者ノ數三千人以上ナルトキ	四十圓
所得納税者ノ數千人以上ナルトキ	三十五圓
所得納税者ノ數千人未滿ナルトキ	三十圓

所得納税者ノ數ハ所得調査委員會ニ於テ其ノ年調査ヲ結了シタル納税人員ニ依ル

所得調査ノ爲開會シタル所得調査委員會ノ日數ハ第一項ノ會期ニ包含セラルルモノトス

第二條　所得調査委員會開會中所得調査委員ニ闕員ヲ生シ補缺ヲ爲シタル場合ニ於テハ前條ノ金額ヲ會期中前委員及補缺員カ其ノ資格ヲ有セシ日數ニ按分シテ其ノ手當金額ヲ定ム

第三條　所得調査委員營業税審査委員相續税審査委員及織物消費税法第九條第四項ノ鑑定人審査又ハ鑑定ニ從事シタルトキハ日當金三圓ヲ支給ス但シ官吏ニシテ委員又ハ鑑定人タル者ハ此ノ限ニ在ラス

第四條　第一條及第三條ノ委員又ハ鑑定人ニシテ官吏ニ非サル者ニハ別表定ムル所ニ依リ往復旅費ヲ支給ス但シ租税ニ關スル調査、審査又ハ鑑定ニ從事シタル日ノ旅行ニ付テハ鉄道賃、船賃、車馬賃ノミヲ支給ス

第五條　前條ノ旅費支給ノ方法ニ關シテハ内國旅費規則ヲ準用ス

第六條　收税官吏ニ非サル官吏在勤廳所在地ニ於テ鑑定ニ從事スル場合ニ於テハ日當金一圓ヲ支給ス

前項ノ日當ヲ支給スヘキ場合ニ於テハ内國旅費規則第九條ノ日當ヲ支給セス

第七條　織物消費税法第九條第五項ニ依リ異議申立人ノ負擔スヘキ費用ハ鑑定人ノ日當、旅費及鑑定ニ要シタル實費トス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十二年四月大藏省令第十二號、明治三十六年六月大藏省令第十六號、明治三十八年三月大藏省令第二十號及明治四十三年四月大藏省令第十六號ハ之ヲ廢止ス

別表

旅費額

鐵道賃一哩ニ付	三錢
船賃一海里ニ付	四錢
車馬賃一里ニ付	二十五錢
宿泊料一夜ニ付	一圓五十錢
日當一日ニ付	一圓

●勅令第六十九號　大正二年五月一日

第一條　左ニ掲クル物產ノ製造業ヲ營ム者ニハ所得税法第五條ノ二ノ規定ニ依リ所得税ヲ免除ス

一　金、銀、鉛、亞鉛、鐵又ハアルミニウムノ地金

二　鐵ノ條、竿、テー形アングル形類、軌條、板、線及管（鑄製管ヲ除ク）

三　銅ノ合金ノ條竿、板及管

四　汽鑵、原動機（機關車ヲ含ム）及動力ヲ以テ運轉スル鐵製ノ機械

五　燐、曹達灰、苛性曹達、硫酸アムモニウム、石炭酸、クロール酸加里及グリセリン

六　製紙用パルプ

七　板硝子

八　コンデンスドミルク

九　絹、亞麻又ハ毛ノ織物

前項第九號ノ物產ノ製造業ニ付テハ動力ヲ以テ運轉スル機械ヲ使用シ幅鯨尺一尺八寸以上及長鯨尺三十尺以上ノ織物ノミヲ製造スル者ニ限ル

第二條　前條ノ製造業ヲ繼續シ又ハ繼續ト認ムヘキ事實アル者ニ付テ

ハ前ノ製造業者カ所得税ノ免除期間内ニ在ルトキハ其ノ免除期間ヲ繼承シ免除期間内ニ在ラサルトキハ免除ヲ受クルコトヲ得ス

第三條　第一條ノ免除ヲ受ケムトスル者ハ所得税法第七條又ハ第八條ノ規定ニ依リ所得ヲ申告スルトキ其ノ旨所轄税務署ニ申請スヘシ

前項ノ場合ニ於テ第一條ノ製造業ヨリ生スル所得ト其ノ他ノ所得トヲ有スルトキハ第一條ノ製造業ヨリ生スル所得ト其ノ他ノ所得トヲ區別シタル計算書ヲ添附スヘシ

第四條　前條ノ申請アリタルトキハ其ノ免除スヘキ所得ヲ調査シテ申請者ノ所得ヨリ之ヲ控除シ所得税法第三十五條ノ通知ヲ為ストキ其ノ金額ヲ附記スヘシ但シ控除ノ結果納税義務ナキニ至リタルトキハ單ニ其ノ旨通知スヘシ

第五條　第三條ノ申請ヲ為シタル者ハ收税官吏ニ於テ必要ト認ムルトキハ帳簿物件ノ檢査ヲ受クヘシ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前開始シタル第一條ノ製造業ニ付テハ本令ヲ適用セス

○第三款　營業税

●法律第三十三號　二十九年三月二十七日

營業税法（△三十五年三月法律第十八號ニテ追加三十六年一月一日ヨリ施行 ○四十三年四月法律第四十四號ニテ改正四十四年一月一日ヨリ施行）

第一條　左ニ掲クル營業ヲ為ス者ニハ營業税ヲ課ス

一　物品販賣業
一　銀行業
一　保險業
一　金錢貸付業
一　物品貸付業
一　製造業
一　運送業
一　倉庫業
一　運河業
一　棧橋業
一　船舶碇繫業

一　貨物陸揚業
△一　鐵道業
○一　請負業
一　印刷業
○一　出版業
一　寫眞業
一　席貸業
一　旅人宿業
一　料理店業
○一　周旋業
○一　代理業
一　仲立業
○一　問屋業
○一　信託業

第二條　營業稅ヲ課スヘキ物品販賣業ハ一定ノ店舖其ノ他ノ營業場ヲ設ケ物品ノ卸賣又ハ小賣ヲ爲ス者ヲ謂フ

左ノ諸業ハ前項ニ該當セサルモ仍物品販賣業ト見做ス

一　一定ノ製造場ナク職工ヲ使役スルコトナク原料ヲ供給シ工錢ヲ支拂ヒ物品ヲ製造セシメテ販賣スル者

二　一定ノ製造場ヲ設ケス店頭ニ於テ物品ヲ製造シ主トシテ小賣ヲ爲ス者

三　牧場ニ非サル場所ニ於テ飼料ヲ購求シ家畜又ハ家禽ヲ飼養シ之ヲ賣リ又ハ鷄卵、牛乳等其ノ產物ヲ販賣スル者

四　魚介類ヲ養殖シテ販賣スル者

五　動植物其ノ他普通ニ物品ト稱セサルモノヲ販賣スル者

一ケ年ノ賣上金額千圓未滿ノ者ニハ營業稅ヲ課セス

第四條ノ營業者其ノ製造場區域内ニ於テ製造品ヲ販賣シ及別ニ營業場ヲ設ケ其ノ製造品ノ卸賣營業ヲ爲スモ物品販賣業トセス

第三條　營業稅ヲ課スヘキ金錢貸付業及物品貸付業ハ一定ノ店舖其ノ他ノ營業場ヲ設ケ貸付ノ業ヲ營ム者ヲ謂フ普通ニ物品ト稱セサルモノノ貸付ヲ爲スモ亦同シ

○運轉資本金額五百圓未滿ノ者ニハ營業稅ヲ課セス

▲九十七

○第四條　營業税ヲ課スヘキ製造業ハ一定ノ製造場ヲ設ケ職工勞役者ヲ使役シテ物品ヲ製造シ又ハ物品製造ノ一部ヲ助成スル者ヲ謂ノ瓦斯電氣ノ供給ヲ爲ス者及物品ノ修理ヲ爲シ又ハ穀物ヲ精白搗碎シ又ハ染物ヲ爲ス者ハ前項製造業ト看做ス
資本金額五百圓未滿ノ者又ハ職工勞役者ヲ通シテ二人以上ヲ使用セサル者ニハ營業税ヲ課セス

△第五條ノ一　運賃又ハ手數料ヲ受ケテ旅客貨物ノ運送ヲ爲シ又ハ其ノ取扱ヲ爲ス者ヲ運送業トシテ營業税ヲ課ス但シ雇人二人以上ヲ使用セサル者ニハ營業税ヲ課セス

△第五條ノ二　私設鉄道法及輕便鉄道法ニ依リ運送ノ業ヲ營ム者ヲ鉄道業トシテ營業税ヲ課ス（四十四年三月二十七日法律第三十九號ヲ以テ改正）

第六條　倉庫ヲ備ヘテ貨物ヲ預リ倉敷料其他ノ名義ヲ以テ報酬ヲ受クル者ヲ倉庫業トシテ營業税ヲ課ス

○第七條　印刷業、出版業、寫眞業ニシテ職工雇人ヲ通シテ二人以上ヲ使用セサル者及請負業ニシテ請負金額一箇年千圓未滿ノ者ニハ營業税ヲ課セス
出版業ニシテ新聞紙法ニ依ルモノニハ營業税ヲ課セス

第八條　貸料又ハ其ノ他ノ名義ヲ以テ報酬ヲ受ケ客室又ハ集會場ヲ貸ス者ヲ席貸業トシテ營業税ヲ課ス但建物賃貸價格五十圓未滿ノ者ニハ營業税ヲ課セス

第九條　營業税ヲ課スヘキ旅人宿業ハ飲食物ヲ供スルト否トニ拘ラス旅客宿泊セシメ又ハ人ヲ寄宿セシメ雇人三人以上ヲ使用スル者トス
但木錢宿ニハ營業税ヲ課セス

△第十條ノ一　營業税ヲ課スヘキ料理店業ハ雇人二人以上ヲ使用シ客室ヲ設ケテ飲食物ヲ販賣スル者トス

○△第十條ノ二　營業税ヲ課スヘキ周旋業、代理業、仲立業、問屋業、信託業ハ一箇年報償金額百圓以上ノ者トス

第十一條　左ニ掲クル營業ニハ營業税ヲ課セス
一　政府ヨリ發行スル印紙、切手類ノ賣捌
二　自己ノ採掘又ハ採取シタル鑛物ノ販賣
三　度量衡ノ製作、修覆、販賣

○第十二條　營業税ハ左ノ課税標準及税率ニ依リ毎年之ヲ賦課ス

業名	課税標準	税率
物品販賣業	賣上金額 建物賃貸價格 從業者	卸賣ハ萬分ノ十二 小賣ハ萬分ノ三十六 千分ノ九十 一人毎ニ金二圓
銀行業 保險業	資本金額 建物賃貸價格 從業者	千分ノ五 千分ノ九十 一人毎ニ金二圓
金錢貸付業 物品貸付業	運轉資本金額 建物賃貸價格 從業者	千分ノ六半 千分ノ九十 一人毎ニ金二圓
製造業 印刷業 出版業 寫眞業	資本金額 建物賃貸價格 從業者 從業者ノ內職工勞役者	千分ノ三、七 千分ノ九十 一人毎ニ金二圓 一人毎ニ金五十錢
運送業、運河業、棧橋業、船舶碇繋場業、貨物陸揚業	資本金額 從業者	千分ノ六 一人毎ニ金二圓
倉庫業	資本金額 建物賃貸價格 從業者	千分ノ五 千分ノ四十五 一人毎ニ金二圓
鐵道業	收入金額 從業者	千分ノ二十五 一人毎ニ金二圓
請負業	請負金額 從業者	千分ノ五 一人毎ニ金二圓
席貸業 料理店業	建物賃貸價格 從業者	千分ノ百三十五 一人毎ニ金二圓
旅人宿業	建物賃貸價格 從業者	千分ノ九十 一人毎ニ金二圓

周旋業 代理業	報償金額 従業者	千分ノ三十五 一人毎ニ　金二圓
仲立業 問屋業 信託業	報償金額 従業者	千分ノ三十七半 一人毎ニ　金二圓

營業者ヲ除クノ外従業者中十五歳未滿ノ者ニ付テハ前項税率ノ二分ノ一トス

第十三條　此ノ税法ニ依リ納税義務ヲ有スル營業者ハ毎年一月三十一日迄ニ業名及課税標準ヲ詳記シ政府ニ届出ヘシ但シ新ニ開業シタル者ハ其ノ際本條ノ届出ヲ爲スヘシ

營業者廢業シタルトキハ其ノ際政府ニ届出ヘシ

第十四條　同一人ニシテ數種ノ營業ヲ爲ストキハ第十二條ノ課税標準ニ依リ各別ニ營業税ヲ課ス但課税標準トナルヘキモノヲ共通シテ使用スルトキハ其ノ一ニ就テ計算ス其ノ税率異ナルトキハ重キニ從フ

○第十五條　物品販賣業、請負業、席貸業、旅人宿業、料理店業、周旋業、代理業、仲立業、問屋業、信託業ハ各店舗其ノ他ノ營業場毎ニ營業税ヲ課ス

前項ニ揭ケサル營業ニシテ店舗其ノ他ノ營業場數箇所アルトキハ其ノ資本ヲ區分シタルモノハ各別ニ營業税ヲ課ス其ノ資本ヲ區分セサルモノハ合算シテ之ヲ課ス但内國ト外國トニ渉リ店舗其ノ他ノ營業場數箇所アルトキ資本ヲ區分セサルモノハ内國ニ於ケル各店舗其ノ他ノ營業場ニ於テ使用スル資本金額ヲ見積リ内國ノ分ニ限リ各別ニ之ヲ課ス（三十二年法律第三十二號ヲ以テ但書追加）

第十六條　第十三條ニ依リ届出ヘキ課税標準ハ左ノ區別ニ從ヒ之ヲ計算ス但シ新ニ開業シタル者ハ豫算ヲ以テ之ヲ定ム

△一　賣上金、收入金、請負金及報償金ハ前年中ノ總額ニ依ル但シ前年中ニ開業シタルモノハ豫算ニ依ル

二　資本金及建物賃貸價格ハ前年中ノ平均額ニ依ル

三　從業者ハ前年ニ於ケル最多數ノトキニ依ル

資本金額ノ算定方法ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

△第十七條　納税義務ヲ有スル營業者第十三條ノ届出ヲ爲ササルトキ又ハ其ノ届出タル課税標準ヲ不相當ト認ムルトキハ政府ハ其ノ課税標準ヲ算定スルコトヲ得

△第十八條　建物賃貸價格ハ店舗其ノ他營業用ノ土地、家屋ノ借料ニ相當スルモノトス但シ住居ニ供スルモノ其ノ他直接ニ營業ニ使用セサルモノアルモ同一區域內ニアリテ自己ノ所用ニ係ルモノハ營業用トシテ計算ス

借家ノ場合ニ於テハ何等ノ名義ヲ用ユルニ拘ラス土地、建物ノ貸借上借主ヨリ貸主ニ支拂フモノヲ以テ建物賃貸價格ヲ計算ス

借家ニ非サル場合ニ於テハ近傍借家ノ借料ヲ照準シテ建物賃貸價格ヲ定ム近傍ニ照準スヘキ借家ナキトキハ其ノ土地、家屋ノ時價ヲ各別ニ算定シ土地ハ其ノ百分ノ五、家屋ハ百分ノ十ヲ以テ其ノ賃貸價格ヲ定ム無償ノ借家ニ付テモ亦同シ

第十九條　名義ノ何タルヲ問ハス總テ營業ニ從事スル者ハ從業者トシテ之ヲ計算ス但シ營業者ノ家族ヲ除ク

第二十條　營業稅ハ年額ヲ二分シ其ノ年五月、十一月ヲ以テ納期トス

但シ廢業スルトキ未納ノ稅金ハ即納トス

○△第二十一條　新ニ營業ヲ開始スル者ハ開業ノ翌年ヨリ其ノ營業稅ヲ徵收ス

左ニ揭クル營業ヲ開始スル者ハ開業ノ翌年ヨリ尙三箇年間其ノ營業稅ヲ徵收セス但シ此ノ稅法施行以前ヨリ營業スル者ニシテ其ノ開業ノ翌年ヨリ三箇年ニ滿タサルトキハ本項ニ準據スルコトヲ得

銀行業、保險業、倉庫業、製造業、印刷業、出版業、運送業、運河業、棧橋業、船舶碇繫業、鐵道業

第二十二條　同一ノ場所ニ於テ六箇月以內ニ前ノ營業者ト同一ノ營業ヲ開始スル者ハ其ノ月ヨリ營業稅ヲ徵收ス

第二十三條　營業ヲ繼續シ又ハ營業繼續ト認ムヘキ事實アルトキハ納期ニ於テ現ニ營業スル者ヨリ營業稅ヲ徵收ス

第二十四條　營業者廢業スルトキハ其ノ廢業ノ月迄營業稅ヲ徵收ス但シ他ニ其ノ營業ヲ繼續スル者アルトキハ前條ニ依ル

△第二十五條　第二十二條及第二十三條ノ場合ニ於テ前ノ營業者第二十一條ノ期間內ニアルトキハ其ノ期間ハ後ノ營業者ニ及フモノトス

△第二十六條　政府ニ於テ課稅標準ヲ算定シタルトキハ之ヲ營業者ニ通知スヘシ

第二十七條　前條ノ算定ニ對シ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ

二十日以内ニ申立テ審査ヲ求ムルコトヲ得但シ此ノ塲合ニ於テ政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セス

△第二十八條ノ一　前條ノ請求アリタルトキハ營業税審査委員會ノ諮問ヲ經テ政府之ヲ決定ス

○△第二十八條ノ二　各税務署所轄内ニ營業税審査委員會ヲ置ク

審査委員會ノ會議ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

審査委員ハ五名乃至七名トシ納税義務ヲ有スル營業者中ヨリ大藏大臣之ヲ命ス

△第二十八條ノ三　收税官吏ハ審査委員會ニ出席シテ意見ヲ述フルコトヲ得

△第二十八條ノ四　營業者第二十八條ノ一ノ決定ニ對シ不服アルトキハ訴願又ハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

△第二十九條　左ノ塲合ニ於テハ營業者ハ政府ニ其ノ由ヲ申立ツルコトヲ得

一　課税標準タル資本金額、賣上金額、收入金額、請負金額、報償

金額、又ハ建物賃貸價格半額以上ヲ減シタルトキ

二　課税ノ標準タル從業者ノ人員屆出人員二分ノ一以下ニ減シタルトキ

第三十條　政府ハ前條ノ申出ニ由リ營業者ノ狀況ニ照シ營業税ヲ減額スルノ必要アリト認ムルトキハ翌年一月迄税金ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

△第三十一條　政府ハ第二十九條ノ申出ニ對シ翌年一月ニ於テ課税標準ヲ查覈シ左ノ塲合ニ該當スルモノアルトキハ税金ヲ減額スルコトヲ得

一　課税標準タル賣上金額、收入金額、請負金額、報償金額ハ前々年中ノ總額資本金額、建物賃貸價格ハ前々年中ノ平均額ノ半額ニ達セサルトキ

二　課税ノ標準タル從業者ノ人員其ノ最多數ノトキニ於テ屆出人員ノ二分ノ一ニ達セサルトキ

課税標準ノ課税最低限以下ニ減シタル塲合ニ於テモ仍其ノ割合ヲ以テ税金ヲ徵收ス

第三十二條　第一條ニ揭クル營業者ハ貨物ノ仕入、賣上、受入、貸付、廻送、從業者ノ人員及營業ニ關スル金錢ノ出納ヲ明ニスル爲メ帳簿ヲ備ヘ營業上一切ノ事實ヲ記載スヘシ

第三十三條　收稅官吏ハ營業ニ關スル帳簿、物件ヲ檢査シ又ハ營業者ニ質問スルコトヲ得

第三十四條　第十三條ノ屆出ヲ爲サス若ハ虛僞ノ屆出ヲ爲シ又ハ故意ヲ以テ第三十二條ノ帳簿ノ記載ヲ怠リ若ハ虛僞ノ記載ヲ爲シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス其ノ脫稅シタル者ハ脫稅金額ノ三倍ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第三十五條　此ノ稅法ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪、減輕、再犯加重、數罪俱發ノ例ヲ用井ス

第三十六條　府縣ハ此ノ稅法ニ依リ納稅義務ヲ有スル營業者ノ營業ニ對シ本稅十分ノ二以內ノ附加稅ヲ課スルコトヲ得此ノ附加稅ノ外府縣稅又ハ地方稅ヲ課スルコトヲ得ス

附　則

第三十七條　此ノ稅法ハ明治三十年一月一日ヨリ施行ス

▲九ト八

第三十八條　明治二十九年度ニ屬スル府縣稅又ハ地方稅ハ第三十六條ノ規定ニ依ルノ限リニ在ラス

明治二十九年度ニ屬スル府縣稅又ハ地方稅ノ賦課ヲ受ケタル業體ニ對スル此ノ稅法ノ營業稅ハ明治三十年ニ限リ年額四分ノ三ヲ徵收ス

第三十九號　第二十條五月ノ納期ハ明治三十年ニ限リ七月トス

第四十條　第十五條第二項但書ノ規定ハ此ノ法律施行地ト此ノ法律ヲ施行セサル地トニ涉リ店鋪其ノ他ノ營業場數箇所アル場合ニ之ヲ準用ス（三十二年法律第三十二號ヲ以テ本條追加）

○附　則（四十三年四月五日法律第四十五號改正ノ分）

本法ハ明治四十四年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

非常特別稅法中營業稅ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

附　則（四十四年三月二十七日法律第三十九號ニテ改正ノ分）

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前私設鐵道法ニ依ル鐵道ニシテ輕便鐵道法附則ニ依リ輕便鐵道ニ指定セラレタルモノニ對シテハ其ノ指定ノ日ヨリ本法ヲ適用ス

▲六

●勅令第二百六十九號　二十九年七月二十日

營業税法施行規則（△三十五年十月勅令第二百二十號ヲ以テ改正追加
○三十六年五月勅令第九十九號ヲ以テ改正）

△第一條　營業税法第一條ノ營業ヲ爲ス者ニシテ同法第二條以下ノ規定ニ依リ營業税ヲ課セラルヘキ者ハ其ノ店舗其ノ他ノ營業場所在地ノ税務署ニ同法第十三條ノ届出ヲ爲スヘシ但シ同法第十五條第二項末段ノ場合ニ於テハ其ノ主タル店舗其ノ他ノ營業場所在地ノ税務署ニ届出ヘシ

左ニ掲クル者ハ同法第十三條第一項但書ニ依リ開業後十日以内ニ税務署ニ新規開業ノ届出ヲ爲スヘシ

一　新ニ同法第一條ノ營業ヲ開始スル者

二　同法第十五條第二項末段ノ場合ニ該當セサル者ニシテ新ニ店舖其ノ他ノ營業場ヲ增設スル者

三　新ニ營業ノ種類ヲ增加スル者

第二條　同一人ニシテ數種ノ營業ヲ爲ストキハ店舗其ノ他ノ營業場ノ同一ナルト否トヲ問ハス營業ノ種類竝ニ各店舗其ノ他ノ營業場每ニ區分シテ營業税法第十二條ノ課税標準ヲ計算スヘシ但シ課税標準ト

ナルヘキモノヲ數種ノ營業ニ共通シテ使用スル場合ニ於テハ税率ノ最モ重キ營業、税率等シキトキハ其ノ重ナル營業ノ一方ニ其ノ課税標準ヲ計算スヘシ

前項但書ノ規定ニ依リ共通ノ課税標準ヲ計算シタル營業ヲ廢シタルトキハ其ノ翌月ヨリ月割ヲ以テ前項但書ノ規定ニ準シ其ノ課税標準ヲ他ノ營業ニ計算スヘシ（四十三年十二月勅令第四百五十一號ニテ本項ヲ加フ）

第三條　同一人ニシテ數箇ノ店舗其ノ他ノ營業場ニ於テ同種ノ營業ヲ爲ストキハ各店舗其ノ他ノ營業場毎ニ營業税法第十二條ノ課税標準ヲ計算スヘシ

第四條　營業税法第十五條第二項末段ニ依リ數箇ノ店舗其ノ他ノ營業場ヲ合セテ營業税ヲ課セラルヘキ場合ニ於テハ総テノ店舗其ノ他ノ營業場ヲ通シテ同法第十二條ノ課税標準ヲ計算スヘシ

△第五條　株式會社ニ於テ課税標準トナスヘキ資本金額ハ前年中ノ各月末ニ於ケル拂込株式金額及名義ノ何タルヲ問ハス各種ノ積立金額其ノ他積立金ノ性質ヲ有スル資産金額トシ月割平均ヲ以テ之ヲ算定ス

但シ保險會社ニ於ケル保險責任準備金及保險支拂備金ハ之ヲ除算ス

（四十三年十二月勅令第四百五十一號ニテ改正）

△第六條ノ一　合資會社ニ於テ課税標準トナスヘキ資本金額ハ前年中各月末ニ於ケル出資金額名義ノ何タルヲ問ハス各種ノ積立金額其ノ他積立金ノ性質ヲ有スル資産金額及借入金アルトキハ其ノ出資金額ヲ超過スル金額トシ月割平均ヲ以テ之ヲ算定ス（同上）

△第六條ノ二　株式合資會社ニ於テ課税標準ト爲スヘキ資本金額ハ前年中ノ各月末ニ於ケル出資金額、拂込株式金額及名義ノ何タルヲ問ハス各種ノ積立金額其ノ他積立金ノ性質ヲ有スル資産金額トシ月割平均ヲ以テ之ヲ算定ス

▲七

△第七條ノ一　合名會社ニ於テ課税標準トナスヘキ資本金額ハ前年中各月末ニ於ケル総社員ノ出資金額名義ノ何タルヲ問ハス各種ノ積立金額其ノ他積立金ノ性質ヲ有スル資産金額及借入金額アルトキハ其ノ出資金額ヲ超過スル金額トシ月割平均ヲ以テ之ヲ算定ス（第五條ノ割註ニ同シ）

△第七條ノ二　株式會社、合資會社、株式合資會社又ハ合名會社ニ於テ營業税法第一條ニ掲クル營業ト同條ニ掲ケサル營業トヲ兼業スルトキハ前四條ニ依リ算定シタル資本金額中ヨリ營業税法第一條ニ掲ケ

昭十二年十月十四日勅令第三百四號ニテ但書追加

サル營業ニ對スル見積資本金額ヲ控除シタルモノヲ以テ課税標準ト爲スヘキ資本金額トス

第八條　一個人ニ於テ課税標準トナスヘキ資本金額ハ他ヨリ借入レタルト否トヲ問ハス前年中各月末ニ於ケル固定資本及運轉資本ノ月割平均ヲ以テ之ヲ算定ス但シ銀行業ニ在リテハ第七條ノ一ノ規定ヲ準用ス前項固定資本ハ直接ニ營業ノ用ニ供スル土地、建物、築造物、船舶、諸器具、器械ノ價格ヲ計算ス其價格ハ時價相當ノ見積金額ニ依ル

第八條ノ二　會社タルト個人タルトヲ問ハス金錢貸付業又ハ物品貸付業ノ課税標準ト爲スヘキ運轉資本金額ハ前年中各月末ニ於ケル貸付及貸付クヘキ金額又ハ貸付及貸付クヘキ物品ノ見積價格トシ月割平均ヲ以テ之ヲ算定ス（四十三年十二月勅令第四百五十一號ニテ本條追加）

第九條　課税標準額ヲ豫算スルトキハ屆出當時ノ實況ニ依リ尚ホ過去將來ノ形情ヲ斟酌シテ之ヲ算出スヘシ

△第十條（削除）

第十一條　營業税法第十八條第二項ノ場合ニ於テ借地料借家料ヲ支拂フニ金錢ニアラサル物品ヲ以テスルトキハ其ノ物品ノ時價ニ依リ之

▲八

ヲ定ムヘシ

營業者借地ニ於テ自己ノ建物ヲ所有スルトキハ其ノ土地ハ營業税法第十八條第二項ニ依リ建物ハ同條第三項ニ依リ其ノ賃貸價格ヲ計算スヘシ

營業者借家中ニ於テ其ノ建物ノ一部分ヲ所有スルトキハ自己所有ノ部分ハ營業税法第十八條第三項ニ依リ其ノ建物賃貸價格ヲ計算スヘシ建物中雜作全部ヲ借主ニ於テ所有スルトキ亦同シ

第十二條　從業者ハ營業主ヲ始メ店舗其ノ他ノ營業場ニ居住スルト否ト使役ノ當時タルト臨時タルトヲ問ハス總テ直接ニ營業ニ從事スル者ヲ計算スヘシ但シ營業主ト同一戸籍内ニ在ル者ハ計算セス

△第十三條　相續讓渡其ノ他原因ノ何タルヲ問ハス營業ヲ繼續スル者ハ其ノ繼續後十日以内ニ税務署ニ其ノ旨ヲ屆出ヘシ

第十四條　營業者住所氏名ヲ變更シ又ハ店舗其ノ他ノ營業場ヲ移轉シタルトキハ十日以内ニ税務署ニ其ノ旨ヲ屆出ヘシ其ノ移轉他ノ管轄地方ニ渉ルトキハ移轉先ノ税務署ニ屆出ヘシ

△第十五條　營業税法第十五條第二項末段ニ該當スル場合ニシテ店舗其

ノ他ノ營業場ヲ增設シタル者ハ其ノ增設後十日以內ニ其旨ヲ税務署
屆出ヘシ

○△第十六條 納税義務アル營業者第一條ノ屆出ヲ爲サヽルトキ又ハ其ノ屆出タル課税標準ヲ不相當ト認ムルトキハ税務署長ハ營業税法第十六條ノ算定方法ニ依リ其ノ課税標準ヲ算定スヘシ

○△第十七條 税務署長前條ニ依リ課税標準ヲ算定シタルトキハ之ヲ營業者ニ通知スヘシ

前項ノ通知ヲ受ケタル營業者ハ税務署ニ申出テ其ノ算定ノ說明ヲ求ムルコトヲ得

○△第十八條 前條ノ算定ニ對シ異議アル者審査ヲ求メムトスルトキハ其ノ理由ヲ詳記シ營業税法第二十七條ノ期限內ニ税務署長ニ申出ヘシ（四十三年十二月勅令第四百五十一號ニテ改正）

○△第十九條 税務署長課税標準審査ノ請求ヲ受ケタルトキハ營業税審査委員會ノ諮問ヲ經テ課税標準ヲ決定シ之ヲ營業者ニ通知スヘシ（同上）

前項ノ場合ニ於テハ第十七條第二項ヲ準用ス

△第二十條 削除（四十三年十二月勅令第四百五十一號）

○△第二十一條 審査委員會ハ税務署長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク（同上勅令ヲ以テ改正）

△第二十二條 審査委員ハ每年最初ノ開會ノ時ニ於テ審査委員中ヨリ會長ヲ選舉スヘシ

△第二十三條 審査委員會ノ會長出席セサルトキハ出席シタル委員中ノ年長者之ヲ代理スヘシ

△第二十四條 審査委員ハ定員ノ過半數ニ當ル委員出席スルニ非サレハ決議スルコトヲ得ス

議事ハ出席員ノ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

△第二十五條 審査委員ハ自己又ハ自己カ代表スル會社ノ課税標準ニ關スル議事ニ與ルコトヲ得ス

△第二十六條 營業者ヨリ營業税法第二十九條ノ申立アリタルトキハ税務署ハ課税標準額算定ノ方法ニ依リ其ノ年營業ノ實況ヲ調査シ同法第三十一條第一號又ハ同條第二號ニ該當スルトキハ其ノ課税標準額ノ全部ヲ改算スヘシ

△第二十七條 營業者店舖其ノ他ノ營業場外ニ居住シ又ハ旅行シ店舖其

ノ他ノ營業場ニ不在ナルトキハ營業税ニ關スル事項ヲ處理セシムル爲ニ納税管理人ヲ定メ税務署ニ屆出ヘシ

△第二十八條　營業税法第三十三條ニ依リ收税官吏營業ニ關スル帳簿物件ヲ檢査スルトキハ税務署ノ檢査章ヲ其ノ營業者ニ示スヘシ

附　則

第二十九條　營業税法第二十一條第二項但書ニ該當スル營業者ハ同法第十三條ノ屆出ニ要スル事項ヲ詳記シタル書類ヲ添ヘ明治三十年一月三十一日迄ニ地方長官ニ其開業年月日ヲ屆出ヘシ

△附　則（三十五年十月勅令第二百二十號ノ分）

本令ハ明治三十六年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

附　則（四十三年十二月二十六日勅令第四百五十一號ノ分）

本令ハ明治四十四年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

●大藏省令第二號　三十年三月十三日（三十九年十二月省令第二十九號ニテ樣式改正）

明治二十九年七月勅令第二百六十九號營業税法施行規則第二十八條ニ依リ税務署長ノ交付スヘキ檢査章樣式左ノ通相定ム

樣式　用紙厚質白紙（竪四寸 横二寸五分）

檢查章 （税務署印） 官氏名 何税務署

●法律第三十四號　三十三年三月六日

産業組合法（抄錄）

第六條　産業組合ニハ所得税及營業税ヲ課セス

●法律第四十五號　三十八年三月七日

鑛業法（抄錄）

第八十二條　鑛業權者ニハ其ノ鑛業ニ付營業税ヲ課セス

生又ハ所得税ノ當出ツ

●法律第六十九號 ニ三十三年三月

(保險業法抄)

第九十條 保險會社ニハ營業税ヲ課セス

●大藏省令第二十五號(抄錄) 大正三年七月五日

租税ニ關スル委員及織物鑑定人手當旅費支給方並織物消費税法第九條第五項ニ依リ異議申立人ノ負擔スヘキ費用左ノ通相定ム

第一條 (所得調査委員ノ手當ニ付省略ス)

第二條 (同上)

第三條 所得調査委員營業税審査委員相續税審査委員及織物消費税法第九條第四項ノ鑑定人審査又ハ鑑定ニ從事シタルトキハ日當金三圓ヲ支給ス但シ官吏ニシテ委員又ハ鑑定人タル者ハ此ノ限ニ在ラス

第四條 第一條及第三條ノ委員又ハ鑑定人ニシテ官吏ニ非サル者ニハ別表定ムル所ニ依リ往復旅費ヲ支給ス但シ租税ニ關スル調査、審査又ハ鑑定ニ從事シタル日ノ旅行ニ付テハ鐵道賃、船賃、車馬賃ノミヲ支給ス

第五條 前條ノ旅費支給ノ方法ニ關シテハ内國旅費規則ヲ準用ス

第六條 收税官吏ニ非サル官吏在勤廳所在地ニ於テ鑑定ニ從事スル場合ニ於テハ日當金一圓ヲ支給ス

前項ノ日當ヲ支給スヘキ場合ニ於テハ内國旅費規則第九條ノ日當ヲ支給セス

第七條 織物消費税法第九條第五項ニ依リ異議申立人ノ負擔スヘキ費用ハ鑑定人ノ日當、旅費及鑑定ニ要シタル實費トス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十六年六月大藏省令第十六號ハ之ヲ廢止ス(節錄)

別表

旅費額

鐵道賃(一哩ニ付)	船賃(一海里ニ付)	車馬賃(一里ニ付)	宿泊料(一夜ニ付)	日當(一日ニ付)
三錢	四錢	二十五錢	一圓五十錢	一圓

○第三款ノ一　相續税

●法律第十號　三十八年一月一日

相續税法

第一條　相續開始シタルトキハ開始地カ帝國内ニ在ルト否トヲ問ハス又被相續人若ハ相續人カ帝國臣民タルト否トヲ問ハス本法施行地ニ在ル相續財産ニハ本法ニ依リ相續税ヲ課ス

第二條　被相續人カ本法施行地ニ住所ヲ有スルトキハ左ニ掲ケル財産ヲ以テ本法施行地ニ在ル相續財産トス

一　本法施行地ニ在ル動産不動産

二　本法施行地ニ在ル不動産ノ上ニ存スル權利

三　前二號ニ掲ケタルモノ以外ノ財産權

被相續人カ本法施行地ニ住所ヲ有セサルトキハ前項第一號及第二號ノ財産ヲ以テ本法施行地ニ在ル相續財産トス

船舶ノ所在ハ船籍ノ所在ニ依ル

相續開始前一年内ニ本法施行地内ヨリ本法施行地外ニ轉シタルモノ

ノ住所又ハ船籍ハ本法施行地内ニ在ルモノト看做ス

第三條 被相續人カ本法施行地ニ住所ヲ有スルトキハ相續開始ノ際本法施行地ニ在ル相續財産ノ價額ニ相續開始前一年内ニ被相續人カ本法施行地ニ在ル財産ニ付爲シタル贈與ノ價額ヲ加ヘ其ノ中ヨリ左ノ金額ヲ控除シタルモノヲ以テ課稅價額トス

一 公課

二 被相續人ノ葬式費用

三 債務

被相續人カ本法施行地ニ住所ヲ有セサルトキハ相續開始ノ際本法施行地ニ在ル相續財産ノ價額ニ相續開始前一年内ニ被相續人カ本法施行地ニ在ル財産ニ付爲シタル贈與ノ價額ヲ加ヘタルモノヨリ左ノ金額ヲ控除シタルモノヲ以テ課稅價格トス

一 其ノ財産ニ係ル公課

二 其ノ財産ヲ目的トスル留置權、特別ノ先取特權、質權又ハ抵當權ヲ以テ擔保セラルル債務

三 其ノ財産ニ關スル贈與ノ義務

永代借地權ハ相續稅ノ課稅價格ニ算入セス

公共團體又ハ慈善事業ニ對シ爲シタル贈與及遺贈ハ課稅價格ニ算入セス

第四條 相續財産ノ價格ハ相續開始ノ時ノ價格ニ依ル

船舶、地上權、永小作權及定期金ニ付テハ政府ハ左ノ方法ニ依リ其ノ價格ヲ評定ス

一 船舶ニ付テハ其ノ製造費中ヨリ製造後ノ年數ニ應シ一年ニ付其ノ二十五分ノ一宛ヲ控除シタルモノヲ以テ其ノ價格トス但シ製造後二十年ヲ經過シタルモノハ製造費ノ五分ノ一ヲ以テ其ノ價額トス

一年ニ滿タサル端數ハ之ヲ一年トシテ計算ス

二 地上權ニ付テハ左ノ金額ヲ以テ其ノ價額トス

殘存期間十年以下ナルモノ　地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格　二倍

殘存期間三十年以下ナルモノ　地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格　三倍

殘存期間五十年以下ナルモノ又ハ存續期間ノ定ナキモノ　地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格　五倍

殘存期間百年以下ナルモノ　地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格　七倍

殘存期間百年ヨリ長キモノ　地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格　十二倍

三　永小作權ニ付テハ左ノ金額ヲ以テ其ノ價額トス

殘存期間十年以下ナルモノ　永小作權ノ目的タル土地ノ賃貸價格　二倍

殘存期間三十年以下ナルモノ又ハ存續期間ノ定メナキモノ　永小作權ノ目的タル土地ノ賃貸價格　三倍

殘存期間五十年以

下ナルモノ　永小作權ノ目的タル土地ノ賃貸價格　五倍

四　有期定期金ハ其ノ殘存期間ニ於ケル總金額ヲ以テ其ノ價額トス

但シ一年ノ定期金ノ二十倍ヲ超ユルコトヲ得ス

五　無期定期金ハ其ノ一年ノ定期金ノ二十倍ヲ以テ其ノ價格トス

六　終身定期金ハ目的トセラレタル人ノ年齡ニ依リ左ノ期間ニ於ケル定期金ノ總額ヲ以テ其ノ價額トス

二十歲未滿ノ者　十年

三十歲未滿ノ者　八年

四十歲未滿ノ者　六年

五十歲未滿ノ者　四年

六十歲未滿ノ者　二年

六十歲以上ノ者　一年

前項ニ於テ土地ノ賃貸價格ト稱スルハ貸主カ公課、修繕費、保險料其ノ他土地ノ維持ニ必要ナル經費ヲ負擔スル條件ヲ以テ之ヲ賃貸スル場合ニ於テ貸主ノ取得スヘキ金額ヲ謂フ

第五條　條件附權利、存續期間ノ不確定ナル權利又ハ訴訟中ノ權利ニ

付テハ政府ノ認ムル所ニ依リ其ノ價格ヲ評定ス
第三條ニ依リ控除スヘキ債務金額ハ政府カ確實ト認メタルモノニ限ル
第六條　課税價格カ家督相續ニ在リテハ千圓、遺產相續ニ在リテハ五百圓ニ滿タサルトキハ相續税ヲ課セス
第七條　軍人、軍屬ノ戰死又ハ戰爭ノ爲受ケタル傷痍疾病ニ起因シタル死亡ニ因リ相續開始シタルトキハ相續税ヲ課セス但シ傷痍者又ハ疾病者ニシテ負傷又ハ發病後一年ヲ經過シ死亡シタルトキハ此ノ限ニ在ラス
第八條　相續税ハ課税價格ヲ左ノ各級ニ區分シ其ノ各區分ニ對シ相續人ノ種類ニ從ヒ遞次ニ各税率ヲ適用シテ之ヲ課ス

課税價格	税率		
家督相續	相續人カ被相續人ノ家族タルト直系卑屬ナルトキ	相續人カ被相續人ノ指定シタル者、民法第九百八十二條ニ依リ選定セラレタル者被相續人ノ家族タル直系尊屬又ハ入夫ナルトキ	相續人カ民法第九百八十五條ニ依リ選定セラレタル者ナルトキ
遺產相續	相續人カ直系卑屬ナルトキ	相續人カ配偶者又ハ直系尊屬ナルトキ	相續人カ其他ノ者ナルトキ
五千圓以下ノ金額	千分ノ十	千分ノ十二	千分ノ十五
五千圓ヲ超ユル金額	千分ノ十二	千分ノ十四	千分ノ二十
一萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ十四	千分ノ十七	千分ノ二十五
二萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ十七	千分ノ二十	千分ノ三十
三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十	千分ノ二十五	千分ノ三十五
四萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十五	千分ノ三十	千分ノ四十
五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十	千分ノ三十五	千分ノ四十五
七萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十五	千分ノ四十	千分ノ五十
十萬圓ヲ超ユル金額ハ其ノ五萬圓毎ニ（百萬圓ニ至テ止ム）	千分ノ五ヲ加フ	千分ノ五ヲ加フ	千分ノ五ヲ加フ

三四

千圓以下ノ金額	千分ノ十五	千分ノ十七	千分ノ二十五
千圓ヲ超ユル金額	千分ノ十七	千分ノ二十	千分ノ三十
五千圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十	千分ノ二十五	千分ノ三十五
一萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十五	千分ノ三十	千分ノ四十
二萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十	千分ノ三十五	千分ノ四十五
三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十五	千分ノ四十	千分ノ五十
四萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ四十	千分ノ四十五	千分ノ五十五
五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ四十五	千分ノ五十	千分ノ六十
七萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ五十	千分ノ五十五	千分ノ六十五
十萬圓ヲ超ユル金額ハ其ノ五萬圓毎ニ（百萬圓ニ至テ止ム）	千分ノ五ヲ加フ	千分ノ五ヲ加フ	千分ノ五ヲ加フ

外國ノ法律ニ依リ開始シタル相續ニ關シテハ遺産相續ニ關スル稅率ヲ準用ス但シ相續人二人以上アル場合ニ於テ其ノ適用スヘキ稅率相異ルトキハ其ノ最低キ稅率ヲ適用ス（四十三年三月法律第四號ヲ以テ本條改正）

四十三年三月法律第四號ニテ改正

第九條　相續人ノ廢除若ハ其ノ取消ニ關スル裁判ノ確定前又ハ相續ノ承認若ハ拋棄前ト雖政府ハ必要ニ依リ其ノ推定家督相續人又ハ推定遺産相續人ニ對スル稅率ヲ適用シ相續稅ヲ課スルコトヲ得

相續人アルコト分明ナラサルトキハ稅率ノ最高キ相續人ニ對スル稅率ヲ適用シテ相續稅ヲ課ス

前二項ニ依リ課稅シタル後相續人確定シタルトキハ稅率ノ適用ヲ改訂シ稅金ノ差額ヲ追徵シ又ハ還付ス

第十條　相續稅ヲ課セラレタル後五年以内ニ於テ更ニ相續開始シタルトキハ前ノ相續額ニ對スル相續稅ニ相當スル相續稅ヲ免除ス

相續稅ヲ課セラレタル後七年以内ニ於テ更ニ相續ヲ開始シタルトキハ前ノ相續額ニ對スル相續稅ノ半額ニ相當スル相續稅ヲ免除ス

第十一條　相續人ハ相續開始ヲ知リタル日ヨリ遺言執行者又ハ相續財産管理人ハ就職ノ日ヨリ三箇月以内ニ相續財産ノ目錄及相續財産ノ價格中ヨリ控除セラルヘキ金額ノ明細書ヲ政府ニ提出スヘシ

相續カ帝國外ニ於テ開始シタルトキ又ハ前項ノ書類ヲ提出スヘキ者カ帝國内ニ住所ヲ有セサルトキハ前項ノ期間ハ六箇月トス

相續人確定シタルトキハ前二項ノ書類ヲ提出スルト同時ニ又ハ其ノ確定ノ日ヨリ一箇月以内ニ相續人ノ相續關係ヲ記載シタル書面ヲ政府ニ提出スヘシ

第十二條　戸籍吏左ノ事項ニ關スル届書ヲ受理シタルトキハ之ヲ收税官廳ニ報告スヘシ

一　死亡又ハ失踪
二　戸主ノ隱居又ハ國籍喪失
三　戸主カ婚姻又ハ養子縁組ノ取消ニ因リテ其ノ家ヲ去リタルコト
四　入夫婚姻ニ因リ女戸主カ戸主權ヲ喪失シタルコト
五　戸主タル入夫ノ離婚

第十三條　課税價格ハ政府之ヲ決定ス

課税價格ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人ニ通知スヘシ

第十四條　相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人前條ノ決定ニ對シ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ申立テ再審査ヲ求ムルコトヲ得

相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人帝國内ニ住所ヲ有セサルトキハ前項ノ期間ハ之ヲ三箇月トス

第十五條　前條ノ請求アリタルトキハ相續税審査委員會ノ諮問ヲ經テ政府之ヲ決定ス

審査委員會ノ組織及會議ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條　課税價格ノ決定ニ對シ不服アル者ハ訴願又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第十七條　相續税ハ一時ニ之ヲ納付スヘシ但シ税金額百圓以上ナルトキハ相續税ニ相當スル擔保ヲ提供シ五年以内ノ年賦延納ヲ求ムルコトヲ得（四十三年三月法律第四號ニテ改正）

前項ニ依リテ年賦延納ヲ求メムトスル者ハ第十三條ノ通知ヲ受ケタル後二十日以内ニ政府ニ出願スヘシ

相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人帝國内ニ住所ヲ有セサルトキハ前項ノ期間ハ三箇月トス

第十八條　審査ヲ求メ訴願又ハ行政訴訟ヲナシタル場合ト雖相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人ハ通知ヲ受ケタル金額ニ依リ税金ヲ

納付スヘシ

第十九條　相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人ハ相續税ヲ納付シ又ハ其ノ延納ノ許可ヲ受ケタル後ニ非サレハ遺贈ノ辨濟ヲ爲スコトヲ得ス

第二十條　相續財産ヲ以テ相續税ヲ完納スルコト能ハサルトキハ相續開始前一年内ニ被相續人ヨリ本法施行地ニ在ル財産ノ贈與ヲ受ケタル者ハ其ノ限度ニ於テ不足額ヲ納付スヘシ但シ相續税ノ延納ヲ許可シタル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

第二十一條　相續税ノ審査ニ參與シタル者ハ其ノ審査ニ關スル事項ヲ他ニ漏洩スルコトヲ得ス

第二十二條　相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人期限内ニ第十一條ニ依ル書類ヲ提出セサルトキハ政府ハ期間ヲ定メテ催告ヲ爲スコトヲ得

相續人二人以上ナル場合ニ於テハ政府ハ其ノ一人ニ對シテ前項ノ催告ヲ爲スコトヲ得

前二項ノ場合ニ於テ相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人其ノ期

間内ニ書類ヲ提出セサルトキハ政府ノ認ムル所ニ依リ課税價格ヲ決定シ催告ニ關スル費用及税金ノ十分ノ一ニ相當スル金額ヲ相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人ヨリ徵收スルコトヲ得

相續人二人以上ナル場合ニ於テハ各相續人ハ前項ノ徵收金ニ付連帶納付ノ責ニ任ス

第三項ノ金額ノ徵收ニ關シテハ國税徵收法ノ規定ヲ準用ス

第二十三條　左ニ揭クル場合ニ於テ本法施行地ニ在ル不動産又船舶以外ノ財産ニ付爲シタル贈與ノ價額カ五百圓以上ナルトキハ遺産相續開始シタルモノト看做シ其ノ財産ノ價額ヲ課税價格トシテ本法ニ依リ相續税ヲ課ス

一　被相續人カ推定家督相續人又ハ推定遺産相續人ニ贈與ヲ爲シタルトキ

二　分家ヲ爲スニ際シ若ハ分家ヲ爲シタル後本家ノ戶主又ハ家族カ分家ノ戶主又ハ家族ニ贈與ヲ爲シタルトキ

前項ノ遺産相續ニ關シテハ第十條ノ規定ヲ適用セス

第二十四條　第十一條ニ依リ提出シタル書類ニ虛僞ノ記載ヲ爲シタル

者其ノ他不正ノ所爲ヲ以テ相續稅ノ逋脱ヲ圖リ又ハ逋脱シタル者ハ其ノ逋脱シ又ハ逋脱セムトシタル稅金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處ス

但自首シタル者ハ其ノ稅金ヲ徵收シ其ノ罪ヲ問ハス（四十三年三月法律第四號ニテ改正）

第二十五條　第二十一條ニ違反シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス（仝上）

前項ニ依リ處罰セラレタル者ハ其ノ職ヲ失フ

第二十六條　府縣郡市町村其ノ他公共團體ハ相續稅ノ附加稅ヲ課スルコトヲ得ス

附　則

本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附　則（四十三年三月法律第四號改正ノ分）

本法ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ本法施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍舊法ヲ適用ス

◎三十八年一月二十三日官報彙報官廳事項欄登載

相續稅法施行ニ付大藏大臣ノ訓示

第一　稅務署ニ於テハ常ニ各人ノ資產ノ增減ニ注意シ出來得ヘクンハ其ノ價額ヲ推算シ置キ相續稅賦課上ノ參考ト爲スヘシ

第二　相續開始シタル場合ニ於テ財產目錄ヲ添付シ其ノ旨屆出ヲ爲シタルトキハ甚シキ不正アリト認メラルル場合ノ外ハ成ルヘク屆出ノ價額ニ依リ課稅價額ヲ決定スルコトニ注意スヘシ

第三　課稅價額ノ決定ヲ爲スニ當リテハ大體ニ於テ其ノ實額ヲ得ムコトヲ期シ徒ラニ些細ノ點ニ關スル計算ニ重ヲ置クカ如キコトナキヲ要ス

第四　相續稅法第二條ニ揭クル相續財產ハ總テ課稅價格ニ算入スヘキモノナリト雖動產中家實ハ什器、書籍、家具其ノ他日用器等ノ如キ營利ノ目的ヲ以テ所有スルモノニ非ラスシテ直接所得ヲ生セサルモノハ相續財產目錄中ニ揭記シアラサルモ强テ之ヲ揭記セシメテ課稅價格ニ算入スルニ及ハサルモノトス

第五　相續稅ヲ課スヘキ財產ハ相續ニ因リ相續人ニ移轉スヘキ財產ニ

限ルヲ以テ保險契約ニ基キ支拂ヲ受クル保險金ノ如キハ相續稅ヲ課スヘキモノニ非ス

第六　相續稅法第三條ニ依リ相續開始前一年內ニ爲シタル贈與ノ價額ヲ相續財產中ニ加算スルハ相續稅ノ逋脫ヲ防クノ趣旨ニ出テタルモノナルヲ以テ財產ノ一部ヲ分與シタリト認ムヘキ贈與ヲ爲シタル場合ニ限リ加算ヲ爲スヘキモノニシテ些細ナル贈與ノ如キハ之ヲ加算スルニ及ハサルモノトス

第七　相續財產中ヨリ控除スヘキ債務ハ政府カ確實ト認メタルモノニ限ルト雖政府ニ於テ認定スルニハ必スシモ書面ノ證據アルコトヲ必要トセサルヲ以テ苟モ成立確實ト認メラルルモノハ書面ノ有無ニ拘ラス之ヲ控除シテ妨ナキモノトス

第八　相續稅法第九條ニ於テ相續人ノ廢除若ハ其ノ取消ニ關スル裁判ノ確定前又ハ相續ノ承認若ハ拋棄前ニ於テ相續稅ヲ課スルコトヲ得ルノ規定ヲ設ケタルハ相續財產ノ散逸又ハ脫漏ヲ慮ルノ趣旨ニ出テタルモノナルヲ以テ其ノ虞ナキ場合ニ於テハ相續人ノ確定ヲ待テ課稅シ妨ナキモノトス

第九　課稅ヲ遲延スルハ納稅義務者ヲシテ不安ナラシムルモノナルカ故ニ課稅價格ヲ決定シ之ヲ通知スルハ特種ノ故障ナキ限ハ相續稅法第十一條ノ書類ヲ受理シタル後一箇月以內ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第十　相續稅ハ特種ノ事情ナキ限リハ納稅告知ノ日ヨリ三十日ヲ以テ其ノ納期限ト爲シ各局ナルヘク其ノ取扱ヲ一致セシムルヲ要ス

第十一　相續稅ノ年賦延納ハ租稅ノ爲ニ財產ノ元本ヲ侵蝕スルノ弊ナカラシムルト同時ニ納稅者ノ苦痛ヲ少カラシメムトスルノ趣旨ニ出テタルモノナルヲ以テ擔保ノ確實ナル限リハ年賦延納ノ出願ニ對シテハ之ヲ許可スルヲ要ス

第十二　相續稅法第二十二條ニ於テ催告ニ關スル費用及稅金ノ十分ノ一ニ相當スル金額ヲ徵收スルコトヲ得ルノ規定ヲ設ケタルハ書類提出ノ遲延ヲ防クノ趣旨ニ出テタルモノナルヲ以テ其ノ故意怠慢ニ因ルモノノ外ハ之ヲ適用スルニ及ハサルモノトス

第十三　相續稅法第二十三條第一項ニ依リ遺產相續開始シタルモノト看做シ相續稅ヲ課シタル後贈與者ニ付相續開始シタル場合ニ於テハ假令其ノ贈與カ相續開始前一年以內ニ在ルモ第三條ニ依リ相續財產

ニ加算スルノ限ニ在ラス

第十四　相續税法第二十三條第一項ニ依リ相續人ト看做サレタル者ニ付相續開始シタル場合ニ於テハ同條第二項ニ依ラス前ノ相續税又ハ其ノ半額ニ相當スル金額ヲ免除スヘキモノトス

第十五　相續財産カ税務署所轄ヲ異ニスル地ニ在ル場合ニ於テハ相續税所轄税務署ハ相續財産所在地ノ税務署ニ其ノ財産ノ調査ヲ囑托スル等便宜取扱ノ簡便ヲ期スヘシ

●勅令第六十八號　三十八年三月二十二日

相續税法施行規則

第一條　相續開始地ノ税務署ヲ以テ相續税ノ所轄税務署トス

相續開始地カ相續税法施行地ニ在ラサルトキハ同法施行地ニ在ル相續財産所在地ノ税務署ヲ以テ所轄税務署トス相續財産カ二箇以上ノ税務署管内ニ在ルトキハ其ノ主タル財産ノ所在地ノ税務署ヲ以テ所轄税務署トス

第二條　相續開始シタルトキハ相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人ハ相續税法第十一條第一項ニ定メタル期間内ニ左ニ掲クル事項ヲ記載シタル書面ニ相續財産目錄及相續財産ノ價格中ヨリ控除セラルヘキ金額ノ明細書ヲ添附シ之ヲ所轄税務署ニ提出スヘシ但シ相續人二人以上ナル場合ニ於テ其ノ一人ヨリ本條ニ依ル書類ヲ提出シタルトキハ他ノ相續人ハ之ヲ提出スルコトヲ要セス

一　被相續人ノ氏名
二　相續開始地
三　相續開始ノ日

四　家督相續、遺產相續ノ區別

五　被相續人カ相續開始前一年內ニ相續稅法施行地ニ在ル財產ニ付贈與ヲ爲シタルトキハ其ノ財產ノ價額及受贈者ノ住所氏名

六　相續人ノ住所氏名

七　相續人ト被相續人トノ續柄

前項ノ書類ヲ提出スル場合ニ於テ相續人確定セサルトキハ前項第六號及第七號ノ代リニ相續人ノ確定セサル理由ヲ記載スヘシ

前項ノ場合ニ於テ相續人確定シタルトキハ相續人、遺言執行者又ハ相續財產管理人ハ第一項第六號及第七號ニ揭クル事項ヲ記載シタル書面ヲ所轄稅務署ニ提出スヘシ

相續稅法第二十三條ニ依リ遺產相續ノ開始ト看做サルヘキ場合ニ於テハ第一項第一號乃至第三號第六號及第七號ノ事項ヲ記載シタル書面ヲ提出スルヲ以テ足ル

第三條　稅務署長ハ相續財產ノ價額ヲ評定シテ課稅價格ヲ決定シ之ヲ相續人、遺言執行者又ハ相續財產管理人ニ通知スヘシ

相續人、遺言執行者又ハ相續財產管理人ハ前項ノ決定ニ對シ其ノ說明ヲ求ムルコトヲ得

第四條　課稅價格ノ決定ニ對シ異議アル者再審查ヲ求メムトスルトキハ其ノ理由ヲ詳記シ相續稅法第十四條ニ定メタル期間內ニ所轄稅務署長ニ申出ツヘシ

第五條　稅務署長再審查ノ請求ヲ受ケタルトキハ相續稅審查委員會ノ諮問ヲ經テ課稅價格ヲ決定シ之ヲ異議申立人ニ通知スヘシ

第三條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第六條　各稅務署所轄內ニ相續稅審查委員會ヲ置ク但シ稅務署所轄內ニ在ル市又ハ北海道沖繩縣ノ區ニ付テハ大藏大臣ハ特ニ審查委員會ヲ置クコトヲ得

第七條　審查委員會ハ大藏大臣ノ命シタル收稅官吏二名及直接國稅百圓以上ヲ納ムル者三名ヲ以テ之ヲ組織ス

審查委員ノ任期ハ三年トス

第八條　審查委員會ハ稅務署長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク

第九條　審查委員會ハ每年最初ノ開會ノ時ニ於テ審查委員中ヨリ會長ヲ選擧スヘシ

第十條　審査委員會ノ會長出席セサルトキハ出席シタル審査委員中ノ年長者之ヲ代理スヘシ

第十一條　審査委員會ハ定員ノ過半數ニ當ル委員出席スルニ非サレハ決議スルコトヲ得ス

議事ハ出席員ノ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

第十二條　審査委員ハ自己又ハ自己ノ親族ノ相續ニ關スル審査ノ議事ニ與ルコトヲ得ス

第十三條　税務署長又ハ其ノ代理官ハ審査委員會ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第十四條　相續人二人以上ナル場合ニ於テ相續税納付前相續財産ノ分割ヲ爲スモ相續税ハ各相續人連帶シテ之ヲ納付スルコトヲ要ス

第十五條　相續税ノ年賦延納ヲ求メムトスル者ハ擔保ノ種類及延納期間ヲ記シ相續税法第十七條ノ期間内ニ所轄税務署ニ出願スヘシ

第十六條　擔保ノ種類ハ左ニ揭クルモノニ限ル

一　税務署長ニ於テ確實ト認ムル有價證券

二　土地

三　建物

四　税務署長ニ於テ納税保證ニ堪フル資力アリト認ムル保證人

第十七條　擔保トシテ有價證券ヲ提供セムトスル者ハ之ヲ供託シ其ノ供託受領證ヲ提供スヘシ

擔保トシテ土地建物ヲ提供シタル者アルトキハ税務署長ハ抵當權ノ登記ヲ登記所ニ囑託スヘシ

第十八條　税務署長ニ於テ擔保物ノ價格減少シタリト認ムルトキ又ハ保證人ノ資力納税保證ニ堪ヘサルニ至リタリト認ムルトキハ增擔保ヲ提供セシメ又ハ保證人ヲ變換セシムルコトヲ得

第十九條　年賦延納金額ハ相續税金額ヲ延納年間ニ平分シテ之ヲ定ム

第二十條　增擔保ヲ提供スヘキ場合ニ於テ之ヲ提供セス又ハ保證人ヲ變換スヘキ場合ニ於テ之ヲ變換セサルトキハ税務署長ハ年賦延納ノ許可ヲ取消シ税金ヲ一時ニ徵收スヘシ年賦延納金滯納ノ場合ニ於テモ亦同シ

第二十一條　年賦延納ノ許可ヲ受ケタル者相續税ヲ滯納シタルトキハ

擔保物アルトキハ擔保物ヲ以テ其ノ税金ニ充テ保證人アルトキハ保證人ニ通知シテ其ノ税金ヲ納メシム

擔保物ヲ以テ税金ニ充ツヘキ場合ニ於テハ之ヲ公賣ニ付シ相續税及公賣ノ費用ニ充テ不足アルトキハ之ヲ追徵シ殘餘アルトキハ之ヲ還付ス

保證人ニ於テ税金ヲ完納セサルトキハ納税者ニ對シ滯納處分ヲ行ヒ仍税金ニ不足アルトキハ保證人ニ對シ滯納處分ヲ行フ

第二十二條　年賦延納ノ許可ヲ受ケタル者相續税ヲ完納シタルトキハ税務署長ハ擔保解除ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十三條　相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人相續税法第十一條ニ依ル書類ヲ期限迄ニ提出セサルトキハ所轄税務署長ハ期間ヲ定メテ之ヲ催告スヘシ

前項ノ期間内ニ書類ヲ提出セサルトキハ所轄税務署長ハ其ノ認ムル所ニ依リ課税價格ヲ決定スヘシ

附　則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●大藏省令第二十五號（抄錄）大正二年七月五日

租税ニ關スル委員及織物鑑定人手當旅費支給方並織物消費税法第九條第五項ニ依リ異議申立人ノ負擔スヘキ費用左ノ通相定ム

第一條　（所得調査委員ノ手當ニ付省畧ス）

第二條　（同上）

第三條　所得調査委員營業税審査委員相續税審査委員及織物消費税法第九條第四項ノ鑑定人審査又ハ鑑定ニ從事シタルトキハ日當金三圓ヲ支給ス但シ官吏ニシテ委員又ハ鑑定人タル者ハ此ノ限ニ在ラス

第四條　第一條及第三條ノ委員又ハ鑑定人ニシテ官吏ニ非サル者ニハ別表定ムル所ニ依リ往復旅費ヲ支給ス但シ租税ニ關スル調査、審査又ハ鑑定ニ從事シタル日ノ旅行ニ付テハ鉄道賃（汽）船賃、車馬賃ノミヲ支給ス [illegible]

第五條　前條ノ旅費支給ノ方法ニ關シテハ内國旅費規則ヲ準用ス

第六條　收税官吏ニ非サル官吏在勤官所在地ニ於テ鑑定ニ從事スル場合ニ於テハ日當金一圓ヲ支給ス [illegible]

前項ノ日當ヲ支給スヘキ場合ニ於テハ内國旅費規則第九條ノ日當ヲ

支給セス

第七條　織物消費税法第九條第五項ニ依リ異議申立人ノ負擔スヘキ費用ハ鑑定人ノ日當、旅費及鑑定ニ要シタル實費トス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十八年三月大藏省令第二十號ハ之ヲ廢止ス（節錄）

別表　旅費額

鐵道賃 一哩ニ付	三錢
船賃 一海里ニ付	四錢
車馬賃 一里ニ付	二十五錢
宿泊料 一夜ニ付	一圓五十錢
日當 一日ニ付	一圓

○第三欵ノ二　通行税

●法律第五號　四十三年三月二十四日

通行税法

第一條　滊車、電車及滊船ノ乘客ニハ左ノ區別ニ依リ通行税ヲ課ス

二百哩又ハ二百海里以上

一等　金五十錢

二等　金二十五錢

三等　金四錢

二百哩又ハ二百海里未滿

一等　金四十錢

二等　金二十錢

三等　金三錢

百哩又ハ百海里未滿

一等　金二十錢

二等　金十錢

三等　　金二錢

五十哩又ハ五十海里未滿

一等　　金五錢

二等　　金三錢

三等　　金一錢

往復乘船者ノ契約ヲ爲シタル場合ニ於テハ通行稅ハ往復ノ里程ヲ通算シテ之ヲ徵收ス

貸切、多人數、回數又ハ定期乘船車ノ契約ヲ爲シタル場合ニ於テハ通行稅ハ第一項稅額ノ五倍ヲ徵收ス

第二條　通行稅ヲ課スヘキ場合ニ於テ滊車、電車又ハ滊船ニシテ等級ヲ分タサルモノニ在リテハ三等ノ稅率ヲ適用シ二等級ニ分チタルモノニ在リテハ二等三等ノ稅率ヲ適用シ一等級ノ上又ハ三等級ノ下ニ更ニ等級ヲ設ケタルモノニ在リテハ一等又ハ三等ノ稅率ヲ適用ス

第三條　左ノ場合ニ於テハ通行稅ヲ課セス

一　外國行ノ滊船ニ乘シ外國ニ赴クトキ

二　鐵道軍事供用令ニ依リ乘車スルトキ

第四條　通行稅ハ滊車、電車又ハ滊船營業者乘船車賃金ヲ領收スルトキ之ヲ徵收スヘシ

前項ニ依リ徵收シタル通行稅ハ毎月取纏メ翌月十日迄ニ之ヲ政府ニ納付スヘシ

第五條　滊車、電車又ハ滊船營業者前條ニ依リ徵收スヘキ通行稅ヲ納付セサルトキハ國稅徵收法ニ依リ該營業者ヨリ之ヲ徵收ス

第六條　收稅官吏ハ滊車、電車又ハ滊船營業者ノ帳簿書類ヲ檢査スルコトヲ得

第七條　回數乘船車券ハ之ヲ分割販賣スルコトヲ得ス違反スル者ハ三拾圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

附　則

本法ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

非常特別稅法中通行稅ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

●勅令第二十九號　　四十三年三月二十五日

通行稅法施行規則

滊車、電車又ハ滊船營業者ハ拂込書及計算書ヲ添付シ每月十日迄ニ前月分ノ通行稅ヲ各營業場所在地ノ金庫ニ拂込ムヘシ但シ營業者カ本店所在地所轄稅務署ノ許可ヲ得タルトキハ之ヲ本店所在地ノ金庫ニ拂込ムコトヲ得

附　則

本令ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●大藏省令第十三號　四十三年三月三十一日

通行稅法施行規則ニ依ル通行稅拂込方左ノ通相定ム

一　通行稅法施行規則ニ依リ滊車、電車又ハ滊船營業者通行稅ノ拂込ヲ爲サムトスルトキハ其ノ拂込書ハ第一號書式ニ計算書ハ第二號書式ニ準シ調製シ計算書ハ拂込書ニ添付スヘシ

二　金庫ニ於テ前項ノ拂込ヲ受ケタルトキハ第三號書式ノ領收證ヲ拂込人ニ交付シ同號書式ノ通知書ニ計算書ヲ添付シ之ヲ歲入徵收官ニ送付スヘシ

第一號書式

通行稅拂込書

一金何程　　明治何年何月分

右拂込候也

明治何年何月何日

何々株式會社、合資會社、合名會社

取締役又ハ代表者　何　某　印

又ハ

何々營業者　何　某　印

何金庫宛

第二號書式

書

備考

(一)乘越乘換等ニ因リ徵收シタル通行稅額及人員ハ追徵ノ區ニ揭記シ哩(又ハ海里)及等級ノ區別ヲ要セス

(二)貸切・定期・回數・多人數乘船車ノ分人員欄ニハ契約ノ件數ヲ記載スルモノトス

資會社

何某印

何某印

第三號書式
用紙適宜輪廓縦三寸五分横三寸
二枚接續

通　知　書

番　號	何年度	大藏省所管
何税務署	租　税	通行税

何々株式會社合資會社合名會社
　取締役又ハ代表者　何　某納
　又ハ
何々營業者何　某納

Y　金庫主任取扱ノ印

明治何年何月何日領收
　　　　何　金　庫　印
何税務署長官氏名殿

明治何年何月分
通行税徴收高計算

摘　要	人員	税額
二百哩又ハ二百海里以上		
一等		
同貸切・定期・回數・多人數乗船車ノ分		
二等		
同貸切・定期・回數・多人數乗船車ノ分		
三等		
同貸切・定期・回數・多人數乗船車ノ分		
二百哩(又二百海里)未滿(記載方前例ニ同シ)		
百哩(又ハ百海里)未滿(記載方前例ニ同シ)		
五十哩(又ハ五十海里)未滿(記載方前例ニ同シ)		
追徴		

何々株式會社。合名會社又ハ合六
取締役又ハ代表者
又ハ
何々營業者
明治何年何月何日

領收證書

番號	何年度	通行稅

何々株式會社合資會社合名會社

取締役又ハ代表者　何　某納

又ハ

何々營業者　何　某納

金庫取扱主任ノ印

Y　　　　圓

明治何年何月何日領收

何金庫　印

金庫割印

備考

一　金額及番號ハ総テ亞剌比亞數字ニテ正確ニ記入スヘシ

二　領收證書ニ限リ必要アルトキハ邦文ニテ金額ヲ記入スルコトヲ得

第四款　酒税

●法律第二十八號　二十九年三月二十七日

（沿革）（△三十一年十二月二十七日法律第二十三號
三十四年三月三十日法律第七號
○三十八年一月一日法律第三號）ヲ以テ改正追加

酒造税法

○第一條ノ一　此ノ税法ニ於テ酒類ト稱スルハ清酒、濁酒、白酒、味淋燒酎ノ五種トス

○第一條ノ二　此ノ税法ニ於テ清酒ト稱スルハ米、米麹及水ヲ原料トシ醱酵セシメ又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメ之ヲ濾過シタルモノヲ謂フ

左ニ揭クルモノハ清酒ト看做ス

一　前項原料ノ外麥、粟、玉蜀黍、稗、清酒粕又ハ燒酎ヲ原料トシ醱酵セシメ又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメ之ヲ濾過シタルモノ

二　清酒又ハ清酒ト看做シタルモノヲ粕漉シタルモノ

三　清酒又ハ前二號ニ依リ清酒ト看做シタルモノニ其ノ容量百分ノ

一以内ノ焼酎又ハ酒精ヲ混和シタルモノ

○第一條ノ三　此ノ税法ニ於テ濁酒ト稱スルハ米、米麴及水ヲ原料トシテ醱酵セシメ又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメ之ヲ濾過セサルモノヲ謂フ

前項原料ノ外麥、粟、玉蜀黍若ハ稗ヲ原料トシ醱酵セシメ又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメ之ヲ濾過セサルモノハ濁酒ト看做ス

○第一條ノ四　此ノ税法ニ於テ白酒ト稱スルハ米又ハ米麴ト清酒、濁酒、味淋、焼酎又ハ酒精トヲ混和シテ碾碎シタルモノヲ謂フ

前項原料ノ外水ヲ混和シテ碾碎シタルモノハ白酒ト看做ス

○第一條ノ五　此ノ税法ニ於テ味淋ト稱スルハ米又ハ米麴ト清酒、味淋、焼酎又ハ酒精トヲ混和シ濾過シタルモノヲ謂フ

前項原料ノ外味淋粕又ハ水ヲ混和シ濾過シタルモノハ味淋ト看做ス

○第一條ノ六　此ノ税法ニ於テ焼酎ト稱スルハ清酒粕ヲ蒸餾シタルモノヲ謂フ

在ニ掲クル物品ヲ原料トシテ蒸餾シタルモノヲ焼酎ト看做ス

一　清酒

二　濁酒

三　味淋粕

四　米、麥、粟、黍、稗若ハ甘藷ト麴及水トヲ原料トシ醱酵セシメ又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメタルモノ

第二條　酒類ヲ製造セムトスルモノハ製造場一箇所毎ニ政府ノ免許ヲ受クヘシ其ノ製造ヲ廢止セムトスルトキハ免許ノ取消ヲ求ムヘシ

第三條　其ノ年十月一日ヨリ翌年九月三十日迄ヲ以テ一酒造年度トス

○△●第四條　酒類ヲ製造スル者ニハ其ノ造石數ニ應シ左ノ割合ヲ以テ造石税ヲ課ス（四十一年三月法律第十八號改正）

第一種	酒精分二十度以下ノ清酒、濁酒、白酒及酒精分三十度以下ノ味淋、焼酎	一石ニ付　金二十圓
第二種	酒精分三十五度以下ノ焼酎	一石ニ付　金二十五圓
第三種	酒精分四十度以下ノ焼酎	一石ニ付　金三十圓
第四種	酒精分四十五度以下ノ焼酎	一石ニ付　金三十五圓
第五種	酒精分二十度ヲ超ユル清酒、濁酒、白酒、酒精分三十度ヲ超ユル味淋及酒精分四十五度ヲ超ユル焼酎	

一石ニ付（酒精分一度毎ニ金一圓）

前項ニ於テ酒精分ト稱スルハ攝氏驗溫器十五度ノ時ニ於テ原容量百分中ニ含有スル〇、七九四七ノ比重ヲ有スル酒精ノ容量トス

●△第五條　政府ハ一酒造年度間清酒ハ百石濁酒ハ五十石燒酎ハ五石以上ヲ製造スルモノニ非サレハ酒類製造ノ免許ヲ與ヘス但清酒又ハ濁酒制限石數以上ヲ製造スル者ニハ他ノ酒類ニ關スル制限ヲ適用セス

酒類製造ノ免許ヲ受ケタル者本條ノ制限石數以上ノ製造ヲ爲ササリシトキハ變災其ノ他已ムヲ得サル事故ニ因ルコトヲ證明スルニ非サレハ制限石數ニ相當スル造石稅ヲ課ス但シ製造セサリシ石數ニ對シテハ其ノ年五月一日ヨリ九月三十日マテニ査定シタルモノト看做シ第四條第一項ノ稅率ニ依リ其ノ造石稅ヲ徵收ス

△第六條　造石稅ノ納期ヲ分チテ左ノ四期トス

第一期　七月十六日ヨリ同三十一日限

前年十月一日ヨリ其ノ年四月三十日マテ査定石數ニ係ル稅額ノ四分ノ一

第二期　十月十六日ヨリ同三十一日限

同上

第三期　翌年二月十六日ヨリ同二十八日限

同上及其ノ年五月一日ヨリ九月三十日マテ査定石數ニ係ル稅額ニ分ノ一

第四期　翌年三月十六日ヨリ同三十一日限

前納期ノ殘數

●△第七條　第三十三條ニ依リ酒類製造ノ免許ヲ取消シタルトキ又ハ酒類ヲ製造スル者納稅保証物ノ免除ヲ得スシテ保証物ノ提供ヲ爲ササルトキハ前條ノ納期ニ拘ラス造石稅ノ全部又ハ一部ヲ徵收スルコトヲ得

前項ノ塲合及國稅徵收法第四條ノ一ニ依リ造石稅ヲ徵收スル塲合ニ於テハ納稅ノ擔保トシテ酒類ヲ差押フルコトヲ得（四十一年三月法律第十八號ニテ改正）

第八條　酒類ノ造石數ハ製成ノ時之ヲ査定ス

酒類ノ造石數ヲ査定スルハ容器ノ容量ニ依ル但シ清酒ニ限リ命令ノ定ムル所ニ依リ査定石數百分ノ二以內ノ滓引減量ヲ扣除スルヿヲ得

犯則其ノ他ノ事故ニ依リ前各項ニ依リ難キ場合ニ於テハ現在ノ種類又ハ證憑物件ニ就キ之ヲ査定ス

第九條　粕漉シタル酒類ハ粕漉ニ依リ増加シタル分ノミニ就キ其ノ造石數ヲ査定ス

第十條　酒類ヲ製造スル者ノ製造ニ係ル醪ハ左ノ場合ニ於テハ濁酒ヲ製成シタルモノトシテ其ノ造石數ヲ査定ス

一　他人ニ讓渡ストキ

二　公賣セラルルトキ

三　飲料ニ供シ又ハ酒類製造用ノ外ニ供スルトキ

第十一條　酒類ヲ製造スル者既ニ査定ヲ受ケタル酒類ノ造石數ニ對シテハ特ニ法律ヲ以テ定ムル場合ノ外其造石税ヲ免ルルコトヲ得ス

△第十二條　左ノ酒類ハ其造石税ヲ免除スルコトヲ得但製造場外ニ移出シタルモノハ此限ニ在ラス

一　災害ニ罹リ酒類ノ廢棄ニ屬シタルモノ

二　腐敗シタル酒類ニシテ政府ノ承認ヲ得酒類トシテ飲用スヘカラサル處置ヲ施シタルモノ

三　腐敗シタル酒類又ハ災害ニ罹リ飲用スヘカラサルニ至リタル酒類ニシテ燒酎ノ製造ニ供スルモノ

四　容器ノ損傷若ハ栓ノ自然ノ脱去ニ依リ酒類ノ亡失シタルモノ

△第十三條　酒類ヲ製造スル者ハ納税保證トシテ一酒造年度見込造石數一石ニ付金四圓ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ニ相當スル保證物ヲ豫メ提供スヘシ但シ政府ノ許可ヲ受ケ造石數査定ノ都度本條ノ割合ヲ以テ保證物ヲ提供スルコトヲ得

每酒造年度ノ見込造石數又ハ査定石數前項ノ見込造石數ヨリ十石以上増加シタルトキハ其石數ニ應シ前項ノ割合ニ依リ保證物ヲ増補スヘシ

每酒造年度ノ見込造石數又ハ査定石數第一項ノ見込造石數ヨリ十石以上減少シタルトキハ其ノ石數ニ應シ第一項ノ割合ニ依リ保證物ノ減少ヲ請フコトヲ得

酒類ヲ製造スル者此ノ法律ヲ犯シテ處罰セラレタルトキ又ハ造石税ニ關シテ滯納處分ヲ受ケタルトキハ爾後三年間政府ハ造石税全額マテノ保證物提供ヲ命スルコトヲ得

第三項ノ場合及保證物ノ價格ニ異動ヲ生シタル場合ヲ除クノ外保證

▲二十一

物ノ増減ヲ為サス
保證物ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
第十四條　左ノ場合ニ於テハ保證物ヲ免除ス
一　相當ノ納税保證人ヲ供シタルトキ
二　納税保證トシテ造石税額ニ相當スル酒類ヲ保存スルトキ
三　造石税ヲ前納シタルトキ
△四　酒類ヲ製造スル者ノ屬スル酒造組合ニ於テ納税ヲ擔保シタルトキ
△第十五條　酒類ヲ製造スル者造石税ヲ納メサルニ依リ滯納處分ヲ執行スルトキハ先ツ保證物又ハ保存ノ義務ヲ有スル酒類ヲ公賣シテ税金ヲ徴收スヘシ但シ保證物又ハ保存ノ義務ヲ有スル酒類ノ價格徴收スヘキ税金額及滯納處分費ニ對シ不足アリト認ムルトキハ同時ニ他ノ財產ニ對キ滯納處分ノ執行ヲ為スコトヲ妨ケス
△第十六條　酒類ヲ製造スル者造石税ヲ完納スル能ハサルトキハ納税保證人又ハ納税ヲ擔保シタル酒造組合ノ各組合員ハ納税者トシテ其義務ヲ負擔スルモノトス

第十七條　酒類ヲ製造スル者納税保證トシテ保存ノ義務ヲ有スル酒類ハ之ヲ他人ニ讓渡シ、買入シ、消費シ、又ハ製造場外ニ移出スルコトヲ得ス
第十八條　酒類ヲ製造スル者ハ造石數査定前ニ於テ其ノ種類ヲ他人ニ讓渡シ、買入シ、消費シ、又ハ製造場外ニ移出スルコトヲ得ス
●第十九條　收税官吏ハ酒類ヲ製造スル者又ハ之ヲ販賣スル者ノ所持ニ係ル酒類、其ノ製造出入ニ關スル一切ノ帳簿書類及酒類製造又ハ販賣上必要ナル建築物、材料、器械其ノ他ノ物件ヲ檢査シ又ハ監督上必要ノ處分ヲ為スコトヲ得
○第二十條　○　○△第二十一條　削除
●△○第二十二條　免許ヲ受ケスシテ酒類ヲ製造シタル者ハ三十圓以上五千圓以下ノ罰金ニ處シ仍其ノ製造ニ係ル酒類及其ノ容器、器具、器械ヲ沒收ス（本條ハ四十一年三月法律第十八號ニテ改正）
前項ノ酒類ニ付テハ第六條ノ納期ニ拘ラス其ノ造石税ヲ徴收ス
同　第二十三條　削除
同●第二十三條ノ二　削除
△第二十三條ノ三　削除

○第四款　酒税

●第二十四條　酒類ヲ製造スル者詐僞其ノ他不正ノ所爲ヲ以テ造石數ノ査定ヲ免カレ又ハ免レムトシタルトキハ其ノ石數ノ造石税五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ參拾圓ヲ下ルコトヲ得ス

●第二十五條　酒類ヲ製造スル者故意ニ事故ヲ作爲シ又ハ詐術ヲ構ヘ造石税ノ免除ヲ得又ハ得ムトシタルトキハ其ノ石數ノ造石税五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ三十圓ヲ下ルコトヲ得ス

●第二十六條　納税保證トシテ保存ノ義務ヲ有スル酒類ヲ他人ニ譲渡シタル者滯納處分ヲ受クルモ仍税金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ其ノ不足造石税ノ五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ三十圓ヲ下ルコトヲ得ス

△●第二十七條　酒類製造用ト否トヲ問ハス其ノ製造シタル酒母又ハ醪ノ檢査ヲ免カレ又ハ免カレムトシタル者ハ三十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

●第二十八條　酒類ヲ製造スル者第十七條又ハ第十八條ノ禁令ヲ犯シタルトキハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

●第二十九條　酒類ヲ製造スル者又ハ之ヲ販賣スル者酒類ノ製造出入ニ關シ帳簿ノ記載又ハ事實ノ申告ヲ詐リ若ハ怠リタルトキハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條　酒類ヲ製造スル者收税官吏ノ職務執行ヲ拒ミ又ハ之ヲ忌避シ又ハ之ニ支障ヲ加ヘタルトキハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依ル

第三十一條　此ノ税法ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及減輕再犯加重數罪倶發ノ例ヲ用ヰス但シ刑法第七十五條第一項ノ場合ハ此限ニ在ラス

●第三十二條　酒類ヲ製造スル者又ハ之ヲ販賣スル者ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ此ノ税法ヲ犯シタルトキハ其ノ製造者又ハ販賣者ヲ處罰ス

第三十三條　第二十四條乃至第二十八條ニ依リ處罰又ハ處分セラレタル者ニ對シテハ政府ハ酒類製造ノ免許ヲ取消スコトヲ得

前項ニ依リ免許ヲ取消シタル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ一定ノ期間内製成其ノ他必要ノ行爲ヲ繼續セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ本法ノ規定ヲ適用ス（四十一年三月法律第十八號ヲ以テ改正）

第三十四條　酒類ヲ製造シタル者ハ其ノ製造ノ免許ヲ取消サレタル場合ニ於テモ造石税完納前ニアリテハ総テ此ノ税法ノ規程ニ從フモノトス　（同上）

△第三十五條　府縣及市町村ハ此ノ法律ニ依リ造石税ヲ課スル酒類ニ對シ又ハ其ノ酒類ノ造石數若クハ造石税ヲ標準トシテ府縣税若ハ地方税及市町村税其ノ他如何ナル名義ヲ以テスルモ課税スルコトヲ得ス

第三十五條ノ二　此ノ税法ヲ施行セサル地ニ於テ製造シタル酒類ハ此ノ税法ト同一ノ税率ヲ有スル法規ヲ其ノ地ニ於テ施行スル迄ハ此ノ税法施行地ニ移入スルコトヲ得ス犯ス者ハ其ノ酒類ノ石數ニ應シ第四條ノ税率ニ從テ算出シタル税額五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス

前項ノ種類及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ没收ス

（四十一年三月法律第十八號ヲ以テ追加）

附　則

第三十六條　神社ニ於テ古例ニ依リ明治十三年以前ヨリ引續キ酒類ヲ製造スルトキハ一年ノ製造石數一石以下ノ場合ニ限リ総テ無税トス

第三十七條　此ノ税法ハ明治二十九年十月一日ヨリ施行ス但シ明治十三年布告第四十號仝年布告第四十一號仝十六年布告第四十二號及同二十二年法律第二十四號ハ此税法施行ノ日ヨリ廢止ス

明治二十九年九月三十日前檢査濟石數ニ係ル造石税ニ關シテハ仍明治十三年布告第四十號ニ依ル

第三十八條●○△第三十九條●○△第四十條（四十一年三月法律第十八號ヲ以テ削除）

附　則　（三十一年十二月法律第二十三號ヲ以テ追加）

此ノ法律ハ明治三十二年一月一日ヨリ施行シ同日以後製成ニ係ル酒類ニハ其ノ製造着手ノ時期ニ拘ハラス此ノ法律ヲ適用ス

此ノ法律施行前既ニ免許ヲ受ケタルモノニハ三十一年度及三十二年度分ニ限リ第五條第二項ノ規程ヲ適用セス

附　則　（三十四年三月法律第七號ヲ以テ追加）

本法ハ明治三十四年十月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ同日前ニ於テ製成シタル酒類ニハ舊税率ヲ適用ス

附　則　（三十八年一月法律第三號ヲ以テ追加）

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附　則（四十一年三月十六日法律第十八號ヲ以テ追加）

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ第三十八條削除ニ關スル規定ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

非常特別税法中酒造税法ニ依ル酒類及沖繩縣酒類出港税ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

●勅令第二百八十七號　二十九年八月十七日

酒造税法施行規則

（沿革）
△三十一年十二月勅令第三百六十二號
○三十四年八月勅令第百六十四號
ヽ三十五年十一月勅令第二百三十五號
▲三十八年一月勅令第三號
●四十一年三月勅令第三十八號
改正追加

○△第一條　酒類ヲ製造セムトスル者ハ製造場及製造スヘキ酒類ヲ定メ其

住所、氏名又ハ名稱ヲ記シタル免許申請書ヲ製造場所轄税務署ニ提出スヘシ

△第一條ノ二　左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ税務署ハ酒類製造ノ免許ヲ與ヘサルヘシ

一　市街地又ハ税務署所在地ヨリ一里以上ノ距離アル場所ニ製造場ヲ設ケムトスルトキ但シ税務署ニ於テ製造又ハ監督上特別ノ便宜アリト認ムルトキハ此ノ限リニ在ラス

二　酒造税法若ハ本令ニ違反シタル者又ハ其ノ戸主、家族、同居者若ハ雇人其ノ他從業者又ハ税務署ニ於テ取締上免許ヲ與フルニ不適當ト認ムル者カ免許ヲ申請シタルトキ

第二條　酒類ノ製造場ハ敷地ノ連續スルト否トヲ問ハス總テ一製造場ト認ムヘキモノヲ謂フ

、第三條　酒類製造ノ免許ヲ受ケタル者ハ其製造場毎ニ地所建物ノ詳細ナル圖面竝ニ酒造用容器、器具、器械ノ目錄ヲ調製シ事業著手前ニ税務署長ニ提出スヘシ

○但シ酒類變更ノ場合ニ於テ製造場及容器器具器械ニ變更ナキトキ

△二十二

ハ此ノ限ニ在ラス
前項ノ容器、器具、器械ヲ修理シ又ハ前項ノ圖面目錄ニ異動ヲ生シタルトキハ其ノ都度申告スヘシ酒類製造主ノ居所氏名ニ異動ヲ生シタルトキ亦同シ
、第四條△酒類製造主ヨリ前條第一項ノ目錄ヲ提出シ又ハ同第二項ノ申告ヲ爲シタルトキハ税務署長ハ其容器、器具、器械ノ檢定ヲ爲スヘシ其檢定後ニアラサレハ酒類製造主ハ之ヲ使用スルコトヲ得ス
△第五條　酒類製造主ハ毎製造年度ニ於テ製造スヘキ毎酒類ノ見込造石數、製造着手ノ時期、製造方法及其仕込數ヲ記載シ其ノ酒造年度開始前ニ税務署長ニ申告スヘシ但シ新ニ免許ヲ受ケタル者ハ事業着手前ニ本項ノ申告ヲ爲スヘシ
前項ニ依リ申告シタル事項ヲ變更セムトスルトキハ其都度申告スヘシ但製造方法ノ變更ニ係ルモノハ承認ヲ受クヘシ
○第六條　酒類製造業ヲ相續シタルトキハ相續人ヨリ其旨所轄税務署ニ申告スヘシ
相續ノ場合ヲ除ク外酒類製造ノ事業ヲ引繼カントスル者ハ總テ第一

ニ依リ酒類製造ノ免許ヲ受クヘシ此ノ場合ニ於テハ前製造主ハ酒造税法第二條ニ依リ其ノ免許ノ取消ヲ求ムヘシ
▲第六條ノ二　酒類製造主其ノ製造場ヲ移轉セムトスルトキハ移轉先ノ所轄税務署ニ申請シ其ノ許可ヲ受クヘシ
▲第六條ノ三　酒類製造主其ノ製造ヲ廢止セムトスルトキハ免許取消申請書ヲ所轄税務署ニ提出スヘシ
▲第六條ノ四　變災其ノ他已ムヲ得サル事故ニ因リ酒造税法第五條ノ制限石數以上ノ製造ヲ爲ササリシ事由ノ證明ハ酒造年度終了後三箇月以内ニ之ヲ爲スヘシ
第七條　酒類ノ造石税ハ其ノ製造場所在ノ地方ニ於テ之ヲ徵收ス
第八條　酒類ノ造石數ハ容器ノ容量ニ依リ一容器每ニ其ノ現在スル酒類ノ總量ニ就キ之ヲ査定スヘシ
○第九條　酒造税法第八條第二項但書ニ依リ滓引減量トシテ控除スルハ査定石數ノ百分ノ二トス
犯則ニ係ル清酒ニ關シテハ滓引減量ヲ控除セス
●第十條　酒類製造主自己ノ製造シタル酒類若クハ製造場外ヨリ移入シ

タル酒類又ハ醪、酒精、ヲ以テ酒類ヲ製造シタルトキハ其製成酒類ノ總石數ニ就キ造石數ヲ查定スヘシ

第十一條　酒造原料用ノ爲メ酒類ヲ製造スルトキハ其成効ノ時之ヲ檢查スヘシ酒造用原料品トシテ酒類ヲ製造場內ニ移入シタルトキ亦同シ

收稅官吏ハ監督上必要ト認ムルトキハ前項酒類ニ封緘ヲ付スルコトヲ得

第十二條　酒造用原料品トシタル酒類ヲ他人ニ讓渡シ賣入シ消費スルトキ若クハ公賣セラルルヰ又ハ製造場外ニ移出スルトキハ其造石數ヲ查定スヘシ但シ他ヨリ讓受ケタルモノニ係ルヰハ此限ニ在ラス

第十三條　酒類製造主酒類ヲ粕漉セムトスルトキハ着手前ニ其數量時期等ヲ稅務署長ニ申告スヘシ

第十四條　酒類製造主酒類ノ粕漉ヲ爲シタルトキハ其ノ原酒類ノ石數ヲ確證スル能ハサル場合ニ於テハ其ノ總石數ニ就キ造石數ヲ查定スヘシ

第十五條　酒滓、酒粕、蒸溜粕ヲ使用シテ製造スル酒類ハ割水其ノ他如何ナル名稱ヲ附スルモ總テ其ノ造石數ヲ查定スヘシ

第十六條　酒類製造主其ノ製造用ニ供スル醪ヲ他人ニ讓渡シ若ハ飲料ニ供シ又ハ酒類製造用ノ外ニ供セムトスルトキハ其旨直ニ稅務署長ニ申告スヘシ

第十七條　酒母、醪又ハ原料用酒類ノ廢棄亡失若ハ腐敗シタルトキハ酒類製造主ハ其ノ旨直ニ稅務署長ニ申告スヘシ

第十八條　酒造稅法第十二條ニ依リ造石稅ノ免除ヲ請ハントスルモノハ其ノ事實ノ生シタルトキハ直ニ稅務署長ニ申請スヘシ

第十九條　前條ノ申請ヲ受ケタルトキハ稅務署長ノ其ノ事實ヲ調查シ其ノ廢棄若ハ亡失ヲ認ムルトキ又ハ酒類トシテ飲用スヘカラサル所置ヲ施シタリト認ムルトキハ稅金ノ免除處分ヲ爲スヘシ

腐敗シタル酒類又ハ災害ニ罹リ飲用スヘカラサルニ至リタル酒類ヲ以テ燒酎ノ製造用ニ供セムトスルモノハ稅金ノ免除處分ヲ爲シ其酒類ハ燒酎ノ原料品ノ取扱ヲ爲スヘシ

第二十條　酒類製造主ハ酒類製造着手前ニ保證物ヲ提供スヘシ但シ酒造稅法第十三條第一項但書ニ依リ造石數查定ノ都度保證物ヲ提供セ

ムトスル者ハ毎酒造年度製造着手前ニ其ノ旨税務署長ニ申請スヘシ
保證物ヲ増補スヘキトキハ其事由ノ生シタルトキ直ニ之ヲ提供スヘシ
酒類製造主保證物ノ免除ヲ請ハムトスルトキハ酒造税法第十四條ノ一方法又ハ數方法ヲ撰ミ之ヲ申請スヘシ

●第二十一條　保證物ノ種類ハ左ニ掲クルモノニ限ル
（三十年勅令第三八四號及四十一年三月勅令第三八號ニテ改正）

一　金錢
二　税務署長ニ於テ確實ト認ムル有價證券
三　土地
四　火災保險ニ附シタル建物

△●第二十二條　保證物ノ保證價格ハ特別ノ規定アルモノヲ除クノ外税務署長ノ定ムル所ニ依ル

●第二十三條　保證物中金錢有價證券ハ提供者之ヲ供託シ其ノ供託受領

證ヲ所轄税務署ニ提出シ土地、建物ニ關シテハ税務署ニ於テ抵當權ノ登記ヲ登記所ニ囑託スヘシ

●第二十四條　保證物トシテ提供シタル有價證券ノ償却ヲ受クルニ至リタルトキ若クハ建物ノ壞倒亡失シタルトキ又ハ保險契約ノ消滅シタルトキハ酒類製造主ハ税務署長ノ指定期限内ニ更ニ保證物ヲ提供スヘシ但シ建物ニ對スル保險金ヲ受領シタルトキハ其ノ保險金ヲ保證物トシテ供託スヘシ

第二十五條　酒造税法第十三條ノ保證物ヲ提供セサルトキハ收税官吏ハ製造酒類ニ封緘ヲ附シ之ヲ讓渡シ、買入シ消費シ又ハ製造場外ニ移出スルヲ停止スルコトヲ得

第二十六條　納税保證人ハ税務署長ニ於テ納税保證ニ堪フル資力アリト認ムル者ニ限ル

第二十七條　税務署長ハ納税保證人ノ資力納税保證ニ堪ヘサルニ至リタリト認ムルトキハ之ヲ變換セシムルコトヲ得

第二十八條　收税官吏ハ納税保證トシテ保存ノ義務ヲ有スル酒類ニ封緘ヲ附スルコトヲ得

○第四款　酒税

第二十九條　税務署長ハ納税保證トシテ保存ノ義務ヲ有スル酒類納税保證ニ適セサルニ至リタリト認ムルトキハ之ヲ變換セシムルコトヲ得

第三十條　酒類製造主ハ税務署長ニ申出保證物納税保證人又ハ保存ノ義務ヲ有スル酒類ノ變換ヲ求ムルコトヲ得

第三十一條　酒類製造主税金ヲ納メサルトキハ納税保證人又ハ納税ヲ擔保シタル酒造組合ニ通知シ其ノ税金ヲ納メシムヘシ

納税保證人又ハ納税ヲ擔保シタル酒造組合ニ於テ税金ヲ完納セサルトキハ酒類製造主ニ對シ滯納處分ヲ行フヘシ

前項滯納處分ノ後仍税金ニ不足アルトキハ納税保證人又ハ納税ヲ擔保シタル酒造組合ノ各組合員ニ對シ滯納處分ヲ行フヘシ

第三十二條　同一製造場内ニ於テ清酒並ニ濁酒ヲ製造セムトスル者ハ其醸造藏置ニ供スル場所ヲ酒類別ニ特定シ税務署長ノ認可ヲ受クヘシ

第三十三條　税務署長、容器、器具、器械ノ檢定ヲ爲シタルトキハ之

番號容量其ノ他必要ナル事項ヲ標記又ハ烙記スルコトヲ得

第三十四條　收税官吏ハ隨時酒類製造場又ハ酒類販賣場ニ就キ酒類酒造用原料品、器具、器械、容器、帳簿又ハ書類ヲ檢査スヘシ

第三十五條　收税官吏ハ搾器械、蒸溜器械ノ使用停止中之ニ封緘ヲ附スヘシ但シ修理其ノ他必要ノ事故アルトキハ之ヲ解除スルコトヲ得

收税官吏ハ必要ナシト認ムルトキハ前項ノ封緘ヲ爲サヽルコトヲ得

收税官吏ハ必要ト認ムルトキハ酒粕又ハ原料用酒類ニ封緘其ノ他監督上必要ナル方法ヲ施スコトヲ得

第三十六條　自己ノ所有ト否トヲ問ハス容器、器具、器械及製造用原料品ハ收税官吏ノ承認ヲ受クルニアラサレハ酒類製造中ハ之ヲ製造場外ニ移出スルコトヲ得ス

第三十七條　收税官吏ガ必要ト認メテ製造用原料品ヲ指定シ其ノ使用前檢査ヲ受クヘキコトヲ命シタルトキハ酒類製造主ハ其ノ檢査ヲ受クヘシ